
墓守キッチョムのおとぎ話

maruzhiye

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墓守キツチヨムのおとぎ話

【Nコード】

N5274X

【作者名】

maruzhiye

【あらすじ】

この物語は、ヨーロッパ風（設定はフランスですが、架空の世界です）のとある教会から始まります。

主人公キツチヨムはソルマウント教会の墓守をしている若者です。ソルマウントの墓守、それは夜な夜な墓場から這い出てくる死人たちの世話をする仕事。そしてデスダスト、死人を腐敗から救う薬をつくることだった。

友人である謎の死人、スタンリー・ベルフォードとともに町に現れる怪物たちと戦うはめになり、そのことでキツチヨムの人生が大き

く変わっていく…。というストーリー。

この作品は他サイトと重複予定です。

プロローグ 《地獄の入口》

プロローグ 《地獄の入口》

『むかし、むかし…。

あるところにルカという墓守がいました。

彼は地獄から地獄の炎を持ち帰りました。

その炎を使うことによって何年もかかっていたデスダストの製造が、

たった数日でできるようになりました。

死人たちはデスダストを使って腐敗を防いでいたので、

大喜びしましたとさ……』

赤い炎渦巻く地獄の大地。

天を覆う炎はまるで流れる雲のようにゆらゆら揺れている。

大地は黒い土に埋め尽くされ、河となった血が湯気を立てて流れていく。

溶岩のように噴出した血が亀裂となって見渡す限り広がっている。

風が吹きすさび、赤い落雷がところ構わず落ちている。

雷鳴がとどろく中で人間の悲鳴が遠くから、うなるように聞こえてくる。

そんな地獄に二人の墓守がやってきた…。

一人は大きな黒い修道服姿の男。大きな艶のあるマントを羽織っている。

もう一人は幼い子供。小さな薄汚い白い修道服を身に着けている。

赤い炎は彼らを見つけた。炎は渦となって地表に落ちてくる。帰れ…！ 帰るんだ！ ここはお前たちがくるところではない！！

幼い子供は肩をすぼめて男のマントの中に隠れた。

男はマントで幼い子供を包んでやった。

大地の黒い土は耳をそばだてた。おまえらはいったい何者だ…、聞き逃すものか…！ 聞き逃すものか…！！

『われわれ墓守は命を懸けてきたのだ…。デスダストを少しでも完璧なものにするために…。見るがいい、ここが我々の聖地だ…』

落雷は更に数を増やした。雷鳴がとどろく…。やつらが来た…！ 奴らが来たんだ…！！ 墓守が来た…！！

幼い子は体を震わし男の足にしがみついた。

『いいか、キツチョム約束してくれ…、決して掟に背かないと…。掟は墓守が命を落とした証拠だ。ルカのようにすぐれた業績は残せ

なかったが、彼らはわたしたちにいくつかのタブーを残したのだ…、
わかるな？』

地表を流れる赤い血は怒りで煮えたぎった。ルカ…。ルカ…。あの
コソ泥が！！墓守が！！

幼い子供は必死に頷いて見せた。男が幼い子供の頭に手をのせ跪い
た。

『もう帰ろう…』

風は猛威を振るった。恐ろしい勢いで彼らを取り囲む。帰すものか
…！お前たちを八つ裂きにしてやる…！！

幼い子供の目から大粒の涙がいくつも落ちる。

『帰ろう…。墓守は地獄の入口からけっして足を踏み出してはなら
ない。ここが地獄の入口だ。私たちが入ることが許されているのは
ここまでだ…』

幼い子供は手を伸ばし男の首に手を回ししがみついた。

風は地獄の亡者の叫びを彼らの耳に運んだ。たすけて…たすけて…。
聞こえるか？聞こえるか！？この叫びを！

さあ、一步踏み出すんだ…！！一步でいい…そうすればお前らを八つ
裂きにしてやるのに…！！

男が幼い子供を抱き上げ立ち上がる。まるで立ち上る湯気に飲み込まれたかのように二人の姿は消えてしまった。

天の炎は荒れ狂い地上を焼き尽くそうとする。

落雷は地上のあるあらゆるものを破壊し隠れ場所を奪おうとする。

雷鳴は叫び声をあげ地上を揺るがした。

黒い大地は彼らを探すためさらに耳をそばだてた。

風は吹き荒れ気が狂ったように地獄を駆け巡った。

地獄の亡者の苦しみは増し、阿鼻叫喚の世界が地獄を埋め尽くした。

八つ裂きにしてやる…！八つ裂きにしてやる…！

しかし、その声を聴くべき者はすでに地獄を去ったあとだった……。

1. キッチヨムとスタンリーベルフォード

灰色の道と微かに揺れる木々を月の明かりがやさしく照らし出している。遠く山々のシルエットは夜の闇に深く腰を下ろしていた。虫たちはまるで囁きあっているかのように静かに泣いている。その夜の静けさのなかに一層濃い影を落とす若者がいた。季節外れの灰色のマントを肩にかけ、フードで頭をすっぽりと隠している。

ソルマウント教会は遠く町から離れ、深い森に囲まれている。その教会の墓場を囲う柵に腰掛けて、キッチヨムはぼんやりと月を眺めていた。オーハン・キッチヨム・ギボンス、それが彼の名前だった。微かにカールした黒髪は不ぞろいで乱暴に切っているだけなのがそれとわかる。黒い瞳は深い二重で、寝不足の腫れぼったい目をしばしばさせている。頬にうつすらとそばかすがあり愛嬌のある幼さの残る顔立ちをしている。

月は掛布団を引っ張り寝返りをうったかのように黒い雲の向こうに顔半分を隠してしまった。虫の声に耳を傾けると、虫たちの泣き声はさらに声をひそめて、やがて暗い木々の陰に消えてしまった。

キッチヨムは深いため息をついた。頭を垂れ目線を汚れた黒いブーツに落とす。汚れたブーツの向こうに灰色の地面が広がっている。柵から降りると立て掛けておいた鉄の鉤棒を手にとった。まるで地面に引っ張られているかのように重く、ずっしりとしている。鉤棒の先は三つ又に分かれ、まるで鷹の爪のように鋭く曲がっている。三つ又に分かれた鉤棒の先は一本だけ新しく溶接され、微かな月の光を受けて銀色に輝いていた。指でその一本を撫でながらまたキッチヨムはため息をつく、その時だった。微かに教会の窓が揺れた気がした。いや揺れたのは窓ではない。教会の行動に大きな窓がいくつかあり、そのひとつがどうやら開いているらしい。窓は地面にうつすらと温かい光を投げていた。

『揺れたのは光だ…』

キツチョムは舌打ちをすると手にずっしりと乗りかかっていた鉤棒を持ち上げ、地面を弾いて飛び上がり、なんなく柵を飛び越えた。まるで猫が暗い夜道を横切るように首を低くし音もなく墓場をかけていく。窓の傍にたどり着くと壁に背中を押し当て中の様子を伺う。息を殺し耳を澄ます。物音一つしない講堂の中に人の気配を感じる。キツチョムは鉤棒を握りしめた、しかし自分では気づかないうちに口元に微かに笑みを浮かべていた。

『わかってるんだ……。僕の様子を伺ってるんだろう……』

キツチョムは心の中でそうつぶやくと窓枠に手をかけ一気に講堂に飛び込んだ。

その時だ、恐ろしく鈍い音が頭に響いた、額を激痛が襲い目の前が激しく揺れた。

「あが……！」

講堂にいた男も窓に顔を近づけていたらしく額同士を激しくぶつけたのだ。男は低いうなり声を上げながら地面をのた打ち回り、テーブルの下に転がり込んでしまった。

「くそ……！」

キツチョムもはげしい痛みに耐えかね額を抑えながら、こぶしで壁をなぐりつけ悪態をついた。左目からとめどなく涙があふれる。どうやら目もしたたかぶつけたらしかった。男はテーブルの下に潜り込んでしまったままだ。瞬きを繰り返して床に横たわる鉤棒を見つけた。鉤棒に手を伸ばすと一本のロープが床の上を蛇のように滑りキツチョムの足を掴もうとした、慌てて足を上げ蛇の頭を踏みつける。ロープはぴんっと張り、キツチョムの足の下でもがいている。キツチョムは笑みを浮かべ腰をかがめて鉤棒を握った。テーブルの下をのぞき込みむと血色の悪い青白い顔をした男が向こう側でにやにや薄ら笑いを浮かべている。暗いテーブルの下に浮かぶ顔、緑色に変色した隈の上にブルーの瞳。眉が楽しげに上下する。

キツチョムの口元から笑みが消えると同時にロープが激しく波打つ。男はロープを縦に振るう、一瞬にして蛇が息を吹き返したかの

ように空を切り裂き、幾重にも波を打った。蛇はキッチンヨムの右ほほを激しくひっぱたき、講堂に激しい音を響かせた。

「ぎゃっ…!!」

今度は右目から涙があふれ出した。

「おいおい、大丈夫か…?」

キッチンヨムが床にふさぎ込むと男はテーブルの上に顔を出した。その瞬間握っていたロープがテーブルの下に男を引きづり込もうとした。男の顎が激しくテーブルに打ち付けられた。

「うぐっ…!」

「ははは…!」キッチンヨムがロープを持って立ち上がった。

「ぐう…ふざけんよ…」

「どっちがだ! スタン、君は地下室からちゃだめだろ? みんなに見つかったらまた大事だよ」

「ちよっとお前を探しに來ただけだろ? それに、講堂の外には一歩もでてないぜ?」

「一歩たりとも出すもんか! くやしかったら出てみなよ、どうせ戻ってくるんだから!」キッチンヨムは息をのみながらスタンリーを激しく睨み付けた。

「はあ?…ロープ離せよ…」スタンリーのキッチンヨムを見つめる目がすわっている。青白い顔は血が通っていない証拠だった。彼は死人だからだ。金色の美しい髪は白く成り果てていたが、肉体はいたって衰えていないようだった。ロープを握る腕はまるで鋼を磨いたかのような光沢を放っていたし、ロープをまるで自分の体の一部のように扱うことができた。

「いやだ…」

「ああ!？」

「今日はこのロープで君を縛り上げてやる…」

「…いうじゃないか……はなせ!」

「いやだ!」

二人はロープをきつく握りしめ強く引いたり緩めたり、引っ張り

合いを幾度となく繰り返した。その度にテーブルはガタガタと音をたてる。

二人の綱引きは引けば引くほどますます激しくなり最後には頭の上に持ち上げ激しく引きあった。二人がはたと我に返ったときには時すでに遅く大きな六人掛けのテーブルが宙を舞っていた。

テーブルは隣のテーブルの上に激しく乗り上げ、椅子の上に転げ落ちた。凄まじい音が講堂に鳴り響いた。

「ああ……」

「キッチョム、今のはまずいだろう……」

「いそいで！もとに戻すんだ！」

「あ、ああ……」

キッチョムがテーブルに駆け寄ると遠くから足音がバタバタと聞こえてくる。キッチョムが講堂の扉に目をやった。ドアを激しく叩く音、キッチョムを呼ぶモリスの声が聞こえた。ドアノブがギシギシと鈍い音を立てて回りはじめる。そして、空を切るロープの音。ロープはまっすぐドアノブに飛び、激しく波打った。グニヤリと首をねじると観音開きの二つのドアノブに食らいつき巻きついた。スタンリーがぐつとロープを引っ張ると固く結びついた。モリスがガタガタとドアを揺らしている。

「キッチョム！いるんだろう！いったいそこで何をしているんだ！」

スタンリーは顎に手を当てて何か考えている。キッチョムと目が合うと手をあごから離し、指先を口に当てだまっていると促した。

「キッチョム！ここを開けるんだ！」モリスが扉をたたく音が講堂に響き渡る。

スタンリーは鼻から息を吸いドアをじっと見つめた……

「……にや、にやあ……お……」

「え……」

講堂が冷たい静寂に包まれ、いつもの威厳を取り戻したかのようには思えた。できればこの静寂が永遠に続けばいい、キッチョムはそう思った。

目の前に立つスタンリーは静寂に聞き入り満足げに指をたて、笑みを浮かべた。

なんのことはない、いまこの瞬間、キッチンヨムの恐れる最悪の事態を作り出したのはほかならないこの、スタンリー・ベルフォードだ！
「スタンリーイイ！」ドアの向こうでモリスの金切声上がる「スタンリーベルフォード！そこにいるんだな！」ドアを叩き、今にもぶち破らんばかりだ。

キッチンヨムはドアに駆け寄った。ドアに手をあて意を決したようにこう言った。

「：スタンリーは、確かにここにいる！」

スタンリーは慌ててキッチンヨムに手を伸ばしたが、すぐにあきらめ首を振った。

「聞いてくれ！モリス、扉を開けちゃだめだ！その：デスダストが講堂に充満してるんだ、新しいデスダストを作ったんだ！」

モリスが扉を叩く音が止まった。

「それで、ディバイがぶっ倒れたんだ、痙攣をおこして白目を向いてる、外の空気を吸わせるのにスタンが手伝ってくれたんだよ！ディバイの巨体は僕一人じゃ無理だろ！？」

「キッチンヨム！見てくれ！ディバイの奴、口から緑色の泡を吹きだしたぞ！！」

スタンにはやにや薄ら笑いを浮かべながら叫んだ。キッチンヨムが睨み付けると我知らずを決め込んだ。

「ああ：いまここはデスダストに汚染されてるんだ！明日にはもと通りだ約束する！」

「ほ、ほんとうにもとどおりになってるんだろうな：！？」ドアの向こうでモリスの弱々しい声が聞こえる。

「ああ、大丈夫、明日にはすべてもとどおりだ」

「キ、キッチンヨム、まかせたぞ。私は明日はやくに神父様を教皇議会にお連れしなくてはならないのだ：」

「わかってる、おやすみ！寝坊したら大変だ」

「そう、そうだな…、じゃあ、頼んだぞ…」モリスの逃げるように遠ざかっていく足音を、ドアに耳をあてて確かめるとキッチンヨムはほっと胸をなでおろした。

「機転が利くな、はは。さてとこのテーブル片づけて、さっさと地下室へ行こうぜ、酒盛りといこう」スタンリーは手をひとつ叩いた。弾ける音が講堂に響き渡る。

「ああ…」

スタンリーは気のない返事を聞くと転がる椅子を片づけようとするキッチンヨムを見つめた。

だまって椅子を片づけていたキッチンヨムが机に手をかけるとスタンリーは慌てて机に駆け寄り手伝った。

「みんな、お前のことを待ってるんだ」スタンリーがキッチンヨムの目を見つめた。キッチンヨムは笑って見せただけだった。その笑みはどこかさみしく、スタンリーを不安にさせた。

「地下へいこう…」

スタンリーが何か言おうとするのを遮ってキッチンヨムはそういうと歩き始めた。手に付いたほこりを払いながら壁に並ぶ蝋燭台の一本を力強く引いた。低い音が響く、教台の傍の床が動き出し地下へ降りていく階段が現れた。

スタンリーは階段にに向かうキッチンヨムの後姿をぼんやり眺めるのをやめ、慌てて後に続くのだった。

2. 肉屋の娘、マルゴーとアルト、そして『踵にバネを持つ男』

暗い闇がグレスデンの町を包み込んでいた。夜に漂う黒雲に月が完全に覆われるとグレスデンの町の灯さらに温かく光り輝くのだが、今日は少し違っていた。この日はぼんやりと霧が漂っていた。光はかき消されるように遠くに感じるばかりだった。そしてこの霧が数日間グレスデンの町にとどまることをこのとき誰も予想してはいなかった。

タムズの肉屋の看板が海の上を漂う船のように霧の中にぼんやり浮いている。大きな豚の横顔にタムズと書かれたその木製の看板は扉の傍に太い2本の鎖でぶら下げられていた。タムズの店に代々うけつがれてきた自慢の看板だった。

タムズの肉屋は、口数は少ないが太った気のいい父親と二人の娘が商売をしていた。母親はすでに他界し、店主は口数が少ないが、しっかり者の姉のマルゴーがお金を管理し、愛嬌のある妹のアルトが客の相手をしており、娘たちのおかげでタムズの肉屋は繁盛しているようなものだった。

店内では二人の姉妹が慌ただしく口だけを動かし後片付けをしている。姉のマルゴーは妹の恋人について納得がいかないらしくここ数日小言を言い続けているのだ。アルトはずっと姉のご機嫌をとりながら話をしていたが、まるで壁に話しかけているような気分だった。話しかけるたびにつらく、不安になっていく。

「姐さん、フランクは丈夫な靴をつくれるわ。いちど彼に靴をつくってもらいましょう」妹のアルトは大きな肉の塊を木の盆にのせ、無理に笑みをつくりながら言った。横目で姉の反応をじっと見ている。

マルゴーはそのキリットした眉をピクリとも動かさない。整った顔立ちと薄い唇、聡明でとても美しい女性だ。しかし、人の目を見て話すことをしない、それでいてはつきりとした口調や冷静な物言

いをする。それは彼女が動揺して目をあわさないのでなく、目の前にいる人間を相手にしていない証拠だ。そしてその仕草や話し方があらゆる人間に冷酷な印象を与えていた。

「ふざけないでちょうだい。わたしの靴はデニスのつくったものよ。親方の作った靴は一番丈夫なもの、それに息子のアデスが跡継でしょう。フランクは職人じゃないわ、ただの使用人でしょう」

「そう、そうよ、ただの使用人。そう、だから、その：あたし、思い切って言うわ！」アルトは一度持ち上げた気の盆を再びテーブルに置いた。いや、勢い余って叩きつけたのだ。マルゴは驚いたようにアルトを見つめた。

アルトの大きな瞳がまっすぐ自分を見つめていた。ほつれた髪が頬に張り付き一日の労働の疲れをあらわしていたが、小柄な顔に大きな瞳、小さな鼻先が微かにうえを向いていても可愛らしい。笑うと驚くほど大きくなる口がいまはきつく結ばれている。両腕をテーブルにのせ身を乗り出してくる。マルゴは気迫に押されるように上半身をのけぞらし、手に持っていた木の桶をきつく抱きしめた。

「な、なによ……。言いたいことがあるならいいなさい……」

アルトは瞳を閉じ深呼吸をした。瞼を弾いて目を見開くと大きな瞳がさらに大きくなった。

「フランクが言ったの！店を出すって！二人で店を出そうって！……あたしたち結婚するの：彼はもう使用人じゃないわ、りっぱな靴職人……！！」

「わたしに恥をかかせないでちょうだい！！」マルゴは叫ぶやいなや抱きしめていた木の桶をテーブルに叩きつけた。「ふざけないでちょうだい！ふたりで靴磨きでもやるつもり！？そんなこと、そんなこと父さんも許さないわよ！！」

いまやアルトの肩はちいさく縮こまり、テーブルに置いていた手は胸元できつく握りあわされていた。瞳からこぼれ落ちそうな涙でゆらゆら世界が揺れていた。

「ねえさん、父さんはいいって…、ただ……」

「なに？はつきりいいなさいよ、父さんも許したわけじゃないんでしよう！？」

「ねえさんが先に結婚しないとダメだって……」

「なんですって！！」マルゴの手が、体が、怒りと恥ずかしさで震えた。「わたしの…わたしのせいだっていうの……」

「…ねえさんが、ねえさんがこの家にいつまでもいるからいけないのよ！！」そういうとアルトの目から耐えかねたのように大粒の涙が頬をつたった。アルトはもうこれいじょう姉の前に立っていることができなかった。逃げるように駆け出すと二階への階段を駆け上がっていく。

狭い階段に父親の姿を見た、心配そうにアルトを見ている。なにか言いたそうにしているが口元をまごまご動かすばかりで言葉は出てこない。タムズの太った体のわきを小さくなつて通り抜け階段を上がると自分の部屋の扉を開いた。暗い部屋の中に飛び込み後ろ手にドアを閉じる。込みあげてくる鳴咽とともに涙があふれ出た。

マルゴが椅子に腰かけうつむいていると階段に人影をみた。タムズが心配そうにマルゴを見ている。

「父さん…、いま、一人にしてほしいの……」マルゴはいつになく力ない声でいった。

「ああ…、わかつている」マルゴに背を向け階段に足をかけたが踏み出すことはしなかった。タムズは低く小さな声でこういった。

「すまない、お前には先に話しておくべきだったな……。わたしも後悔している、わたしのせいだ、二人を傷つけてしまったようだ…おまえさえよければ、近いうちに式を……」

マルゴは目を閉じうなづくと、両手で顔を覆った。

タムズはマルゴがうなづいたのを見ると、少し安心したように微かに笑みをみせ階段をあがっていた。

マルゴは泣いているのではなかったし、納得したのでもなかった。

た。ただ暗い世界に身を置きたい気分だった。指先からこぼれてくる光を遮るように指先に力を込めて光をふさいだ。まるで仮面をかぶっているようだ。マルゴーは静かに呼吸をして目を閉じた。

男は顔に張り付いている仮面を手でぐいぐい押し付けている。とりたくても取れないその仮面を押さえつけているのはどこからともなく漂ってくる鉄のにおいが鼻先をくすぐっているからだ。男の仮面は下半分が崩れ落ち焼けただれた口元があらわになっている。屋根の上から漂う霧の中に身をなげると通りの石畳に鉄の響く音がこだました。男の体はまるでヤジロベエのように右に左にゆれている、そして体が曲がり普通の男性の半分ほどの大きさだ。黒いマントで体をつつま常に地面に片手をつけて体のバランスを取っていた。遠くにぼんやり浮かぶ肉屋の看板を見つけると嬉しそうに鼻をならし、猿のように片手を石畳に擦りつけながら不器用に歩いていく。

男の目に木製の看板をつなぐ2本の太い鎖が目に入った。男はにやりと笑うと嬉しそうに肉屋のドアに歩み寄っていく。

マルゴーは目を見開き、両手をテーブルに置いた。唇をきつく結ぶ。アルトがフランクと結婚……？まさかこんなばかげた話をきかされるとは思ってもみなかった。町の人間が聞いたらどう思うかしら、きつとアルトのことを憐れむにちがいない、わたしがついていながら、そう思うにちがいない。

結婚……、それともわたしはアルトに嫉妬しているのかしら……？わたしがこの結婚に反対していると知ったら町の人間はわたしがアルトに嫉妬していると思うかしら……。許せる、わたしはアルトの姉でもある、アルトが幸福なら……。

でも、相手があのフランクなのよ……靴屋の使用人のくせして、あの男にどんな靴が作れるというの？売り物の靴を磨くしか能のないあの男にお金が稼げる？稼げるわけない！

店を構えるですって！？あの男は父さんのお金をあてにしているだけ、

私たち3人で稼いだお金よ。1フランだって渡しはしないわ！

わたしはアルトがかわいい。アルトの幸福を心から願ってる、嫉妬なんかじゃない。アルトのためよ、アルトのためなの…。

フランク：わたしはこの結婚を絶対に許さない！あなたを絶対にゆるさないわ。

マルゴーはきつく手を握り、アルトが残していった肉の塊を睨み付けた。うんざりだ、肉屋だなんて…、恥ずかしい…。豚や牛の死肉を切り売りするだなんて…。ただでさえ肉屋なのに、妹が靴屋の使用人と結婚、あんなに可愛らしい妹なのに…。許せないわ、フランクも…なにもかもよ！

そのときだった。ドアに何かが叩きつけられ鈍い音が部屋に響き渡った。マルゴーは驚き椅子から立ち上がった。ドアを見つめながら後ずさった。鎖が引きちぎれる激しい音が聞こえた。

恐る恐るマルゴーはドアに近づいていく。そして、ドアに手をかけ、なにか声をかけようと口を開くのだった。

アルトは床に跪き上半身をベッドに投げ出して声を押し殺しながら泣いていたが、少し落ち着いてくると立ち上がり、ヒクツヒクツと喉をならしながら、窓の傍へ歩み寄った。顔を上げ月を探したがどこにも月は見当たらない。肩を落としたため息をついた。まるで月にも見放された気分。窓の下は濃い霧におおわれている。手を窓にあてアルトは不思議そうにその霧を眺めた。

その霧の中に足を引くように前進する人影のようなものを見た。人影というよりなにか小さな虫のように思えた。

窓のすぐ下は屋根でおおわれており人影が見えなくなってしまった。窓に顔を近づけ下を眺めていると、階下で激しくドアを叩く音が聞こえた。

こんな時間にお客さん…？

アルトは窓から手をはなし、ベットに逃げ込んだ。横になって枕

を引き寄せると、姉のマルゴーのことを考えた。きっと姉さんはお客さんを追い払うわ、姉さんにお客さんを愛想よく迎えることなんてできない。

アルトは体を起こし、座りなおした。枕を抱きながら考えた。お客さんの相手をするのは私の仕事だ。姉さんじゃムリ、追い返すにしても、お肉を売るにしてもきつとお客さんは気分を害するわ。

アルトは立ち上がったが、枕は抱きしめている。

でも、いまは下に降りたくない！いいわ追い返すなら追い返せばいいのよ。わたしはしらないわ。姉さんが一人で何とかすればいいのよ。姉さんの顔なんて見たくないもの！

アルトはベッドに横になり枕を頭に乗せ、耳を塞いだ。だが今度は激しくドアに何かがぶつかる音が聞こえた。枕で塞いだ耳にもその音が聞こえるほど激しい音だった。

ノックじゃない…。

アルトはベットに起き上がると枕をぎゅっと抱きしめている。心臓が激しく鼓動するのがわかった。とても恐ろしく感じた。

タムズの部屋の扉が勢いよく開く音が聞こえ、大きな足音が部屋の前を騒がしく通り抜け階段を下りていく。アルトは枕を放り投げて扉にかけよった。

「ギャアアアアッ！！」マルゴー恐ろしい金切声上がる。聞いたこともない悲鳴とともに窓の外が明るくオレンジ色に光った。振り向き窓を見たが恐ろしくて外を、見る気にはなれなかった。恐ろしさでただドアを開き父親の後を追うことしかできないでいた。

「マルゴー！！」タムズの叫び声が聞こえる。

タムズの後を追い階段をいそいで降りていく、階下に降りると扉の向こうに大きなタムズの背中が見えた。霧の中にしゃがみ込み倒れているマルゴーを抱きしめているのがわかった。何度も名前を呼んでいるがマルゴーの体は石のように動かない。

「姉さん！姉さん！」そう叫びながらタムズに駆け寄った。タムズの背中に触れ跪ずきなんども姉さんと叫んだがマルゴーは動く様子

がない。マルゴの肩から上は焼けただれ、美しい黒髪はあと方もなく消え、黒い塵のようなものがそこらじゅうに散らばっている。白い煙が肉が焼けるにおいとともにあたりに漂い、髪を焼いた異臭が立ち込めている。

タムズがマルゴの体をアルトに引き渡し立ち上がった。涙の止まらない瞳をあげてタムズが睨み付けるさきを見た。そこにはあの黒い人影があった虫のような人影はこちらに背中を向けてもぞもぞと動いている。

月が顔を覗かせあたりをうつすらと照らし出した。

常人の半分ほどの小さな男は鎖の音を響かせて、肩に豚の首をぶらさげた、横顔がちらりと見える、男はアルトとタムズを見つめてうれしそうにクツクツと音を立てて笑っている。

タムズは訳の分からない叫び声をあげながら男に駆け寄っていく。アルトは何度も父親を呼んだがタムズの耳には届かなかった。

すると男は鉄がはじけるような音を立てて高く飛び上がったのだ。タムズの頭の上を飛び越えると恐ろしい速さでアルトに向かって飛びかってくる、アルトの耳にさらに鉄の音が響いた。

「アルトオオオオ！」タムズの泣き叫ぶような声が聞こえた。

男の恐ろしい顔がまじかに迫っていた。男の仮面は鼻も描かれず、細い線で描かれたような目があるだけ。赤い炎のような瞳がちらちらと光っている。仮面の顎の部分は割れて焼けただれた唇が露わになっている。

割れているのは顎の部分だけではなかった。仮面を突き破る二本の角、一本はすでに根元から折れているらしかった。ヒビが蛛の巣状に広がっており、それは角が仮面に施されたものではなく生身の体から生えているものであることを物語っていた。角はゴツゴツしており小さな穴やへこみがある、まるで穴だらけの醜い石のようだった。

アルトは恐ろしきで身動きできず、ひたすらマルゴの体に縋りつき顔をうずめた。

男は石畳の道に踵を叩きつけるとさらに高く飛んだ。月に向かって驚くほど高く飛び上がり遠くの屋根に飛び乗った。太い鎖を月の光の中で撫でながら満足そうな笑みを浮かべた。

男はアルトやタムズには目もくれず闇の中に姿を隠した、屋根を蹴る恐ろしい鉄の音を響かせて……。

3. 地下室の宴

暗い階段の入り口に腰ほどの高さの台があり、ランプが一つ置いてある。キッチンヨムはそのランプに火をともした。キッチンヨムの顔が橙色に照らし出さるのをスタンは傍で見つめていた。

階段を下りていくと短い通路がある。そしてその通路を行くとまた階段……。地上から離れていくにしたがって、笑い声や楽器の音が微かに聞こえてくる。それらのたんなる響きはやがてはつきりとした言葉になり、歌になり楽器が奏でる音楽となって聞こえ始める。

キッチンヨムの目線の先にぼんやりと浮かぶ『デスブーツ』と書かれた看板、靴型のジョッキに赤いワインがなみなみつがれた絵が描かれている。その下には『おまえの死因はなんだ!』とかかかれている。

キッチンヨムはその看板を指先で軽く押した。看板は錆びついた鉄の音をたてて、ギシギシ揺れた。靴のジョッキを照らし出すランプの光がゆれるとワインが波打つように揺れているようだ。

「これはユーモアか？」後ろで不思議そうにスタンが薄ら笑いを浮かべている。

「さあ……」キッチンヨムは看板から目を離すと扉を押して中に入った。キッチンヨムそっけなく返されるとスタンも口を閉じそれに続く。

広く大きな部屋は思ったよりも明るい。太陽の光を見ることができないからだろう、死人たちはありったけのランプと蠟燭を灯しているのだった。

ここは死人たちが夜な夜な息を吹き返し集まってくる酒場『デスブーツ』だ。廃材で作られたようなお粗末なカウンターがあり、酒樽がつまれている。いくつものテーブルがひしめき合うなか天井からブランコがいくつか釣り下がられている。一人乗り、二人乗り……。古ぼけたピアノに、たくさんのガラクタ。酒場といっても廃材置き場のようだ。だがこれが彼らの世界だった。

彼らが行く場所はほかにはない。50人ばかりの死人たちは話をするものもとより、トランプに興じるもの、歌を歌い楽器を弾くもの、演説かさながらに独り言をいつているもの、くるくるとダンスを踊るもの、足元には小さな子供もいる。隠れたり、走ったり、叫び声をあげたり、騒がしいことこの上なかった。しかし、死人たちは騒ぐこと以外することなどなかったのだ。

入口に近いテーブルに座りちびちびとワインを飲む太った男が、キツチョムとスタンが酒場に入るとすぐに気づき顔を上げた。

「スタン、遅いぞ！なにしてたんだ！？」席を立ち巨体を揺らしながら二人のもとへやってくる。

「ディバイ：。キツチョムを見に行くっていったろ？」

「ちよつと見てくるっていったんだ、アレグロの演説が終わるまでに帰ってくるっていったら？」ディヴィの指差す方向に黒いひげを蓄え胸に手をあて大声で叫んでいる男がいた。

「アレグロは詩人だよ」キツチョムがそういうとスタンはその通りだといわんばかりにディバイを見つめうなずく。

「それにだ、まだ演説終わってないだろ、その：ドラゴンが私に火を噴きどうのこうのってまだいつてるじゃねえか」

「アレグロは同じ話をなんども繰り返し返してる！僕が気付かないと思っただか？ドラゴンにケツの穴を溶接された話は、もう126回目だっ！！」

「数えてたのか：？」

「フフ、僕は馬鹿じゃないからね」

「そこまで馬鹿だとは予想してなかったんだよ」

「なんだと！スタン、きみは外にでたんだ！！」ディバイがたまにかねてそう叫ぶと、酒場の音楽が止まり死人の青白い顔が一斉に入口の高い台に立つ三人の男を見つめた。

「おいおい、ディバイなにいつてんだよ。出てないよ、出るわけないだろ！」スタンが笑ってそういうと死人たちは耳に入った言葉をわすれて木製のジョッキを手を取った。楽器は快活な音を取り戻し、

叫び声が酒場にこだました。

スタンは一息ついたが、三人の死人がスタンの言葉だけでは納得いかならしく階段のもとへやってきた。

「ほんとだろうな：外にでてないって」死人が三人、スタンを見つめて付いている。スタンは息を飲み、苦笑いを浮かべている。

真ん中の青白い顔をした男はオスカー・ゲイル。リサーチとフォックスという死人を二人従えてスタンリーを睨み付けている。やつれた顔にさらさらの白髪を真ん中でわけている。目は二重で男前だったがインテリを気取っているようなやさ男だった。

リサーチはスタンより背が高く体も大きかった。いつもゲイルの後ろに立ち人間だろうが、酒樽だろうがとにかく睨み付ける。大きな体だけが傲慢の男だ。

フォックスは意地の悪そうな顔もそうだが性格も悪かった。いつもにやついているが、なにがおかしいのか周りの者にはわからないのだ。とにかくあの黒く汚れた歯と歯並びの悪さが不快だ。ゲイルの後ろに隠れて首だけ出してにやにやしているのだからたまったものじゃない。

「出てないよ、講堂で食い止めた」スタンの肩に手を置き死人の視線を引き受けると、キッチョムは自分の頬のミミズ腫れを指差して言った。みると目元も赤くはれて青あざができている。

ゲイルはキッチョムから目を離し、反応を確かめるようにスタンリーの顔を見た。スタンリーの顎の傷を見つけると鼻を鳴らしにやにや笑った。

リサーチの腕を軽く叩くとゲイルは満足そうにもといた席にもどっていく。残されたフォックスがニヤニヤ笑いスタンを見ている。

「二度死んでみるか：」フォックスの耳元でスタンがそうつぶやくと慌ててゲイルのもとへ逃げて行った。しかし席に着くと脅されたことを忘れてしまったかのようににやにやと笑ってこちらをみている。

「チッ：！」スタンが舌打ちをしてフォックスを睨んでいる。

「仕方ないよ、フォックスは頭がいかれてるんだ」ディブイがスタンの肩に手を置いて言った。「きつと後ろから後頭部を鈍器でおもいっきり殴られて死んだんだ、あ…そう、凶器は花瓶かもしれない。菌で頭い…いや、ああ！もしかしたら、死因は虫歯かもしれない。菌で頭がやられたんだ…、ああっ！！もしかしたら…」

「…名推理だ」スタンはディブイの言葉をさえぎって「でもこれ以上は事件を複雑にするだけだ。やめたまえ」そういうと笑ってキツチョムを見る。

キツチョムは笑っていた。声は立てなかったが楽しそうに笑っていた。スタンは胸をなで下ろした。最近は昔ほど笑わなくなり、時々ため息をつく。そして酒場でみなを迎えるのが日課だったのに、デスダストの実験が忙しいのか、遅くることがよくあった。

「よし、ワインをいただくか！」スタンはゲイルのことで礼はいわなかった。いうのが照れ臭かった。代わりにキツチョムの腕を力いっぱい叩いた。

キツチョムは少し悲鳴を上げたが笑っていた。ディブイは巨体を揺らしキツチョムの背後にまわるとその背中を押しながらこういつて笑った。

「お前の死因はなんだっ！！ははは！」

地下の宴・2・

地下の宴・2・

キツチヨムの前で木製のジョッキを軽々と持ち上げ、ディバイがワインを喉に流し込んでいる。喉元には分厚い肉がタプタプと揺れている。ジョッキをテーブルに叩きつけると酒臭い息をまき散らす。かなり酒がまわってきているようだ。

「美味だ！美味だよお…でも！でも！知っているかい、キツチヨム！」

隣で片膝を椅子の上に引き上げてワインと飲みながらスタンはちらりとディバイをみた。キツチヨムは硬いパンを小さくちぎり口の中へ放り込みジョッキを握った。

「実際のところこのワインは美味だ。でもデスブーツがそう思わせてるんだ。生きてるときに飲んだオルス酒店のワインはこんなものじゃなかった！まるで、そう口の中でクルクルと回りながらいい女がダンスを踊っている。まさにそういった感じだ！」

「いまじゃどうなんだ？」あきれてスタンがいうと、ディバイはふと考えるそぶりをみせる。そして立ち上がってこういった。

「うん！舌の上で大量のノミが飛び跳ねているんだ！」

キツチヨムは口に含んだワインをぶちまけた。スタンはそれを見て大笑いしたがディバイはそれ見たかとしたり顔だ。

「ほら、見たことか！そうだろ？キツチヨム」

「ちがうよ、君がへんなこというからだ…」キツチヨムは慌てて袖でテーブルを拭いている。

「ああ……ごめんよ」ディバイは巨体を椅子におろすと「ほら、あそこを見て。ソファで飲んだくれてる爺さんだよ」

キツチヨムとスタンがソファに目を向けるとひとときわ大きいジョッキを抱いていびきをかいている老人がいる。壊れたソファに身を

うずめ、鼻から頬が薄く紫色になっている。生きている頃は赤かったのである。

「しってるよ、あれがオルスだ」スタンがそういうとキッチンも頷いてみせた。

「オルス酒店のもと親方だ」デイブイはそういつと続けていった「死の間際、町の奴らは親方に死人の免罪符を取らせたんだ。ワインの味を保つためだった。息子はまだ若かったからね。オルスは死んでからずっとそのカウンターの傍に立ち毎日テイステイングしてメモを取った、そして息子にブドウの配合はこうだ、塾生はああだって手紙を書いたんだ」

「で、どうしてこんなノミが飛び回るような味になるんだ？」スタンは話の腰を折った。

「まあ、聞けよ、話し終わってないから……」デイブイは不服を表した目でスタンをみた。「味は日に日によくなっていった。季節が変わり新しい果実を収穫するころにはまた格段に味がよくなる。みんなテイステイングする親方を囲んでワインのうんちくに耳を傾けた、親方は演説さながらに講義をした。しかし、ある日を境にワインの味は変わらなくなった。それ以上に味は悪くなる一方だ。一人、また一人と親方のテイステイングに興味を失っていった……」

キッチンヨムはちらりとソファに深くうずもれるオルスを見た。ただの飲んだくれかと思っていたが、そういう時期もあったのかと思うと少し哀れだ。デイブイの話はまだ終わっていなかった。腰をかがめテーブルに上半身を乗り出している。キッチンヨムは机が傾かないように腕をテーブルに乗せ体重をかけた。

「オルスはテイステイングで味が悪くなっていくのが許せなかった。怒り心頭で手紙を書き、飲んだくれてはジョッキを壊すんだ。オルスがテイステイングする度にジョッキが壊れたんじゃ、みんなたまったもんじゃないだろ？」

スタンはそらそうだとばかりに頷いて見せた。

「……うん、だからみんなでオルスのテイステイングを辞めさせたん

だ。そのかわりあの大きなバケツ…というかジョッキを渡した。その日からあのジョッキでノミのワインをがぶ飲み、カウンターじゃなくあのソファアールがオルスの居場所になった。まるで毎日死んだように…、毎日そう、まるで死んでいるかのように、いや、かなり死んでいるかの…。その…」

「わかってる、とつくに死んでる。死んでるけど、その、魂も失ったかのようだ」

「そう、そのとおり!!」ディブイは合点がいったかのように机を叩くと興奮して立ち上がった。「スタンの言うとおりだ!」

「まあまあ、いいよ、座れよ」スタンがディブイの袖をひっぱり椅子に腰を落とさせた「いまのはアレグロが使った表現を盗んだんだ」「そうか、そうだったのか…」ディブイは尊敬に似たような眼差しを遠くで何やら叫んでいるアレグロに向けた。そしてキッチンヨムの顔に視線をうつすと「その、つまり、僕が言いたいのは、もつと上手いものが食べたくて…おいしいワインが飲みたい…」そういうとディブイは肩を落とした。

キッチンヨムはデスブーツを見渡した。寄進品を集めるのがキッチンヨムの仕事の一つだ。しかし「寄進品」とは名ばかり、どれもこれもガラクタか、三級品、劣化版だった。このワインがいい例かもしれない…。

寄進品は町と教会との契約だ。何百年と続いてき経緯がある。この教会は町なしではやっていけないし、町もまた教会なしではやっていけないはずだった。しかしいつの間にか、この教会は、この墓場が…。町の人々のお荷物となっていた。

「わかってる、わかってるんだ…ディブイ…」キッチンヨムはそういうとディブイの肩に手を置いた。「…僕が何とかする…」

「おいおい、何とかするってどうするんだよ?! こればかりはどうしようもないだろう。ディブイと約束するなら食い物意外にするんだな」

スタンがそう言ったのを耳にかけよう様子もなくキッチンヨムは立

ち上がった。

「そろそろ部屋に戻るよ。」そういうとキツチョムは立ち上がり、椅子に掛けてあったマントを手を取った。「デスダストを作らないと……」

「キツチョム、金曜日には寄進品を集めに行くんだろ？」デイブイが子供のような目をキツチョムに向けている。期待と好奇心が入り混じった目付きだ。

「ああ……」キツチョムは笑って見せた。

「そうか、はは」デイブイが嬉しそうに笑っている。

「なんだ？そんなにうまいものが喰いたいのか？」三人が目を向けると、いつからそこにいたのかゲイルがカウンターに持たれてジョッキを傾けワインを飲んでいる。

「ゲイルだって喰いたいだろう？」いぶかしげにデイブイがそう言う。うとゲイルがキツチョムのもとに近づいてくる。

「まともな寄進品なんてキツチョムには無理だ、手に入るわけがないだろ。町の奴らはいいつのことを死人の使いだとか、悪魔の墓守だとか呼んでるんだからな。なあ、キツチョム、町の奴とまともに話したことあるのか？」キツチョムの顔にゲイルの酒臭い息が吹きかかる。キツチョムはゲイルから目を離れた。事実、キツチョムは町の人間とほとんど会話をしたことなどなかった。恐れられる以上にキツチョムは町の人間を恐れているのかもしれない……。

「おまえは町の人間が怖いんだろ？ハハハ。凶星か？！」

キツチョムのマントを握る手に力がこもった。

スタンは椅子を蹴り上げ立ち上がった。

「おっと！俺は親切でいってやってるんだ。俺を誰か忘れたか？オスカー家のゲイル様だぞ？町一番の権力者だ！いいか、うまいものが喰いたけりゃ、うまい酒が飲みたけりゃ、このゲイル様に頼むんだな。頭を下げてお願いすれば……、そうだな、考えてやってもいい、ハハハハ！」そういうと高笑いをしてゲイルは自分のテーブルへと戻っていく。

スタンが後を追おうとするのをキッチンヨムが腕を握って引き留めた。

「おい、俺はもう我慢の限界なんだけどな…」スタンが腕を引き払おうとする。

「君もそう思ってたろ！？僕が町の人間を恐れてると…」

「……！」スタンは驚いたようにキッチンヨムを見つめた。しかしその通りだった。「そ、そんなこと…」そう言いかけながらスタンは視線を落とした。

「ほんとのことだ…」キッチンヨムはテーブルのジョッキを手に取り「僕は大丈夫だ」そういつて二人にジョッキを持つように促し、微笑んだ。

スタンはジョッキを手に取った。デイブイもそれに続いてジョッキを手に取り立ち上がった。

二人がジョッキを手にしたのを確認するとニヤリと笑いキッチンヨムは叫んだ。

「死者の胃袋に！！」これは飲み干せの合図だ。

スタンとデイブイは慌てるように「死者の胃袋に！」と声高にいうと一気にジョッキを傾けた。三人の喉元に大量のワインが流れ落ちていく。口元からワインが漏れ落ちていく…。三人はほぼ同時にテーブルにジョッキを叩きつけた。

「じゃあ、デスダストをつくるよ」

「ああ、頼んだぞ！俺たちはお前なしじゃ生きていけないんだから、な！デイブイ！」

「そのとおりさ、僕の体はみんな二倍あるからデスダストもみんなの二倍頼むよ！」

「ああ…考えとく…」キッチンヨムはクスリと笑うと二人に背を向けた。

キッチンヨムが階段を駆け上がっていくのを二人は見届け、椅子に腰かけた。

デイブイはちらりとスタンを盗み見た。なにやら真剣に考え込んで

いる様子で言葉のかけようがない。かといってカウンターにワインを取りに行くのも妙に気が引ける。

空になったジョッキの底をただただ覗き込んでいると後ろから後頭部をひっぱたかれた。

「いて！」

スタンがニヤニヤ笑ってディブイを見ていた。

「なにするんだよ！スタン！」

「お前は余計なことじゃべりすぎるんだよ！」

「ああ：ごめんよ：」ディブイが肩を落とすと、ジョッキが目の前に二つ置かれた。

「いいから、はやくワインついで来てくれよ、夜は長いんだ」

「ああ！そうだね、夜は長い」スタンの機嫌が悪くないと思うとほっとしたようにディブイは笑みを見せ立ち上がり、カウンターへ急いだ。

スタンはぼんやりとディブイの巨体を眺めていたが、実のところキツチョムのことでは頭がいっぱいだった。

4. バレル・ガードナーの名推理

バレル・ガードナー隊長のブーツがアルトの薄暗い部屋で音を立てている。ゴツゴツと不格好な音がタムズの耳に響いていた。アルトのベットに腰かけ頭を抱えるタムズの前をバレル・ガードナーは小一時間行ったり来たりしているのだ。彼はグレスデンの自警団の頭領である。胸を張り、ねじれた赤ひげを顎から耳元まで蓄えている。威厳を装ってはいたが傲慢さがにじみ出ている。質の悪い葉巻を口にくわえてもうもうと煙を出している。

「正直に言おう、タムズ」口元の葉巻を指に挟むと手に取った。口に残った煙を舌で押し出すと唇を舐める。葉巻の先の火種を眺めながら続けた「私はさきほどからおまえの言っていることがまったくもって信じられんのだ」

タムズは顔を上げた。涙を枯らした目は腫れぼったく力がない、まるまると太っていたタムズの顔はほんの数時間でげっそりとし、顔色が悪く白くなっていた。

「君は悪魔を見たといったな……。いると思うか？悪魔が……。じつはわたしは神さえも疑っている。このケルビム・サムに誓おうじゃないか、断じて悪魔などおらん」バレル・ガードナーは膝に届くほど長いベストをめくり腰の拳銃に手をあてた。バレルの腰の拳銃は黒い犬の装飾が施してあり、犬の口から銃口が飛び出ている。

「わたしはケルビム・サムで仕留めることができる存在しか認めん。：そしてこの部屋に来てわたしが正しいことを悟ったのだ」

タムズは疲れた目を無理やり上げてバレル・ガードナーを見つめた。

小一時間前、タムズの部屋で話をしていたガードナーはタムズの話聞き終わると、アルトの部屋はどこだと言い出した。そして二人はアルトの部屋にやってきたのだ。そしてガードナーはベッドに腰掛けるタムズの前を赤ひげをなぜながら行ったり来たり……。そして

葉巻をつけたのだった。

「私の半分くらいの背丈で背筋の曲がった黒マントの男…、鉄の音を響かせ鳥のように空を飛び二軒先の屋根に飛び乗る。そしてそいつは角を生やしている。……まさに悪魔だ。そうだったな」

タムズは力なくうなずいた。

「タムズ、ここから通りが見えるな。ちょうどこの張り出した屋根の下が店のドアだろう？」ガードナーが窓の下をのぞき見ると町の人間がランプをもち集まってきた。自警団の団員が持つ松明が炎をあげてあたりを明るく照らし出し、集まる人々の顔を浮き上がらせている。ガードナーが窓から見下ろしていることに誰一人気付いているものはいなかった…。そう、あのスプリング・ヒールド・ジャックを覗いてはだ…。

タムズの肉屋からそう遠くはない屋根の上に大きな煙突があった。煙突は月を背にして大きな暗い影を屋根に落としていた。その影の中にじっとスプリング・ヒールド・ジャックは潜んでいた。

彼が見ている世界は赤い幕で覆われている。ゆらゆら陽炎のように揺れ色を失っていた。黒は強烈な赤に反転し、白いものはうつすらと赤いだけだ。それは彼の目玉が炎でできているからだ。炎が燃え盛る音が耳鳴りのように鼓膜に響いている。昼間になれば日の光は彼の世界をただの白銀へと変えてしまうだろう。

タムズの店を遠くから眺めながら、町の人間の顔を見る。みんな赤く光る瞳をしている。窓の傍で男がなにか口を動かし言葉を発しているのが見える。

なぜそこにいるのか、スプリング・ヒールド・ジャックにもわからないでいた。ただ胸にうずくながここにいるよう彼に命じたのだ。彼はただ胸にうずく何かしらを抑えじっと我慢をしていた。

「アルトはこの部屋に一人だった…」ガードナーはそう言った。独

り言か、それともタムズに答えを促しているのか。タムズは何も言わずガードナーから視線を外し暗い床を見つめている。

「この窓から油を撒けば町の奴らは焼け死ぬだろうな…」

タムズは驚いたように視線をガードナーに向けた。

「この窓から外に出て、油を撒き火をつける。もしくは火のついた油をぶちまけるか…。まあ、どちらにしても簡単なことだ」

「ああ、あなたはなんて恐ろしいことを…」タムズの手がきつく握りしめられた。ガードナーは構わず話を続ける。

「アルトが近々結婚するということのような噂があるな、しかしだ、わたしはあのマゴニーが許すとは思えん。アルトの母親がわり、いまだはこの店の女主人といってもいい。アルトほどのかわいい女性ならば他に良い縁談があるろうに、靴屋の使用人とはな…。まあ、ただの噂だ」

「マルゴーに式の話をした…マルゴーは頷いて見せたんだ！式を挙げることを承諾したんだ！お前に何がわかる！」タムズはたちあがり声を荒げた。

「おっと、そう大声をだすな…。マルゴーが生きていればその口から聞かせてもらおうじゃないか」そういうとドアを見るとばかりに顎を動かす。

そこにはウィリアム・ブロディー医師が立ち尽くしていた。丸い眼鏡をかけ高い鼻、優しく聡明な男で微笑みを絶やさない男だ。だがこのときはばかりは暗い顔をしていた。丈の長い薄手のコートを着ている。大きな黒い革の医療用バッグを手に持ちタムズが大声を上げているのを目を丸くしてみていた。

タムズはブロディー医師に駆け寄ると両手で彼の肩をにぎりしめた。喉から言葉を吐き出させるように激しくブロディー医師の体を揺らした。

「マゴニーは、マゴニーは無事なのか！？」

「ええ、命はなんとか…」強く肩を握るタムズの腕にブロディー医師はやさしく手を置いた「…ですが、顔のほうは…わたしにはどう

しようもない……」

「……も、もどらないのか……」わかっていたことだった、タムズは焼けただれる娘の顔をこの目で見ていたのだ、唇は見当たらず、奥歯が一部はみ出していた。いたるところ血がにじみ出ており、肉から皮がはがれ落ちていた……

タムズはブロディー医師の前に跪き、嗚咽を上げ始めた。

ブロディー医師は部屋に入りながら、襟元のボタンを外し首筋を軽くした。ため息をついてベットに腰を下ろした。

「タムズさん、少々残酷だが、聞いてほしい……」そういうとタムズの背中を見つめ話を続けた。「彼女の唇は、上唇も下唇もわからないほどだった……かろうじてメスを入れたが……喉も焼けている。正直、言葉を離せるか……話せてもいままでのようにはいかないだろう……」ブロディー医師は大きく呼吸をして背筋を伸ばした。「目は、もう見えない……」

タムズが床に頭をぶつけ泣き叫ぶ声が響きわった。町の人も階下にいた自警団も2階に目を向けずにいられないほどの叫び声だ。

ブロディー医師は立ち上がり、タムズの背中に歩み寄り膝をついた。そして肩に手を置いた。

「タムズさん、そのように大きな声を出してはいけません……。マルゴーはまだ気を失っています……。眠っているんですよ。あなたが気をしっかり持ち、マルゴーとアルトを支えなければ……」

タムズは唇を閉じ嗚咽を押し殺した。喉の筋肉が顎の骨をきつくしめつける。目をきつく閉じ、あふれ出る涙を力づくで押さえつけようとした。

「……この町の中でも稀にみる美しい女だったんだが……。」「ガードナーがそういと、タムズはブロディー医師の腕を振り払いたちあがった。ガードナーに駆け寄り襟元を掴むと窓の備え付けられた壁に背中ごと後頭部を叩きつけた。

「お前に！お前になにがわかる……！」

ガードナーは後頭部の痛みに顔をゆがめている。

ブローディー医師は立ち上がり、タムズとガードナーに駆け寄る
「タムズさん、落ち着いて！」タムズの腕をきつく掴むとガードナーを睨み付けた。「あなたも口がすぎますよ！！」

「ああ…」そういうと両腕でタムズの力を失った手を振りほどいた。
タムズは床に崩れ落ちた。

「…すまなかったな、口が過ぎた」

そう口にするガードナーの耳に馬のひづめの音…馬は店の前でとまり鼻を鳴らしている。ガードナーはちらりと外を見た。馬上から飛び降り地に足をつけた若者は肩まで伸ばした美しいブロンドの髪をもっている。

「おっと…グレスデンの王子様のお出ましだぞ…」ガードナーは軽く舌打ちをした。

「ブローディー…」ガードナーはブローディー医師を見た。ブローディー医師が頷きタムズに寄り添うのを確かめると靴音を響かせて階下へ向かうのだった。

5. グレスデンのおとぎ話

狭い廊下の先に階下へ降りる階段の降り口があった。その傍に自警団の若者が一人たっている。自警団おそろいのチョッキを着て、白く硬い帽子を被っている。ガードナーが廊下に姿を見せると背筋を伸ばした。

「いかがでした…？」ガードナーが階段に近づいてくると男は興味深げに聞いた。

「カール…」カールと呼ばれた男は細身の男で、気の弱い臆病な男だったが、ガードナーのそばにいるときは胸を張り偉そうにしている男だ。帽子に一人だけ黒いカラスの羽をつけ自警団副隊長を自負している。

「…アルトは？」

「ええ、下にいます。ほら…」

ガードナーは階段の降り口までやってくると階下を見た。アルトは階段の一番下に腰かけ縮こまっている。タムズの叫び声が聞こえすっかり怯えてしまったのだろう。両手で硬く耳を抑え振るえており、泣いていることは容易に想像できた。

カールはガードナーの目を見つめ答えをじっと待っている。

「いまにわかる…」そういうとガードナーはカールの肩に手を置き引き寄せ、耳元に口を近づけた「いいか、アルトから目を離すんじゃないぞ…」

カールはキョトンとしていたが、慌てて背筋を伸ばすと敬礼をした。

「わ、わかりました！」

「うむ。」ガードナーは頷くと階下へ降りていく。カールも慌ててガードナーに続いた。

しゃがみ込むアルトの体を避けてガードナーは床に足をつけた。アルトに一瞥くると入口へ向かう。扉は開け放たれており外に馬

の首筋を撫でている金髪の男を見つけた。男はロウガン・ハン・オスカー。この町の長、モンスリー・ハン・オスカーの一人息子。そしてご存じ、死人ゲイルの甥である。おそらくゲイルが死んだのはこのくらいの年ごろなのだろう。長い睫に、深い二重の瞼。ゲイルの血がその体に流れているのがそれとわかる顔立ちをしている。

ロウガンはガードナーを見ると自警団の一人に手綱を握らせ、招いてもいないのに堂々と入ってきた。そしてガードナーと言葉を交わす前にうずくまっているアルトを見つけ駆け寄った。ガードナーは出かけた言葉を飲み込んだ。ロウガンはアルトの前に跪き肩に手を置き呼びかけた。

「アルト！アルト！大丈夫か？！」

ロウガンが声を発すると耳を塞いだ手にさらに力を込め、アルトはひたすら頭を振るのみだった。

「かわいそうに……」そういうと立ち上がり、ガードナーのもとへやってくる。さりげなく手を差し出し握手をもとめてきた。ガードナーは思わず手をにぎる。この男お得意のパファーマンスか……ガードナーは思った。

「うん……、たいへんなことになったな……」満足げに頷くと、ローガンは後片付けが放り出された店の中を見渡した。肉も皿も全部放り出されたままだった。気の桶が足元に転がっている。肉の周りをいっぴきのハエが飛んでいる。ガードナーを従えローガンは胸をはり腰に手を置いている、店の中を見渡す姿はまるで自分が主役だといわんばかりだ。

「ええ、ミスターローガン……」ガードナーは仕方なくその芝居にしたかった。

「すみません！通してください！！」

ローガンとガードナーは野次馬に首をむけた。人込みはどうやらその数をどんどん増やしてるらしかった。人込みが波のように揺れている。声を上げるものが誰か悟るやいなや人込みは慌てて道を作

った。

やわらかい黒髪を短く切っている頭が人込みをかき分けていた。開いた道にその姿を現すやいなや店の中に駆け込んでくる。

「アルト!!」

ハンソン・フランクだった。

ガードナーがそれがフランクだと気づいた時にはすでにアルトに駆け寄り抱きしめていた。

「アルト! アルト!」

アルトはかたくなに耳を抑えている。フランクはその手を握りながらも叫んでいる。

「アルト! 僕だ! どうしたんだ!? なにがあった!?!」

アルトはゆっくりと顔をあげる、目の前の男を乱れた髪の間から覗き見る。頑なに耳を抑えていた手が激しく震えている。

「ああ……」アルトは手を伸ばす、しかし手の震えはさらに大きくなるいっぽうだ。泣きはらした瞳からさらに大粒の涙があふれ出した。たまりかねたようにフランクに抱きつくときアルトは大声を上げて泣き出した。

フランクはアルトをきつく抱きしめ「大丈夫、僕がそばにいるだろ? 大丈夫だから!」素晴らしいながら頭を撫で、乱れた髪をなおしている。

「さあ……こんなところに座り込んでちゃだめだ!」そういうとフランクはゆっくりとアルトを立たせた。アルトもそれに従うのだがフランクの胸に顔をうずめている。離れることはできなかった。やさしくアルトの体を抱き寄せながらテーブルの傍に寄り、椅子を引き寄せ座らせた。

自警団の一人が気を利かせて肉を載せた盆を持ち店の奥に姿をけした。

アルトはフランクに体を預け顔を両手で覆い泣いていた。

「フランク、わたしが、わたしがいけなかったの!」アルトはそういうとフランクの二の腕を強く掴んだ。

「な、なにを言ってるんだ、君のせいなんかじゃない。悪いのはマルゴにひどいことをしたやつだろ？君がなにをしたというんだ？」
「何もしなかったの！お客さんが来たと思ったわ。私知っていたのよ、誰かがドアを叩いたのを…でも私、知らないふりをしたわ。お客さんの相手は私の仕事なのに！！わたし：姐さんの顔なんて：顔なんて：」見たくない！！そう思った。だがそのことを口にすることができなかった。姉の焼けただれた顔が脳裏を横切る…。アルトはまた大声を出して泣き出してしまった。

ローガンはガードナーの背中を押し、外に出ようと促した。

入口に立った二人は松明の光をその体にうけている。まるでガードナーは舞台上に上げられた気分だった。

「マルゴは…、大丈夫なのか？」マルゴのことを思いやって聞いているのだろうか？ガードナーは興味の日を向ける野次馬の視線を感じた。

「ええ、命に別状はないと…」ガードナーは言いずらそうにうつむいた。

「そうか、それはよかった。安心したよ」ローガンは笑みをみせた。
「美しい女性だからな、なに、今回のことは少しヤケドを負ったよ
うなものだな」

ガードナーは違和感を感じた。あまりにローガンが楽観的だったからだ。彼は馬鹿ではない。念には念をいれる。何事も慎重をきする男ではなかったか…。

しかし、安心したのか野次馬の中には笑みを浮かべるものもいた。

「いえ……」

「ん？…どうした？」ローガンの目が話をしりとガードナーに訴えかけている。

「顔を焼かれましたったんですよ、生きているのも不思議なくらいです…」

それを聞いたローガンは言葉を失った。野次馬もまた同じだった。

ローガンは手で顎を撫ぜた。

「：悪魔：悪魔の仕業らしいな：」怒りにみちた低い声だ。だがその声は集まった野次馬たちの耳に届くのには十分だった。

なにを馬鹿な……。そう思ったがローガンの顔を見てその考えを捨てるべきだと思った。バレル・ガードナーの性根は腐っていたのだ。そして彼の腐った性根が彼にそう思わせていた。

「ええ：」ガードナーは無意識にそう答えていた。

野次馬たちはいちおうにざわついた。悪魔だなんて……。こわい……。そういった声がそこかしこから聞こえてくる。

「われわれのおとぎ話が現実になったわけだ：」野次馬のざわつきがさらに激しくなった。

ローガンは野次馬を見渡した。野次馬は目に恐怖の色を浮かべてローガンを見ていた。この瞬間、野次馬は聴衆へと変貌していた。

「わたしたちは幼い頃から恐ろしいおとぎ話を聞かされてきた：」聴衆の中の一人の男がその通りといわんばかりに頷くのを確認するとローガンは軽く頷いてみせた。

「うん：なにか悪いことをすれば、夜布団に入るのをいやがれば、やつはやつてくると聞かされた……。われわれの目を焼き、胴体からこの首を切り離すために！」ローガンはまるで聴衆を脅すかのようには声を荒げ、怯える顔を見渡した。「終わらせるんだ：」低い声が聴衆の胸に響く。聴衆は息を飲んだ。

「終わらせるんだ：このおとぎ話を！」

バレル・ガードナーはローガンの言うことの意味が分からないでいた。いやわかりたいとも思わなかった。しかし、ガードナーはいぶかしげに眼を細めると、聞かずにはいられなかった。

「終わらせるとは：、その：？」

「墓守だ：」

聴衆はざわついた。『ハカモリ：』という囁く声がかそこかしこから聞こえてくる。

「墓守を：地獄へ送りかえすんだよ」

ガードナーは驚いたようにローガンを見た。そんなことをしてなんになるのだ？　そう言おうとした。しかしその言葉を飲み込んだ。いや、彼の腐った性根がガードナーに言葉を飲み込ませたというべきであろう。オスカー家の跡取りに意見して得なことなどあるだろうか……？

「われわれの手で恐怖のグレスデンのおとぎ話を終わらせ、子供たちに勇気と安息を与えるおとぎ話を聞かせてやろうじゃないか！！」ローガンは足を踏み出した。まるで舞台にたち聴衆をあおるように拳をかかげ歩きながら叫んでいる。聴衆の目はローガンにくぎ付けになり、首がローガンの姿を追っている。

「ここに誓おう、わたしローガン・ハン・オスカーとそこにいるバレル・ガードナーは必ずや墓守を地獄へ送りかえしてやる！！」

「……！！」指を差され突然やり玉に上がった自分の名前にガードナーは驚き、あやうく声をあげそうになった。しかし聴衆の驚きと期待の入り混じった瞳の輝きに居住まいを正す以外に道はなかった。「ほかに、わたしたちに手を貸してくれるものはいるか！？」聴衆に問うローガンの声は力強かったがすぐに手を上げようというものは出てこない。顔を見合わせお互い牽制している。手を上げようとする男の肘を掴み首を振る女性もいる。

ローガンは鋭い眼光を聴衆に向ける。聴衆は首を縮めて押し黙っている。ローガンの目がドアの近くにたたずむ自警団副隊長のカールを見た。カールは目を丸くして背筋を伸ばし、おそろおそろ手を上げた。

ローガンはカールの手を取り手を力強く握った。「君は勇気があるな」そういうと賞賛の微笑みをカールに向けた。

カールは胸を張ってうなずいた。まるで重大な任務を請け負ったかのように緊張が背中を走った。

カールの握った手を離すとさらに聴衆に目を向け、口を開こうとしたその時だった。

「わたしがお手伝いします！」

ドアの中からハンソン・フランクが歩み出てきた。怒りに満ちた目をしている。思いつめたような表情には硬い決心がにじみ出ていた。

「わたしにも、手伝わせてください！」そういうとフランクは聴衆の前に立った。

聴衆の目がフランクにくぎ付けになる。ガードナーはその緊張感の中、不敵な笑みを浮かべる人間を見た。ほかならぬローガン・ハン・オスカーだ。

役者がそろった：ガードナーはそう思った。以前町にやってきた旅芸人の芝居で同じ感覚を覚えたことがある。芝居の中でここぞという時に出てくる登場人物。その人物が出てくるときの観衆の気持ち。否応なく物語に引き込まれる観衆：あとは幕が下りるまで彼らは芝居の虜となる…。

しかし、ローガンは不敵な笑みをかき消しこういった。

「きみが？ フランク、君はアルトのそばについてあげなければ…」

「いえ、僕も手伝います。アルトは僕の恋人だ：僕にとってマルゴ―は家族も同然：どうしても許せないんだ：」そういうと店の中で肩を落とすアルトをちらりと見た「僕は彼女を守りたい…。傍にいたい…。でも、もしも戦うことで彼女を守る道があるなら、僕は迷わない…、戦います」

聴衆から鼻を鳴らす音が聞こえた。女が顔を隠し涙を拭いていた。誰もが声を上げずただその場に立ち尽くしている。

「ああ…！」そのなかローガンが声を上げた「まさにわたしもガードナーも同じ気持ちなんだ！！君は家族を！わたしたちはこの町を！！命をかけて守ろうじゃないか！！」

ローガンはフランクのもとに歩み寄りフランクを強く抱きしめた。そして、一人また一人と手を上げていく…。もう彼らの肘をひっぱり引き留めるものはいなかった。町の人間は虜となっていた。ローガンはまんまと観衆を舞台に引き上げたわけだ。

民衆とは愚かなものだ……。ガードナーは心の幕を引き下ろした。もうローガンの民衆を煽る声も、騒ぎ立てる野次馬の声もどこか遠くから聞こえてくる雑音のようだった。ただ月の周りに浮かぶ黒雲が風に流されていくのをぼんやりと見ていた……。

もしも、バレル・ガードナーの意識に考える力が残っていれば、遠い屋根の上、煙突のすぐ真下に二つの赤い光を見つけ、それがなんでいるか確かめようとしたであろう。蠟燭の光よりも赤く輝くその光を視野にとらえながら、バレル・ガードナーはそれを見逃していたのである……。

6. 白い霧の中で―ガードナーの家路―

6. 白い霧の中で―ガードナーの家路―

辺りに深い霧が漂い始めた。煙突の陰に隠れているスプリング・ヒールド・ジャックは町の人々が去っていくのをじっとみていた。彼らが姿を消したあと、いくつかの通りの角から白い霧がスプリング・ヒールド・ジャックのもとへ流れてくる。夜はもとの静けさを取り戻す。彼の呼吸は荒くなり始めていた。

自警団隊長バレル・ガードナーは家路の途中であった。ほんの一時前から足元に深い霧がまとわりついてきた。突然霧が発生するのはこの夜で2度目だった。いまや彼の後についてきているのは、副隊長のカール一人である。

「不気味ですね…」カールは霧を蹴り上げながらガードナーに話しかけた。霧が吹きあがり、渦を巻いている。

ガードナーはいぶかしげにカールを見た。

「そうか…？ ただの霧だ」

「そう、そうですね…」自分が臆病風に吹かれているものとガードナーに思われたくはなかった。彼は腰のサーベルを抜いた。月の光が反射した。「私は明日このサーベルを鍛冶屋に持っていき、手入れをするつもりです。墓守を地獄へ送りかえしてやる!!」そういうと足元に揺れる霧に切りつけた。空を睨み付け奇声を上げてサーベルを振り回した。

「お前は俺の言ったことを覚えてないのか？」ガードナーがそういうとカールはサーベルを構えながらキョトンとした目をガードナーに向けた。

「と、いいますと…」

「まずは、その物騒なものを腰におさめるんだな…」

「ああ…！」カールは慌ててサーベルを鞘に戻した。

「いいか、俺はアルトから目を離すなどいったんだ…」

「はあ…、そうでした。しかし、墓守は…」

「お前が町の奴らの茶番に付き合う必要はない」

「はっ…！」そういわれてカールは胸を張った。自分は町の人間とは違う特別な存在だといわれてるような気がした。

「お前は墓守のことをどう思っている？」カールはガードナーの横顔を見た。何か考えているのがわかる。なんだか遠くを見ているのだ。

「はあ…悪魔…」そういいかけてカールは言葉を飲み込んだ。悪魔はおそらくケルビム・サムでは打ち殺せないであろうからだ。「実のところ彼らは…犯罪者です。凶悪な…」

「そのとおりだ」

カールはほっと胸をなで下ろし、言葉をつづけた。

「あるものは海賊の頭領だったと聞きます。ケルト海を死体で埋め尽くし陸を作った。そしてあるものは金で人殺しをする暗殺者だったと聞きます。老若男女、彼はチェスをするように人殺しを楽しんだと…、そして今の墓守は人肉を食し、血をワインのように飲んだと聞きます…」

「そうだ、その通りだ…。しかし、人肉を食し、血をワインのように飲んだという男は、先代の墓守だ…」

エギオン…。その名前を口にしかけたが、ガードナーはやめておいた。エギオン、その名前は忘れようとしても忘れることはできない名前だ…。

暗い町の路地をまだ若いバレル・ガードナーが息を切らせて走っていた。モジャモジャの髭はまだその顎にはなく、赤毛は白い帽子で隠されていた。当時、彼は副隊長だった。いまのカールと同じように白い帽子にカラスの羽をつけていた。そして腰にはケルビム・サム。年老いた隊長が若くたくましい彼に託したものだ。若い

ガードナーは誇らしかった。毎日ケルビム・サムで悪人を仕留める自分を想像して楽しんでいた。

彼はコソ泥を追っていた。痩せこけた男はパンを握りしめ路地を右に曲がり、左に曲がり逃げ道を必死で探している。しかし路地裏は彼の前に高い壁を置いたのだ。行き止まりだった。

ガードナーは足を止めた。ケルビム・サムの導火線に火がついていた。ガードナーの胸が高鳴った。ケルビム・サムに火をつけたのはこれが初めてだった。銃口をコソ泥に向ける。

「パ、パンを盗んだだけだろ……」男はまだ若い男だ、少年のようにも見える。

「それはなんだ？」ガードナーは男のもう一方の手を顎で示した。

「これは……肉だ。パンと肉を盗んだんだ……」

「りっぱな泥棒だぞ。あと5秒ほどだ……ほかに言い残すことはないか？」

ガードナーはこの時をどれほど待ち望んだことか、いまや導火線は火薬に火をつけようとしていた。

「僕は！僕は……」慌てて男は口を開いた。

その時だ、ケルビム・サムが口から火を噴いた。凄まじい音が路地に響き渡り、ガードナーの腕がはじけ飛んだ。ガードナーが宣告した時間よりも2秒ほど早かった。

男は下っ腹に風穴を開け吹き飛んだ。行き止まりの壁に体をぶつけると壁にずるずると背中を擦り付け倒れ込んだ。風穴から白い煙が立ち上っている。

ガードナーはケルビム・サムに触れ銃口に施された犬の装飾を興奮した目で見つめた。ケルビム・サムに触れると熱を帯びている。あたりに硝煙のにおいが立ち込めている。叫び声をあげたいという衝動を必死に抑えながら、くつくつと肩で笑った。

「僕は……僕はソルマントの死人なんだ……」

男の声が聞こえた。振り向くと男はいつの間にか立ち上がっている。胸に空いた風穴に指を突っ込んだり撫でてみたり、不思議そう

に眺めている。白く立ち上る煙を両手で振り払う。

「僕はソルマントの死人なんだ！」男はそういうと慌てて道に落ちているパンと肉を拾い上げた。「これ、返すよ…悪気はなかったんだ！」そういうとガードナーの足元から少し離れたところにパンと肉を並べておいた。「もう、帰らないと…墓守にみつかったらきつとひどい目に合わされる！」

ガードナーは怒りに震えた。まだ熱いケルビム・サムを握りしめ、いいようのない怒りに震えている。それでいて何も言葉が出ない。

死人はガードナーがなにも言わず、怒りに震えているのを見ると反応を見るように笑った。しかし笑みは帰ってこない。男は肩を落とすと「ごめんよ、脅かすつもりはなかったんだ。ただ、外にでたかったんだよ」そういうと駆け出そうとした。

しかし次の瞬間、男は後ろに体をのけぞらし吹き飛んだ。男は細く長い悪魔のような腕に後ろの襟首を掴まれ引き戻されたのだ。ガードナーが見たものは黒く長い鉄の棒。先が三つ又に分かれグニャリと曲がっている、まるで悪魔の手首がついているようだった。吹き飛んだ死人を黒く大きな影がしっかりと受け止めた。

「エ、エギオン…！」

背中 of 黒い影を首をねじり見上げて男は声を上げた。エギオン…たしかにそう言った。いつの間にそこに立ったのか、ガードナーは全く気付かなかった。ガードナーは影を睨みつけたが心の中は恐怖に支配され、言葉を発することができない。黒く大きなマントをはおり、フードを被ったの男の顔はよく見えない。ただ顔に大きな傷があるのがちらりと見えた。

「度が過ぎるな…クロード」

「ご、ごめんよ…。ただ外に出たかったんだ。うまいものを食いたかったんだよ」男はそういうと道に置かれたパンと肉を指差した。

黒い男が深いため息をついたのがガードナーにはわかった。

「すまなかったな…。驚かせたか…」男の声は意外にも優しい響きを伴っていた。軽々と死人をわきに抱えたと「その、黙っていてく

れるか？このことをだれにも話さないでほしい……」

ガードナーはただ頷いた。いやだとは言えなかった。黒い影から感じられる威圧感がガードナーから言葉を奪っていたのだ。

「そうか……」男の口元に笑みが浮かぶのがちらりと見えた。ぶらりと力なくうなだれていた死人が顔を上げガードナーに笑みを向けた。ガードナーと目が合うと嬉しそうに手を振って見せた。

大きな影が体を動かすと、ガードナーは後ずさったが、とっさに手を上げ影に向かって指をさした。

「いいか！だ、黙っててやる！」大きな声を出したが、指先から腕にかけて激しく恐怖で震えている。その声を聴いて男は固まったが、ガードナーはかまわず続けた。「その代り、二度と！二度と死人を外へ出すんじゃない、一歩たりともこの町に近づけるな！！」それがガードナーの精いっぱいだった。素晴らしいがらいつ腰を抜かすかと不安で仕方なかった。

フードが動き、男の顔が露わになった。顔に大きな傷のある男だ。しかし、ガードナーを見つめる目はどこか悲しげだった。

「わかった……。約束しよう……」そういうと男は地面を強く蹴り飛び上がった。壁を蹴って屋根を掴むとひらり体を反転させて屋根の上に飛び乗った。死人をわきに抱えて軽々と屋根に飛び乗ったのだ。ガードナーはその機敏な動きに目を奪われた。

男が姿を消すとケルビム・サムを見つめた。腹の底から怒りが湧きあがる。

「わたしは絶対に認めない……。ケルビム・サムで仕留めることができないものなど……」

ガードナーが腰に収めているケルビム・サムを握りながら何か考えているのをカールは不思議そうに眺めている。

「あの、墓守がどうかしたんですか？」

ガードナーは我に返った。カールの顔を見ると再び歩きながら話を始めた。

「彼らはその罪を償うために生涯を死人にささげた者たちだ。決して許されぬ罪だ：決してな…。だが、今の墓守は少し事情が違う。お前も噂くらいは聞いているだろう」

「ええ、もちろん。その…孤児で、幼いころから教会にいたということくらいは…」

「なにか罪を犯したのか？」

「はあ…、小さいころから町に姿を現してはよくものを盗んだり…。それくらいですかね…」

「そんなところだな…」

ガードナーの言葉を聞きカールはほっと胸をなで下ろした。

「われわれは自警団だ、町を守らねばならん。そして誰よりも現実的でなければならん。噂以上に大事なものは、自らの勘と思考だ。わかったな？」

カールは目から鱗の思いだった。この瞬間自分はまた一つ賢くなったのである。そしてカールは歩みを止めた。

「わたしはこれから行くところがありますので！」

ガードナーは足を止め振り向くと、笑みを浮かべカールを見た。

カールは敬礼をすると足早にもと来た道を戻っていった。

墓守か…。不意にエギオンの悲しげな瞳が頭をよぎった。それだけではない、今まで見たことのない記憶、忘れていたのだろうか…。グロード…死人だ。やつは屋根の上に運ばれようとするときもガードナーを見つめていた。悲しそうな瞳に涙をためて、さみしげな表情が記憶の中でクローズアップされた…。

ガードナーは笑った。死人に涙など…。そうつぶやくと記憶を消し去るように頭を振り、また歩きはじめた。

6. 白い霧の中で一鉄の爪

長く伸びる煙突の影の中に姿を隠していたスプリング・ヒールド・ジャックは月の光のもとへ歩み出る。通りは揺れる霧が漂い流れて川のようなものである。屋根を踵で踏みつけると一足とびにタムズの家の窓の下へ飛んできた。壁に両手をつけてまるで蛙のように張り付いている。

突き出た屋根の上を音もなく動きながら窓のそばにやってくると中を覗き見る。アルトの部屋だった。

アルトの部屋には誰もおらず。乱れたベットがあり、窓のすぐそばにテーブルがあった。ドアが開け放たれており薄暗い廊下が見える。スプリング・ヒールド・ジャックの赤い視野にもそれがしつかりと見てとれる。

廊下が微かに色を変えた。ランプのほの暗い明かりが近づいてきていた。スプリング・ヒールド・ジャックは一度身を隠すところどは慎重に中を覗き込む。ランプを持った女がドアの前でふと足を止めた。スプリング・ヒールド・ジャックはその身を引いた。ドアが閉じる音が聞こえた…。

それと同時につま先をたてるとドアの前を通り過ぎる。片手で体を支えながらも素早い動きだ。壁づたいに進む。隣家とタムズの家との暗い隙間に潜り込んだ。そこにも一つ窓があった。真つ暗な部屋だった。スプリング・ヒールド・ジャックの炎の瞳には女がベットの上で眠っているのが見えた。スプリング・ヒールド・ジャックは息を荒くした。そして窓に触れようとした時だ。ランプを持った女が扉を開いた。スプリング・ヒールド・ジャックは壁に背をつけ、息を殺した。

部屋に入ったアルトはマルゴーを見た。寝息が聞こえてこない、ほんとうに眠っているのだろうか…。ランプをテーブルに置くとベ

ットの傍の椅子に腰かける。あるとはマルゴの胸に手をあててみた。たしかに胸が上下して呼吸している。胸から手を離すと口元を抑え、嗚咽が漏れるのを防ぐ。目から涙があふれ出ていた。涙はどうしても止めることができなかった。

マルゴの顔は包帯で隠されて全く見えなかった。美しい艶を放っていた鼻筋がいまは異様に低くなっていた。口元にかすかに隙間がありそこから息をしているようだった。包帯は赤い血が全体ににじみ出ており、ところどころ乾いて黒く変色している。

ふとアルトは目を上げた、そこにタムズが立っていた。タムズは黙ってアルトのもとへ歩み寄る。タムズの体に顔をうずめ肩を揺らしてアルトは泣き始めた。

スプリング・ヒールド・ジャックはドアの傍で喉を掻きむしりくぐもった低い声を出し始めた。喉が苦しいのだ。頭を抱え天を仰いだ。口から白い煙が立ち上り始めていた。まるで逃げるように暗い路地へと姿を消した。

スカートを激しく揺らし女は家路を急いでいた。広い通りに漂う霧を足で蹴るように歩を進めた。夫が夜遅く出て行ったことをいいことに、子供を急いで寝かしつけると自分は男の家へとしけこんだのだ。若い男はいつになく彼女を引き留めた。まさかこんなに遅くなるなんて思ってもいなかった。楽しい時間はすぐに過ぎ去るものなのだ。

大変なことが起こったと夫はいつていた。夫は自分の仕事の傍ら町の自警団をしていた。大変なこと…。もしかしたら、夫は朝まで帰ってこないかもしれない…。女はそう期待しつつも必死に言い訳を考えていた。

しかし、そんなことを考える必要はなかった。女の耳にはあの鉄の音が響き始めていたのだから。

スプリング・ヒールド・ジャックは屋根を捨てると女の前に降り立ち行く手を阻んだ。女に背を向け地面にかがみこんでいる男が手元で何かいじくっている。鉄の音：女は地面にかがみこんでいるその男が大きな知恵の輪で遊んでいるように見えた。男が小さくなにか言ってるのが聞こえた「アイアン……アイアン……」

アイ：アン……？声をかけようにも言葉が思い浮かばない。小さな男だ。子供のいたずらだろうか……

男がその顔を上げた瞬間、女の背筋が凍った。男の顔はこの世の者の顔ではなかった、醜い角が生えていた。赤く光る瞳……。男はまるで女に玩具を見せるようにその手を見せた。指先には鉄の爪がついていた。いたるところ欠けておりまるでこぎりの刃のようだ。そして錆びついている……だがそれは錆びついているのではない。黒く乾いた血がこびりついているのだ。

女は悲鳴を上げた。その叫び声は路地に恐ろしいほど響き渡った。

自警団副隊長カールはタムズの家に引き返しているところだった。霧がさらに濃くなっていた。靴の中までじっとりと濡れるほど濃い霧だ。足を止め不快な足元に目を向けた時だった。通りに女の悲鳴が響きわたった。耳を疑うほど恐ろしい悲鳴だった。カールは一瞬身を縮めたが、その悲鳴はずっと続いている。

カールは辺りを見渡した。どの路地からも聞こえてくる気がする。世界がぐるぐると回る。やみくもにカールは走り始めた。悲鳴を耳に聞きながら、激しく高鳴る鼓動を胸に感じながら……

女の服はズタズタに引き裂かれ道に散らばっていた。霧がゆれるとそのクズきれが霧の隙間に見え隠れする。服を身にまとっている女の裸体がずるずると霧の中を引きずられ路地裏に消えていく……。髪をつかみ重くなった女の体をスプリング・ヒールド・ジャックは引きずっていた。傷だらけの体から血が流れ出していた。女はもう悲鳴をあげることができなくなっている。すでに女の首は深くえぐ

られそこからドクドクと音を立てて血が流れ出ていた。

スプリング・ヒールド・ジャックは振り向き女をみた。黒目が上を向き、唇がガタガタを揺れている。その口元から泡のように血が湧き出しはじめた。

スプリング・ヒールド・ジャックは女の髪を離した。力なく女の頭が地面に落ちる。

低いうなり声が路地裏に響いた。頭を抱え込むと口元から恐ろしいほどの煙をスプリング・ヒールド・ジャックは吐き出し始めた。目の炎はさらに明るくひかった。

喉を抑えると口から凄まじい音とともに炎を吐き出した。女の髪は一瞬にして黒く焼け焦げ吹き飛んだ、体がねじれ関節が異様に曲がった。死んでいるはずの体が生き返ったように動いている。

女の体が静かになるとスプリング・ヒールド・ジャックは膝を地に落とした。

うめき声をあげ立ち上がる、壁に手をあて体を支えると踵を地面に激しくたたきつけた。

カールは広い通りにでた。揺れる霧のなか妙な音が聞こえる。何かを引きずる音……。足元の霧の隙間に引き裂かれた布切れが見える。カールは膝をつきその一枚を手にとった。赤い血がついていた。

耳に聞こえる奇妙な音に耳を傾けあたりを見渡した。黒いなにかが少し離れた路地にずると入り込んでいく。誰かが腹ばいになり道を這い進んでいるように見えた。膝下の部分だけが見えた。しかし這い進んでいるのではないのはすぐに分かった。つま先が上を向いている。引きずられているのだ、何かが路地裏に人間を引きずり込もうとしているのだった……。

カールはサーベルを鞘から抜くと身構えた。そして息を飲む……。その瞬間、通りが凄まじい炎の音とともに明るく光った。カールは地面に転がったが、いそいで立ち上がると駆け出した。カールの耳に鉄が弾けるような音が響いた。それは頭の上から聞こえてくる。

カールは路地の入口につくと屋根を見た。誰もいない。鉄がはじける音は遠くなりあたりは静寂を取り戻そうとした、そのときカールは足元に恐ろしいものが転がっているのに気付いた。黒焦げになった人だった。男なのか、女なのかもわからなかった。煙を上げ、肉の焼けるにおいを漂わせていた。口を開き関節が曲がっているためかまるでカールに助けを求めているように見える。

腰に力が入らなくなり地面に倒れ込むと目に涙を浮かべながらカールは小さなうめき声を上げる…。

どのくらいそうしていたのだろう…。誰かが来て彼のわきを持ち上げ、助け上げるまでの時間を、そしてそのあとのことを…。ぼんやりと夢をみているだけのよう…。長い時間だった。

7. デスダスト

キツチヨムは小屋に戻ってくるとドアを後ろ手にしめた。ドアにもたれかかりぼんやりと天井を眺めている。棚の上にある大きなガラスの瓶を眺めた。三つ並んだ大きな瓶はすでに二つが空になっており、残る一つには緑色のパウダー状の粉が半分ほどになっていた。デスダストだった。死人の腐敗を防ぎ、傷を癒す。

キツチヨムはデスダストがこれほど少なくなったのを見たことがなかった。減らしたのは自分だったがどうすることもできなかった。いつの間にかデスダストを作るのをさぼるようになっていた。作ろうと思うのだが、作らなかった。ただの怠慢に思える。自分が情けなく思えた。

ドアから背中を離すと大きな黒々とした窯に近づく。キツチヨムが見上げるほどの大きな鉄の塊だ。両開きの扉は重く、一度に開くことはできなかった。片方ずつ身を入れて扉を開くと、内側にもう一つの鉄の塊、二重の窯になっているのだった。そこにも扉がついていた。小さな鍵穴のついた扉だ。

襟元に手を突っ込み鎖のついた小さな鍵を取り出した。鍵を鍵穴に差し込みまわしすと窯がガタガタと音をたてた。両側から鉄の杭が二本飛び出す。キツチヨムは杭を掴むと一本を上に取り上げ、もう一本を下に引き下ろした。ガタリという音とともに鍵が外れ扉が浮き上がり隙間から赤い光が漏れ出した。

扉を開くと格子状の鉄の枠が現れる。その真ん中に赤い水晶玉がある。だがその水晶玉は赤く見えるだけだ。窯の中に炎がありその水晶玉を通して炎をみることができるようになっているのだった。

キツチヨムはその水晶を覗き込み炎を見つめた。キツチヨムの顔が赤く照らし出される。水晶を通してみる炎はさかさまに映し出さ

れ、まるで滝のように流れ落ちている。

キツチヨムの瞳の中にも炎が映し出された。炎がどんどん強くなっていく…トグロを巻いて上も下もわからなくなる。窯がガタガタと揺れ始める。炎の奥底から人の悲鳴が聞こえ始めた。キツチヨムは耳を澄ます。そして瞳を閉じた。

突然、窯が吹き飛んだかのような凄まじい音がキツチヨムの耳に響いた。炎はキツチヨムの足元を音を立てて走り、凄まじい風を巻き起こした。雷鳴が響き渡る…。

キツチヨムはゆっくりと瞼を持ち上げた。すでにキツチヨムの立っているのは墓守の小屋ではなかった。天がわれたかのような赤い落雷が幾重も走り。遠くから止むことのない悲鳴が聞こえる。黒い土の地面に赤い血が湯気を立ててながれていた。焦げ臭いにおい、微かに硫黄のようなにおいが混じっている。まるでデスダストのようなおいがあった。ここは地獄だった。

いや、地獄の入口だ。そうエギオンは教えてくれた。そして墓守は地獄の入口からけっして足を踏み出してはならないと…それは墓守のタブーの一つだ。

何世代遡るのだろうか、昔一人の墓守がいた。彼の名前はそう、『ルカ』だ。地獄から『地獄の炎』を持ち帰った男だ。どうやって生きたまま地獄へいったのだろうか？いまや第2の窯に収められている地獄の炎を通して墓守たちは地獄の入口にたつことができるようになった。

当時デスダストを作るためには何年も時間をかける必要があった。しかし、ルカの持ち帰った地獄の炎はたった七日でデスダストをみごと完成させたのだ。そしてその炎はけっして消すことはできない…。永遠に…。

キツチヨムの耳にエギオンの声が聞こえる…。子供のころキツチ

ヨムはエギオンと共にこの地獄に来たことがあった。少年だったキツチヨムは恐怖で震えていた。目に涙をためながらずっとエギオンの足にしがみついていた。

『何世代にもわたり墓守は命を懸けてきたのだ。デスダストを少しでも完璧なものにするために……。見るがいい、ここが我々の聖地だ……』

キツチヨムは辺りを見渡した。どこを見渡しても同じ景色、雷鳴と悲鳴、血の河と吹きすさぶ風。どこを向いても不思議と正面から風が吹いてくる。

『いいか、キツチヨム約束してくれ、決して掟に背かないと……。掟は墓守が命を落とした証拠だ。ルカのようにすぐれた業績は残せなかったが、彼らはわたしたちにいくつかのタブーを残したのだ、わかるな？』

少年だったキツチヨムにはよくわからなかった。でも頷いた。この場所がとても恐ろしかったからだ。

エギオンは地に膝をつけるとキツチヨムに目線を合わせた。優しく微笑んでいる。

『もう帰ろう……』

その言葉を聞くとキツチヨムの瞳から自然と涙がこぼれ落ちた。エギオンにしがみつくと何度もうなずいた。

『帰ろう……。墓守は地獄の入口からけっして足を踏み出してはならない。ここが地獄の入口だ。私たちが入ることが許されているのはここまでだ……』

…キッチンヨムはゆつくりと目を閉じた。雷鳴も悲鳴も、燃え盛る炎の音も遠くなっていく…。

…つぎに瞼を開くとキッチンヨムはもといた小屋に立っていた。

7. デスダストー2

薄暗く冷たい小屋の中は乱れていた。確かに部屋に存在するものはあるべきところへ収められていたが、この部屋の空気がそう思わせるのだろうか。

キツチョムは部屋の中を見渡した。幾世代にもわたり、墓守たちはこの部屋での生活を強いられた。扉は自由に開き、自由に出入りすることができた。窓も開くことができる、その新鮮な空気を部屋に入れることもできる。しかしここは牢獄のようだ。そしてなぜか逃げ出したものはいない。

キツチョムは扉に目をやった。扉に古い傷がついている。何者かが掻き爪った跡がのこされていた。爪が割れ血の跡が黒く木の扉にしみこんでいた。ベットの柱には深く削られた後、キツチョムはここに鎖でつながれた何かがあったと思っていた。そしてそれは墓守自身をつないだものであることも容易に想像できた。この部屋の黒く変色した汚れ…。そのすべてが血の跡であることも…。

天井の柱の張りにも無数の傷跡、首を吊ろうとしたのは何代目の墓守だろう…。

世界のどこから連れてこられた凶悪な犯罪者たちはこの墓場で残りの人生をソルマントの墓守として過ごした。先代の墓守のエギオンもまた犯罪者だ。彼はそのことを否定したことはなかったし、過去を語ることは一切しなかった…。

ただ、キツチョムは違った。

『お前は、ちがう…。お前は特別な存在なんだよ…』エギオンはそういった。彼は犯罪を犯したことなどなかった。人から恨みをかうことなく、この墓場でひっそりと生きてきたのだ。彼は物心ついたころから このソルマントにいた。孤児だった。

エギオン…もし僕が特別な存在だったとしても、それは僕にとつ

てどんな意味があるの？いま、キツチョムはそうエギオンに聞いたかった。僕はルカのように偉業を成し遂げるような存在じゃない。それに偉業をなしとげたとしても、僕に目を向けてくれる人はいらぬの…？僕に目を向けてくれる人なんていないだろう…。僕はソルマントの墓守だ。

たとえ墓守の歴史の中で特別だとしても、僕はこの世界でもっとも孤独な存在だ。ねえ、エギオン、だれが僕に温かい目を向けてくれるの？

僕には父も母もない。もし父親と呼んでいいなら、エギオン、あなたが僕の父親だ…。キツチョムはマントを脱ぎ壁にかけた。黒く艶のある重いマント、エギオンが残したマントだった。ぼんやりとマントを眺める。手を伸ばしてマントに触れた。

でも、あなたももういない…。

7. ーデスダストー3 (前書き)

7. デスダストー3

キッチンヨムはマントから手を離すと書棚の前に歩み寄る。壁いっぱいには書棚が並べられ、乱雑に書物やひもで縛った書類が放り込まれている。キッチンヨムは何冊かの本に目を通していた。しかしどれもエギオンがキッチンヨムに話してくれた内容だった。だからほとんどの本に目を通していかない。残りの本や書類も結局すべてエギオンがキッチンヨムに教えたことばかりだろうから……。エギオンは朝日が昇る時間になっても書物を開いていた。夕暮れ近くキッチンヨムが目覚めると書物を開いたまま居眠りをしている。そんなことが日常茶飯事だった。

キッチンヨムは書棚に歩み寄ると本と壁の間に手を差し入れた。右手で落ちそうになる本を支えながら分厚い一冊の本を取り出した。ページとページの間にメモや何かがたくさん挟まっており、それらがあちこちから飛び出していた。それらが落ちてしまわないように革ひもできつく結ばれている。

それを机の上に置くと革ひもをほどいた。その本はバサリと音をたてて開き、メモや紙切れがページから吐き出された。キッチンヨムは折りたたまれた分厚い紙をとりだすと本を傍らに引き寄せ机の上に広げた。

地図だった。スタンが言うには世界の何百分、何万分の一の地図……。この地図は世界の実際の大きさよりもっと小さいかもしれないかった。そして海は描かれている陸地よりもっと大きい。世界のほとんどが水でできているらしいのだ。キッチンヨムはスタンがまた冗談をいっているのかと思った。地図の上では海はまるで川のようなだったからだ。だが、この陸地の端から川を挟んだ向こう岸は天気がよく晴れ渡っていても、どんなに目を凝らしても見えないほど距離があるのだとスタンはいっていた。

そしてソルマントは小さな点、いや点よりも小さい。この辺りだ

…。キツチョムは地図に顔を近づけ覗き込むが見えるはずがなかった。スタンはキツチョムが地図を覗き込むのをみると腹を抱えて笑うのだった。世界のどこをさがしても地図を覗き込むのはキツチョムだけだという…。たしかに…おかしかった。

地図から目を離し、本のページをめくるとそこには大きな黄金の町が描かれている。たくさんの人や馬がとても小さく、豆粒のようだ。スタンは笑って教えてくれた。これは宮殿で国を治める王が住んでいるのだと。それが町ではなく宮殿であることに驚いた。いたい王様はどんな生活をしているのだろう…。宮殿の周りにうっすら影の部分があった。そこに町の人に住んでいるのだという。影の部分は遠くうっすらとどこまでも続いている。とても大きな都市だ…。スタンがいうには東へ行けば氷で宮殿を作った女王がいるとのことだった。氷の宮殿…。一度でいいキツチョムはその宮殿を、世界中の宮殿を見たいと思った。

たった一冊の本を見ているだけで、キツチョムはまるで夢の世界を覗き見ている気分だった。墓守の残した書物やデスダストがともちっぽけに思える。

ページをめくると一枚の紙切れが机の上に落ちた。その紙切れを手にとった。それはスタンがキツチョムにくれた船の半券だった。キツチョムがどうしても欲しいとスタンにせがんだものだった。

本のページを見ると大きな帆船の絵があった。三角形の帆と四角形の帆を幾重も重ねたその船は地平線をバックに白い水しぶきを高くと上げていた。帆は膨らみ風をしっかりと捕まえている。帆船は風を受け馬よりも早く走るらしい、とてつもなく大きいのに海の上を浮かんで進むのだ。

スタンはこれに乗って海の向こうグレートブリテンというところに行った。紙切れはその時の半券だった。残念ながら残りの半分は船乗りが持って行ったということだった。それが船に乗る時の決まりらしい。

半券をスタンがゴミだといって捨てようとしたのを見て慌ててキ

ツチヨムはいらないなら欲しいといった。スタンは怪訝な顔でキツチヨムに半券を差し出したが、なんども「もう乗れないからな」といった。キツチヨムは半券を掲げて眺めながら何度もうなずいた。スタンの言うことなど耳に届いていなかった。うれしくてしかたなかった。これを持っていればいつか自分もあの船に乗れるような気がした…。

そしてこの本をスタンがキツチヨムにくれたのは、彼が死んで、キツチヨムの前に初めてソルマントの死人として姿を現した日だ。彼はキツチヨムの前に歩み寄ると本を差し出しこういった。

「死人には必要ないからな…」そう言って笑っていた…。

その日から毎日この本を読んだ、メモの細部まで。しつこくスタンに話をせがみいろんな話を聞かせてもらった。キツチヨムが不思議に思うことは彼がなんでも説明してくれた。本を開くと胸が高鳴り、まるで知らない土地を渡り歩いている気分になれた…。

しかし、ある日ふと、気付いたのだ。温かいスープを飲んでいた時だったろうか…。それとも布団に潜り込んで寝返りをうった時だったろうか…。キツチヨムの胸に、耳に、いまはもう体の感覚だけが記憶してる…。それは突然やってきた…。

「死人に必要なものはない、墓守にも必要ない…」

キツチヨムはこの本を革の紐で硬く結び、書棚の奥へ、見えないところへねじ込んだ。悔しくて、情けなくて…いいようなない悲しみが彼を苦しめた。

それでもキツチヨムは笑って過ごせた。デスダストを作り、ワインを飲み、死人とダンスを踊ったり…。歌を歌ったり…。ソルマントの墓守をちゃんとやってのけた、ずっと笑って過ごせるはずだっ

た。あの日までは…。グレスフォードの老婦人と言葉を交わすまでは…。

8. グレスフォードの老婦人

暗い森の道を馬の背に揺られキツチョムはレイモンドの町へと向かっていった。深い闇が森を覆い、その闇に木立の影も飲み込まれるほどだった。栗毛の馬は鼻をならしながら草の匂いを嗅いだり、木々の隙間に見える青い空をぼんやり眺めながら歩を進めた。まるで散歩にでもくり出したかのように歩を進めている。

キツチョムは夜目が効いた。幼い頃からというよりずっと夜の世界で生きていたからだろう……。教会の人間が首をかしげ不思議に思うほど夜の世界を光なしで驚くほど速く走ることができたし、どこになにがあるのか初めから知っていたかのようにあらゆるものを暗闇の中から見つけることができた。それでもキツチョムはみんなと同じようにランプを使い、ロウソクを灯してすごしてきた。

しかしこの日は明かりを持って行かないようにしている。もう、何年もそうしている。習慣になっていた。

この日は町に寄進品を集めにでかける日だった。

レイジーの鼻の向ける方向には黒い棘のような草が生えているばかり、見上げた空には星は見当たらなかった。

「レイジー。あまり遅いと日が昇るだろう……。いつもと変わらない森がずっと続いているだけだよ……」

キツチョムは笑みを浮かべるとレイジー・フォンデモンテの太い首筋を撫でた。暗い夜道でも微かに光沢を放つその栗毛の毛並みは滑らかで温かかった。

わかってるよ……。レイジーはそう言いたげに鼻を鳴らした。でも、レイジーフォンデモンテは軽快に蹄の音を闇にしばらく響かせると、忘れてしまったかのように速度を落とした。

「ああ……」キツチョムは苦笑いを浮かべ、懐からかすかすになったパンを取り出し口に運んだ。

じつのところレイジー・フォンデモンテは自分のすべきことをしっかりと理解していた。墓守と町に入ったら絶対に足をとめるな。これは絶対だった。足を止めず全速力で駆け抜けるのだ。一筆書きで線を描くように町の入り組んだ通りを一気に駆け抜ける。けっして墓守の手綱に頼ってはいけない。

ロシュフォール・レックス、馬小屋の主からきつく言い聞かされてきた。彼の黒毛は月の光をうけてとても艶やかに輝く、どの馬よりも早く走れて力が強かった。そしてだれよりも、もしかした人間よりも頭がいい馬かもしれない。

彼らがひたすら風を切り蹄で地面を蹴っている間、墓守は道に放り投げられてる白い袋を器用に馬上から鉤棒で取り上げては背中に取り付けられたたくさんのフックにひっかけていく。白い袋を一つとして逃すことはない。

少しづつ背中が重くなってくるがレイジー・フォンデモンテに取っては大したことではなかった。

いつのころからか彼にとってこの仕事は一番大好きな仕事になっていた。だから彼は体力を温存させていた。

そしてキツチョムを背中に乗せての町へ寄進品を集めに行くみちすがら、のんびりした時間を過ごせるのはこの時だけだった。彼はこの仕事が好きだったが、キツチョムはもっと大好きだった。

キツチョムが手綱を強く握りしめるのがわかった。手綱をとおして彼の緊張感がレイジー・フォンデモンテに伝わった。レイジーが顔を上げると木々の隙間にグレスデンの塔バルバドスが見えた。町にたてられたバルバドスの塔は中心に高くそびえたっているのだ。町はもうすぐそこだった。

8. グレスフォードの老婦人―2―

グレスデンの周りに茂る木々や草花の間には崩れた人の手が加わっているであろう小さな岩山がどこどこに頭を出している。それはこの町が城下町であり城壁で囲まれていたことを物語っていた。当時は今以上に繁栄していたことだろう。当時の面影を残すものはすべて遺跡のようにひっそりと町の風景に溶け込み、いつのまにか誰からも顧みられることはなくなっていた。

土の道がしだいに薄くなりところどころ石畳が現れた。丸いゴツゴツした石畳にうっすらと残る轍の跡がこの町の古さを物語っているがキツチョムは気にせず手綱を握った。レイジの蹄の音色が蹄鉄の石を叩く乾いた音にかわっていく。町の入口が見えた。灰色の石畳が闇へとつづいてるようだ。町の灯はこの日極端に少なくなり、グレスデンの町はひっそりと静まり返っている。闇に包まれる町は大きな口を開けているようだった。その口はキツチョムとレイジを飲み込む。あとは聞き耳を立て彼らが去っていくのをじっと待っているだけだった。

キツチョムは鉤棒を握りしめ強く手綱を引いた。緊張感がレイジの前足を高々と上げさせた。レイジは前足で空を掻きむしると勢いよく首を振り下ろした。レイジの前足が石畳を激しく叩くとキツチョムは風に包まれた。激しく吹き付ける風を交わすようにキツチョムは上半身をかがめ、あぶみに乗せた足をレイジの横っ腹にしっかりと固定した。両手でしっかりと鉤棒を握りしめる。

「ハアッ！！」

キツチョムは足を緩め叫び声と共にレイジの横っ腹をあぶみで蹴りつけた。「まだだ：君はもつとはやく走れるんだ！」レイジにはキツチョムの言いたいことが手に取るように分かった。彼の体の中から熱いものが込みあげてくる。叫び声を上げずにはいられない

かった。

レイジーのいななきは石畳を飛び跳ね、家々の壁にぶつかり夜の闇に響き渡った。

キツチヨムとレイジーは町の入口を蹄鉄の音を打ち鳴らし、落雷が天を裂くようなスピードで駆け抜けた。

風はキツチヨムの耳元で悲鳴を上げた。暗い街並みが風に吹き飛ばされていく。吹き付ける風を真っ向から迎え撃つようにキツチヨムは目を見開いた。道に転がる白い袋が彼の目に飛び込んでくる。マントが風を捕まえようと激しく音を立てている。

右に流れゆこうとする袋をまるで川の中の魚を捕らえるかのよう
に目の端でとらえるとキツチヨムは鉤棒を振るった。すでに次の袋
をキツチヨムはその目に捕らえていた。鉤棒の先に引っかかった袋
はキツチヨムの周りを円を描くように吹き飛んだ。キツチヨムは上
半身を後ろに倒しそのまま次の袋を鉤棒で捕まえた。

一瞬の出来事だった、二つの袋は鞍のフックに収まった。しかし袋
は恐ろしいほどの勢いでまだ流れてくる。

レイジーは必死に走った。その瞬間、鉤棒の間合いよりも遠い場所
に袋が流れていくのが目に映った。でも止まらなかった。

「絶対にとまるものか!!」

キツチヨムは片足をあぶみから離し、レイジーを跨ぐと濁流のよ
うに流れていく石畳に今にも飛び込もうとする。あぶみに残った片
足に力を入れると体を流れに落とした。手を伸ばし、鉤棒を槍のよ
うに突きつける。キツチヨムの体が地面に落ちていく。手首をねじ
り力を入れ、鉤棒を天にかざした。奥歯を力いっぱいかみ合わせる
と自由な足を振り上げる。そして激しく流れゆく石畳を鉤棒の末端
で力の限り弾いた。

キツチヨムの体が宙に浮いた。あぶみにかかった足を軸に体重を
移動させ片足を鞍に乗せた。キツチヨムの左手に袋が落ちてくる。

鉤棒の末端を握るとキツチヨムは鉤棒を大きく振り回す。目の前

に流れてくる袋は消えてしまったかのように鉤棒の先が持つて行ってしまう。鞍につながれた袋は確実に数を増やしていった。レイジの耳の後ろでキツチョムのマントが音を立てて暴れていた。

レイジの前方に黒く大きな壁が立ちはだかった。ロシュフォル・レックスの黒い壁だ。ロシュフォルは言った。『俺はあの道を全速力で駆け抜け壁に突っ込み、そして曲がることできる…』

「僕にだって…!!」

黒く大きな壁は驚くべきスピードでレイジに迫ってくる。

「とまるもんか!! 絶対に足を緩めないからな!!」

レイジは首を激しく振りたてがみを揺さぶると、さらにきつく石畳を叩いた。レイジの目線が壁伝いに連なる暗い路地に向けられた。曲がり角だ。

激しく石畳を蹴りながら体を倒す。全体重が四本の足にかかる。

首を低く落とそうとするがレイジの首は浮き上がっていく。体が徐々にバランスを失っていく…。レイジの首筋に冷たい汗が噴き出した。曲がりきれそうになかった。

「吹き飛ばされる!!」

レイジは足を跳ね上げ目を閉じた。

キツチョムの目にも 迫りくる壁が見えた。あぶみから両足を外した。レイジの体が激しく傾くと鞍を蹴った。宙に投げ飛ばされる瞬間反転し片手で鞍を掴む。レイジの体を引き寄せ、力いっぱいあぶみに片足を踏み入れレイジの体を固定した。宙を舞う手綱がキツチョムの視野に入った。両手は塞がっていた。キツチョムは目を見開くと目の前の手綱に噛みつき、首の筋が切れんばかりに手綱を引きあげた。

レイジの首に力が加わった。突然レイジの体はバランスを取り戻した。暗い路地に恐ろしい速さで吸い込まれていく。

レイジーが目を開いた時、暗い路地が吹き飛び月の光が届く広い通りがすぐそこに迫っていた。前足を高々と上げながら、後ろ脚を蹴り上げた。キツチヨムを背に宙を舞った。キツチヨムが叫び声を上げた。

「レイジー、レイジー、君はすごい!!」

月の光で輝く石畳に蹄鉄の音が響きたったときレイジーは今までにない最高の気分を味わっていた。

「僕はいま最高の仕事をしたんだ!!」

だからといってレイジーは足を止めなかった。『墓守と町に入ったら絶対に足をとめるな…』だ。

8. グレスフォードの老婦人―3―

レイジーは悔しきで足を踏み鳴らした。首を振り地団駄を踏んでいる「どうして…こんなことに…」レイジーは悔しくてたまらなかった。最高の仕事をした矢先、広い通りを曲がったところでキツチョムは綱を強く引き、レイジーの前足を振り上げさせ首をあらぬ方向へ向けさせたのだ。レイジーはわけがわからず暴れる以外しうがなかった。

「落ち着いてレイジー！落ち着くんだ！」馬上でキツチョムが叫んでいる。手綱を右に左りに引きながらレイジーが暴れるのを制止させようとする。

「あれを、あれを見て…」

ようやくレイジーは落ち着きを取り戻した。暗い道の先に明るい光がぼんやりと揺れている。右へ…左へ…右へ…黒い影がランプを持ってなにか合図を自分たちに送っているらしかった。

レイジーがおとなしくなると、闇にぼんやり浮かぶランプの光はびたりと止まった。自分の存在を知らせるためにランプを振っていたのは明らかだった。キツチョムは馬上でしばらくランプを見つめていたが意を決したようにあぶみから足を離してレイジーの背中から飛び降りた。

レイジーは首を振り鼻を鳴らした。寄進品集めで足を止めてしまったうえに、墓守が背中から降りてしまうなんて…あつてはならないことだ。

キツチョムはレイジーに目を向けると彼の鼻筋を撫でた「怖がらなくていいさ…大丈夫…」そういうとキツチョムはランプの光に目を向けた。手綱を引き歩き始める。

これ以上ひどいことは起こりそうになかった、レイジーにとって最悪の出来事はとくに起きてしまったんだから。力なく首を落とすと手綱にひかれるままレイジーは歩を進めた。さっきまでの最高

の気分が嘘のように消し飛んでいた。

キツチョムは光に近づく道すがら腰を落として白い袋をひとつ拾い上げ鞍のフックにひっかけた。歩みを進めていくとランプの光が大きなコートの男を闇に浮かび上がらせた。大きな男だ、でもマツチ棒のように痩せていた。初老の男ですでに背筋が幾分まがっている。まるで首が転げ落ちてきそうだった。

キツチョムがレイジーを引き連れ近づくとき後ずさりをして大きな門の影に隠れようとする。おびえているように見えた。それを見てキツチョムが足を止めると、今度は激しく手招きをする。キツチョムが男のそばまで来るころには門を馬一頭通れるほど開いて体を隠し顔とランプだけをのぞかせていた。キツチョムが少し見上げなければならぬくらいの大男は声を押し殺していった。

「な、なにをしているんですか！？はやく、はやく中へお入りください！！」男は声を落としていたが丁寧な物言いと裏腹に焦りといら立ちが感じられる強い言い方をした。

しかし、キツチョムは大きな門を見わたし、闇の道に沿ってどこまでも続くような扉に目を奪われた。ここはたしか、グレスフォードの屋敷だ。キツチョムでもそれぐらいのことは知っていた。モリスや神父の話にときどき出てくる名前だったからだ。

「町の者にみられるわけには行かないんです！早くお入りください！」そういうと男は門の中に逃げるように入っていく。首を振りとはまろうとするレイジーを引っ張りながらキツチョムは門の中に入る。レイジーは敷地内に足を踏み込むと諦めたように歩き始めた。

敷地の中に入るとあたりを見わたす。広い庭の真ん中にとっても巨大な岩があった。石というより崩れた壁だ。城壁の一部だろうか……。もしかしたら以前は目の前の大きな屋敷よりもっと大きい、空を覆い隠すような大きな城が目の前にそびえていたのかもしれない。キツチョムはそんなことを考えた。巨石の周りは手入れの行き届いた芝生が円形の島を作っており周りを石畳の道が取り囲んでいる。

た。

大きな観音開きの扉が前方に見える。数段の石の階段の上に立つその扉は教会の扉ほどの大きさがあるが、もっと厚く重そうに見える。その扉の石段のそばに一人の少年の影があった。どうやら大きなハンチング帽をかぶっているらしく体に不釣り合いな大きな頭をしている。

大きな男はキツチョムとレイジーを残し足早に進み、少年の前に立ち何やら話をしていた。大きなマツチ棒のような男と体に不釣り合いなハンチング帽をかぶる少年の影があだこうだと体を動かしている。まるで影絵芝居の人形のようにとても滑稽だった。

男はキツチョムに体を向けるとはげしく手招きをした。

キツチョムは足を少し早めて男のもとに近づいていく。しかし男は自ら少年を引き連れやってくる。「お急ぎください：手綱を：」そういうとレイジーの手綱をキツチョムの手から半ば強引に奪い少年に引き渡した。「彼は馬の世話係です：、さ、はやく奥様がお待ちです：」

奥様：？グレースフォードの婦人だ：「彼女がいったい、僕に：？」そう聞きたがったが目の前でレイジーが鼻を鳴らしていまにも声をあげそうになっている。少年が腰を引いてレイジーをひっぱり始めている。あわてて鼻筋を撫で「大丈夫：すぐもどるよ」とキツチョムがいうといやいやながらもレイジーは観念したようだった。

男はすでに歩き出しており、足早にまっすぐ扉に向かっていた。キツチョムもレイジーの手綱を離すと男の足に合わせて足早についていくしかなかった。

8. グレスフォードの老婦人―4―

グレスフォードの大きな扉が人ひとり通れるほど開かれていた。キッチヨムが覗き込むと中は意外にも真つ暗だった。ランプの光に照らされてぼんやりと闇の中に男が浮いている。先に行く男はすでに階段に足をかけキッチヨムを待っていた。

キッチヨムが中に足を踏み入れると階段の中段まで上がっていき手招きをした。

歩きながらあたりを見わたすとキッチヨムの目は驚くほど早く闇に慣れていく、瞳孔が光をかき集めるように開く。キッチヨムの目は不思議なレンズのようだった。キッチヨムの目はうつすらと二階の廊下、扉などをうつすら見て取れることができるようになった。

玄関はひろく綺麗に磨かれた石で格子状に覆われている。ランプの光を受けて光っていた。赤い絨毯が引かれている。しかしところどころ擦り切れている。正面の大きな階段は途中で二手に分かれており、ちょうど踊り場のようになっている。そこには二枚の大きな肖像画がかけられていた。男は左側に上がっていく階段に足をかけて踊り場でキッチヨムを待っていた。

キッチヨムは踊り場まであがると肖像画を見上げた。ふたつの絵に描かれた人物は同一人物だ。ブラウンの髪と口髭。やさしい目がとても印象的な男だ。ゆったりとした服を着て椅子に腰かけ微笑かに笑みを浮かべている。キッチヨムは自分の中の好奇心がゆっくりと頭をもたげ始めるのを感じていた。まるでさっきまでの不安を覆い隠すようにそれは心を支配していく、まるでスタンがくれた本を読んでいる時と同じような鼓動の高鳴りを感じた。

もう一方の絵のその男は鎧を身にとって立ちあがっていた。遠くをにらみつけるような目をしている。室内の椅子に腰かけている優しい目とは対照的に勇ましい印象をうける。なんだか背筋を思い

つきりひっぱたかれたような、居住まいを正さずにはいられない圧迫感があった。

「ゴホンッ：！！」突然闇に響いた咳払いにキッチョムは目を上げた。ランプが目の前に近づけられていた。一瞬目の前が白一色になる。瞳孔が激しく収縮する。キッチョムは目を閉じずにいられなかった。

男はキッチョムが頭を激しく振るのを歯牙にもかけず階段を音もなく上がっていった。激しく瞬きするとキッチョムは慌てて男の後に続いていく、階段をあがると暗い廊下の先に男のランプが揺れていた。廊下の四方を照らし出しながら男の背中を浮かび上がらせている。不意に足をとめドアに耳を近づけ軽くノックを繰り返した。大きな屋敷だったが意外と早く目的の部屋についたらしい。キッチョムは少し残念に思わずにいられなかった。

男は小さなノックを何度か繰り返した。するとすぐに扉の向こうから返事が聞こえた。

「はいりなさい：」

男は扉を開いた。

「彼を連れてまいりました。すぐここへ：」そういいながら暗い廊下に目を向けようとした。「なっ：！！」

キッチョムはいつの間にか男のすぐ後ろに立っていた。腰をすこしかがめ中を覗き込んでいたのである。わきの下のキッチョムの見開かれた目と男の視線が合わさった。

男はキッチョムをにらみつけた。キッチョムはキョトンとした目をしていたが、なにかを察知したのか背筋を伸ばすと一歩下がった。「なにをしているのです？はやく入りなさい」

グレスフォードの老婦人は年老いていたがも声には力がこもっており、背筋を伸ばして立つ姿は年を感じさせないものがあつた。本を読んでいたのであろう分厚い本に手をおいていた。

男が身を引いたので言われるがままキッチョムは部屋の中に入っ

た。

「コールリッジ：」

男は名を呼ばれると黙ってうなずきドアを閉めた。

とり残されたキッチンヨムは部屋の中をぼんやりと見わたした。なんだか夢の中にいる気分だった。壁に掛けられた燭台には真新しい蠟燭がたてられ、ランプが暖かい光をあたりに向けていた。とても明るい部屋だった。しかしそこは客間とは程遠い部屋だ。老婦人が座っていただろうソファと椅子、書物の置かれているテーブル以外の家具は白い布をほこりよけに被っていた。どうやらキッチンヨムは歓迎されているわけではなかった。

「オーハン・キッチンヨム：」キッチンヨムは不意に名前を呼ばれて老婦人をみた。

ブロンドの髪は頭の上に束ねられ、注意深く見るところどころ白くなっているのがわかった。大きなエメラルドグリーンの瞳の周りには深くしわが刻まれ、皮膚が乾いているような印象を与える。口元に刻まれたしわは浅かったが首筋にまで伸びいていた。

背筋を伸ばしていると大柄な体がさらに大きく見える。肖像画の鎧を着ていた男を思い出さずにはいられなかった。

老婦人はキッチンヨムに背を向けると窓に向かって歩き始めた。

「エギオン：」キッチンヨムは自分の名前につけたようにこう言った。「僕はオーハン・キッチンヨム・エギオン」

「その名前を使うのはやめになさい：」老婦人は一瞬足を止めるとつぶやくように言った。窓のそばに歩み寄るとガラスに映るキッチンヨムをみた。

キッチンヨムはアレーネの後姿を見つめた。とても居心地が悪かった。さっきまで頭をもたげていた好奇心はとくに消し飛んでいた。ガラスに映る老婦人とキッチンヨムの視線がぶつかった。

「わたしは、アレーネ・グレスフォード。私のことはこれ以上話すつもりはありません：、それにあなたにとってはどうでもいいことです」

キツチヨムは視線を落とした。自分がなぜここにいるかまったく見当がつかなかったからだ。まるで叱られているような気分だった。そんなキツチヨムには無関心にアレーネは続けた。

「時間がありません。単刀直入にもうしまししょう。墓守をおやめなさい：」

キツチヨムは顔を上げた。よくわからなかったのだ。やめる：？墓守を：？

アレーネはキツチヨムに体を向けると反応を見るようにその眼を見つめた。だが、その眼からは得るものがなかったのだろう。

「いいですか？わたしは、墓守をやめなさい、そういったのです」キツチヨムは目線を落とし床を見つめた。キツチヨムから考える能力が失われていた。足元に答えを探す。あらぬ方向に目を向け目に映るものの中に何かしらの答えを探そうとしている。

しかしアレーネは構わずつづけた。

「あなたは墓守には向いていない。代わりの者は簡単に見つかるでしょう。神父が用意できないなら、私が枢機卿に手をまわしましょう。あなたより墓守にふさわしい犯罪者が世の中にはたくさんいるのですから：」

キツチヨムの頭の中に遠くで鳴る鐘のようにぼんやりとアレーネの言葉が響き渡っている。声が響いてくる先に耳を傾け、それを探そうとする。

「あなたは町で普通の生活を送ればよいのです：、太陽とともに目覚め、月が昇れば眠ればいい。この町にとどまりたくなければそれもいいでしょう：。どこか別の国へ行き、あなたは学問をなさい：。あなたが世の中を理解できるまで、わたしが支援しましょう」

まるで体が宙に浮き始めたようだった。ぼんやりと体が揺れはじめ、目の前にスタンがくれた本のページがまるで手で触れることができるかのように再現された。それは光とともに現れては消えていく。キツチヨムはその世界に吸い込まれるような気分だった。

ただ、一つの言葉がまるで死人に杭を打ち込むようにキツチヨムの

胸に強く突き刺さった。

「――条件は、たったひとつ、あなたが墓守をやめることです…
――」

8. グレスフォードの老婦人―5―

レイジーは最悪の気分だった。頭を前後に振ってなんとか前足を踏み出す。まさに疲れたような足取りで歩を進めた。グレスフォードの屋敷を後にしてから、いや、グレスフォードの屋敷の扉を出た時には、すでにキツチョムの様子はおかしかった。まるで夢遊病者のような足取りで戻ってきたかと思うと、だまって鞍にまたがりフードですっぽりと顔を隠したきりあぶみを操ることも忘れていた。レイジーは仕方なく自分で歩を進め、グレスフォードの屋敷をあとにしたのだった。

そしてキツチョムはあろうことか白い袋を見逃したのだ。レイジーがのんびり白い袋の横を通り過ぎようとしたとき、キツチョムはピクリとも反応しなかった。走ってるのではない、レイジーはただ歩いていたのだ。レイジーは慌てて鼻をならした。キツチョムは馬上から降り袋を拾い上げて、フックにひっかけた。馬上からでも簡単に取り上げられたはずだった。

とんでもないことになったぞ。レイジーは思った。きっとあの大きな屋敷には魔法を使う悪魔が住んでいたに違いない。キツチョムの魂を抜き取ってしまったのだ。それともキツチョムの体の中に別の何かが…。

「レイジー…」馬上に上がったキツチョムからうつろな声が聞こえた。

レイジーの首筋に悪寒が走る。冷たい汗が吹き出し、首を持ち上げ石造のように固まった。両耳をゆっくりと後ろに向ける。

「走ろう…」

え…？レイジーは胸を撫でおろした。キツチョムはキツチョムだった。そう思った。しかし、突然キツチョムは声を荒げた。

「レイジー！走るんだ！全速力だ！」

キツチョムが足にはめたあぶみに恐ろしく力が加わり、レイジー

の横っ腹をはげしく蹴り上げた。手綱を鞭のようにふるい叫んでいる。

前足を大きく振り上げ、いななきを響かせながらレイジーは全速力で走りだした。まるで体を炎で焼かれている気分だった。

今度はキツチョムは袋を一つとして逃す気配はなかった。それ以上にもより激しく体を動かしている。キツチョムの目が袋をとらえるたびにレイジーの体が右へ左へぶれるのだ。森の暗い木々が迫ってきていた。町の出口だ。

しかしキツチョムはレイジーの足が緩むことを許さなかった。

「レイジー森をつっきるんだ！止まらないで！どこまでも…どこまでも…！」

無茶だった。森を突っ切るってことは教会を通り過ぎるってことだ。悪魔だ…！きつとキツチョムの魂は魔法使いに奪われて、かわりに悪魔がキツチョムの体に乗っ取ったんだ…！！

しかしレイジーがもっとも恐れるのは悪魔ではない。あの馬小屋の主、ロシュフォール・レックスだった…。

レイジーは教会への入り口で思いっきり足を上げ走るのを拒否した。地団駄を踏み暴れたのだ。キツチョムはあぶみに力を入れ、手綱を引いた。

「レイジー！レイジー！わかってるさ、教会だろ！？ついたんだ…！」

レイジーはふと足を地上にとどめた…。息荒く鼻をならした。馬上から飛び降りたキツチョムの顔に目を向けた。とても優しい笑顔をレイジーに向けていた。「さあ、帰ろう…。今日はたくさん走った…。疲れたろ…？」鼻筋を優しく撫でてくれるキツチョムは…、キツチョムだった。

ただキツチョムは今まで見たことのないさみしい笑顔をレイジーに向けるようになっていた…。

9. 夜明け―1―

夜の静けさはやがて遠ざかろうとしていた。遠くの空がかすかに白く色を失うと同時に山の黒い影を日の光がぬぐい去ろうとしていた。キツチョムは広げた地図をたたみ、分厚い書物の間に挟んだ。革紐で書物をくくり、本棚に置いた。また、知らず知らずのうちにため息をついていた。

僕は墓守をやめるのか……。何度も繰り返しみずからに問いかけていた。ここ数日というものの頭の中はそのことではいっぱいだ。しかし、墓守をやめるということがどういふことなのかキツチョムにとっては一さっぱりわからないのだ。ただ突如として牢獄のようなこの小屋を飛び出して、広く青い空の下、草のにおいを運んでくる風の中で、誰かと笑顔であいさつを交わしてみたかった。陽だまりの中で誰かと語り合ってみたかったのだ。

明日、もう一度クレスフォードの屋敷に行こう……。もっともって彼女の話を聞きたいと思った。そうだ、もう一度彼女の話を聞いてみよう。じつのところこの考えがキツチョムの脳裏によぎったのは一度や、二度のことではない。けっきょくのところここまで考えが進むと振り出しにもどるのである。そんなこととしてどうなるのだろうか……。僕は墓守なのに……。

ふと、キツチョムは顔をあげた。腫れぼったい目元に一瞬力がこもった。

「そうだ、グレスフォードの婦人をお願いするんだ……」キツチョムはこの考えがしごくまともなように思えた「デブイはおいしいものを食べたがっていた。おいしいワインを……。デスブーツのみんなもきっと同じに違いない。クレスフォードの婦人に頼んでみよう……！あの人はきつととても優しい人なんだ。だから僕を憐れんで墓守をやめていいといっているに違いない。僕に学問もやらせてくれるんだから……。ほかに何かあったら、なんだったって？そう、支援だ、

僕のことを支援してくれるっていった。だったら、食べ物やワインくらい……。きつと、きつと……」

キツチヨムは靴音を響かせながら部屋の中を取り留めもなく歩き回った。ふいに足を止めると固い木を組み合わせただけのベッドにその身を投げ出した。大きく息を吸い込み胸が膨らむのを感じ取る。ひさしぶりに胸が躍るのを感じていた。ふと天井に残る傷跡、血のシミ跡が視野に入ったがキツチヨムの目はそれに向けられことはなかった。無意識に寝返りをうち胸に枕を抱きしめた。そして目を閉じた、早鐘のように鼓動が耳に響いていた。口元には笑みが浮かぶ。どれくらいの間そうしていたろうか……。やがてキツチヨムは眠りに落ちていった……。

キツチヨムが眠りについた小屋の周りに暖かい光が充ち始めた。モリスがあわただしく場所の準備をし、神父を乗せて出かけていく。微かにレイジーやロシュフオールを立てる蹄の音が優しく朝の静けさの中に響いていた。

小屋に忍び込んだ朝の光がキツチヨムの瞼をかすめる。瞼が微かに振動する……。

キツチヨムは夢を見ていた。

大地に降り注ぐ日差しの中、とても暖かい風がキツチヨムの頬を撫でている。レイジーの背にまたがりのんびりとキツチヨムは小高い丘へ向かっていた。

マントを脱ぎレイジーの首にかけ、手綱を緩めて空を見上げた。澄み渡る空にちぎれた雲が白く宝石のように輝き流れている。森は遠く緑をひろげ、太陽に照らし出される草花は風にやさしく揺れている。鳥たちのさえずりはキツチヨムがやってきたことを歓迎するかのように声をあげていた。

ふと道の先に目を向けると小さなロバをつれた農夫がこちらに向かってくる。キツチヨムは胸の高鳴りを感じながら農夫を見ついていた。ロバはレイジーを見ると小さく鼻を鳴らした。そして農夫は

すれ違いざま笑っていった。

「よいお天気ですな……」

キツチヨムは満面の笑みで答えた。

「……ええ！とても……！」

キツチヨムはいつまでも農夫の後姿を馬上から見つめていた。農夫の少し曲がった背中がとても愛おしかった。

レイジーが足をとめた。前を向くと小高い丘の上にたどりついてた。眼下には青くどこまでも広がる湖がひろがっていた。

「ああ……レイジーあれが湖だ……」まるで鏡のようだった「ほら、空が落ちてきたようだ……。それに……雲が泳いでる……」キツチヨムは笑った。

やがて湖が日の光を反射させてぼんやりと輝き始める、キツチヨムはまぶしさで何度となく瞬きを繰り返した。光の反射は湖面いっばいに広がる……すると、そこに黄金の宮殿が現れた。

「……ああ、宮殿だ……。見て！レイジー、あの小さな黒い影はみんな人や馬なんだ……。宮殿は王様が住んでいて、この世界を動かしてるんだ……」

宮殿が波を打つ……。小さな滴を一滴落としたような波紋が宮殿の中心からキツチヨムの足元までやってくる。湖の枠組みを超え、地に伝わり、丘に連なる崖を波紋が登ってくる。キツチヨムには、宮殿が湖と重なってみえた。その瞬間、湖の中心が天高く巨大な水しぶきを上げると角を持った白馬が現れた、その馬が一瞬、空中で停止する。

レイジーは地団駄を踏んで嘶いた。

水しぶきの中から巨大な船首が現れたのだ。大理石のように艶を放つ白馬を先頭に立てその帆船は水中から飛び出しキツチヨムの前にその巨大な船体を表した。船は船体を湖に叩きつけた。水面が怒号をたて、天に届くかのように舞い上がった。

「船だ……！急がないと……！」キツチヨムは叫ぶと同時に手綱を引き、あぶみでレイジーの横っ腹を蹴りつけた「僕は、あの帆船にのるん

だから!!」

丘の上から崖のように続く坂道を砂煙を立ち上げ全速力でレイジ―は駆け降りていく。帆船は、雲のように真っ白なたくさんの帆に風を受け、水面を滑るように速度を上げ水しぶきをあげている。

キツチョムはあわてて懷を、ポケットを必死にまさぐった。指に小さな紙切れの感触があった。それを取り出して天高く掲げた。

もう船の半券ではなかった。一枚のチケットが吹き付ける風の中、太陽を背にしてはためいていた。白く輝くチケットを頭の上で振りながらキツチョムは叫んだ。

「おい!! 僕はその船に乗るんだ!!」キツチョムの胸が壊れてしまうかと思うくらい高鳴っていた「レイジ―、レイジ―、近くに港があるはずだ!!」そういうとあぶみに力を入れた。

レイジ―は帆船に負けないくらい早かった。キツチョムとレイジ―は帆船を見ながらどこまでも走りつづけた。そして叫び続けた…。

「おい!! 僕はその帆船にのるんだあ!!」――――

9 夜明け―2―

バレル・ガードナーはじつと暗い部屋の壁を見つめ何やら考え事にふけていた。

カールはただぼんやりとそんなガードナー見つめていた。カールはベツトに横になっていたのだが、ガードナーが訪ねてくると何とか身をお越し彼を迎えた。カールの顔はほの暗い蠟燭の光のなかでもそれとわかるくらいやつれた顔をしている。まるで凍えてしまふかのように薄い掛布団を引き寄せうずくまっていた。

「おまえも聞いたというのか……？ その、鉄の音を……」

「ええ……、たしかに……」カールはそういいながら何度もうなずいている。

ガードナーは赤く縮れたひげをなでた。

「で……、おまえはその音の主を……？」

カールはあわてて激しく首を振った。膝を引き寄せ掛布団をきつく抱きしめた。恐怖が彼の中を駆け回っているのが見て取れる。カールは体に傷一つ負っていなかった。だからこそ心の傷が彼を苦しめるのであろう。もし、傷を負っていればその痛みで少しは恐怖が紛れていたかもしれない。ガードナーはそんなことを考えながら立ち上がった。

「お前は、二三日大人しくしている……、この事件はすぐにでも解決する。なに……墓守の一人や二人……」ガードナーは素晴らしいながらそれが間違いであろうことはわかっていた。そして、自分がタムズにして見せた名推理も間違いだったと認めずにいられなかった。しかし、何者か判断がつかないままでは不安が募るばかりだ。カールを思っの言葉だった。

部屋を出ようとガードナーがドアに手を伸ばした時だった。

「あんなふうに……、あんなふうに人を、一瞬にして黒焦げにできるものなのでしょうか……？」声を震わせながらカールがつぶやいた。

目を見開き布団をまっすぐに見つめている。

「不可能…だろうな…。」

「では、あれは…あれは…墓守の仕業なんかじゃ…」カールはまた首を激しく振った、まるで思いついた何かを頭から追い払おうとしているようだ。

「だとしたらなんだというんだ…？ いいか、それがわかったのならこの事件が解決するまで大人しくしていることだな…」いまだカールに理性的にもものを考える力があることに、ガードナーは少なからず安心した。あとは時間と…事件の解決が必要だろう…。

カールの妻リゼットは椅子に腰かけてテーブルにもたれかかっていた。階段を叩くガードナーの不恰好な靴音が聞こえると、リゼットは立ち上がり階段を下りてくる黒光りするブーツを見つめた。

ガードナーは階下のリゼットに目を向ける。

「すみません、奥さん。少々長居しまして…」

「いえ、そんなことより夫は、カールはどうしたんですか？ なんだかみなさん、とても慌ててらして、夫を連れて帰ってくるなりほとんど何も言わずに出て行ってしまいましたから…」

ガードナーは階段を降りきると、玄関の扉に歩を進めながらいった。

「その…事件が起きましたてな、一人は顔を焼かれ瀕死の状態、もう一人は誰かもわからないほどに焼き尽くされていたんです。カールは二人目の犠牲者の現場に居合わせたんですよ…」

「ああ…」リゼットは口元を両手で覆い隠し、目を大きく見開いた「ハカモリが…」

ガードナーはリゼットを見つめた。

リゼットはガードナーに見つめられると目を泳がせて続けた。

「みなさん、そのようなことをおっしゃってましたわ、わたし恐ろしくて…。明日はちょうど金曜日…今月は明日のはずですわ、墓守が寄進品を集めに来るのは…。きっと怒ってるんだわ、町のみんな

がろくなものを寄進しないから……。わたくし明日はなにかいいものを見繕って……」恐怖からかまくしたてるように話し始めたリゼットの言葉をガードナーはさえぎった。

「なに……墓守は関係ないでしょう、そのことはカールも気づいている……。彼は怪我もしておらん。それに頭もしっかり働いていた。二三日休めばもとどおりだろう……。その頃には事件も解決してますよ。ただ、事件が解決するまで夜の外出は控えていただきたい。なにが起こるかわかりませんからな……」そういうとガードナーは扉を開いてリゼットに向かい軽く会釈をした。扉を閉めたため息をつくとき髭を撫で、カールの家を後にするのだった。

ぼんやりと東の空が白くなっていた。夜は次第に西に追いやられていくだろう……。当分の間、夜は眠ることができそうになかった……。『覚悟せねばならんな……』ガードナーはぼつりとそうつぶやくと自宅ではなく自警団の詰所へと足を向けるのだった。

10. スプリング・ヒールド・ジャック

10. スプリング・ヒールド・ジャック

朝日が昇ろうとするころ、光の届くことがない暗い地下の通路。

そこに赤く燃える目玉が二つぼんやりと浮いていた。石造りの壁はアーチ状になっている。どうやらそれは水路らしく四角く切り取った溝があり水が流れていた。その通路はいくつもわかれて蜘蛛の巣のようにグレスデンの町の地下に張り巡らされていた。しかしこの水路の存在を知る者は今となってはほんの一握り、完全に忘れ去られた過去の遺産であった。

その蜘蛛の巣の中心は少し広く彼にとって格好の隠れ場所となっていた。彼の目玉の炎がかすかに瞬き光を強くするとあたりがうつすら明るくなる。目の前に山積みになった鉄くずをジャラジャラと崩しながら彼はそれを手にとって眺めていた。

「アイアン…、アイアン…」そう呟きながらただ鉄を眺めている。口から蛇の舌のような炎が鉄をなめあげている。鉄は温度を上げ赤く光る。

彼は口に鉄をほおばると口の端から煙が立ち上った。彼の体の中で炎が立ち上る音が響き、その音が地下の水路に響き渡った。

彼は口から鉄を吐き出した、それはゴトリと重たい音を立てて石の上を転がった。球形の形に変えた鉄くずを指の間に挟み持ち上げ目の前に掲げそれを眺めた。

赤く熱を帯びた鉄球…。

その球を眺め、スプリング・ヒールド・ジャックは不敵な笑みをみせるのだった。

『スプリング・ヒールド・ジャック』：彼が生まれたのは海を越えた国、グレートブリテンだった。彼がどのようにあの海をこえたのか。おそらくは誰にもわからないことであろう。彼に聞いてみたところで彼自身もおそらく覚えていないだろう…。

ただ、ここにひとつの恐ろしくも悲しい物語がある…。

11. スプリング・ヒールド・ジャック・『ヴァルハラ of 鉱石』と『安息のツルギ』

『ヴァルハラ of 鉱石』と『安息のツルギ』

むかし、イングランドにホイットマンデュー・ハウザーという鍛冶屋がいました。彼はとても腕がいいので『キング・オブ・ブラックスミス』と呼ばれていました。数十人の徒弟に、美しい妻ステファニー、彼はその名声を欲しいままにし、人生を思いのままに生きることが出来る数少ない人間だったのです。

そして、彼の妻は臨月を迎えていました。もうすぐわが子が誕生する。彼は人生の絶頂期にいたのです。

ですが、ある夜すさまじい嵐とともにやってきた男が彼の家のドアをノックしたのでした…。

ホイットマンデューは暖かい居間の椅子に腰かけぼんやりと妻の後姿を眺めていました。つまは暖炉の前の揺り椅子に座り大きなおなかをさすりながら、幸せそうな笑みを浮かべて編み物をしていました。

外では恐ろしいほどの風が吹き荒れ、窓には大粒の雨が当たって音を立てていましたが、ホイットマンデューの耳にはまったく聞こえていませんでした。この日徒弟たちを早くに帰らせ二人きりの静かな、幸福な時間を過ごしていたのです。

ふと彼の耳にドアをノックする音が聞こえたような気がしました。
『だれだろう…、こんな夜更けに…』

彼は窓を見ました。風が窓を揺らし、雨水が流れ落ちています。
『気のせいだろう…、こんな嵐の中訪ねてくるものなどいるものか…』

そう思ったとき、彼の耳にはっきりとドアを激しくノックする音が聞こえました。徒弟に出るように言おうと腰をあげたとき、みな

を嵐が来る前に帰らせてしまったことを思い出しました。

『ああ…、まったくこんな時に…』そう思い玄関へ行こうと部屋のドアへ歩み寄りました。

「あら、どちらへ行かれるんですか？」怪訝な顔で妻のステファニーが彼に問いかけました。

「聞こえなかったのか？誰かがドアをノックしただろ？こんなときに訪ねてくるんだ、よっぽどの急用かもしれない」

「いえ、わたしにはノックなんて聞こえなかったわ、それにここまですノックが聞こえるはずないわ。外は嵐よ？」

「いや、確かに聞こえたんだ。ちよつと見てくる」

そういうとホイットマンディーはドアを開き、階下の玄関へ向かったのです。ドアを眺めながら歩を進めていると、確かに鉄のドアノックを激しく叩く音が響いていました。

ホイットマンディーがドアを開けるとそこに黒いローブを纏った大きな男が立っていました。青い顔をして堀の深い顔…。男の顔を見つめたとき大きな雷鳴とともに稲光がそとを明るく照らし出しました。すると男の顔が一瞬薄青く透き通り、肌の下に恐ろしい頭蓋骨が透けて見えたのです。

ホイットマンディーは思わず声をあげそうになりました。しかし声を上げることができませんでした。まるで首を絞められたかのような気分でした。

「夜分遅くすまないな…」そういうとホイットマンディーの目の奥を深く見つめるように男は目を見開きました。

「お前にひとつ、頼まれてほしいことがあるのだ…」

ホイットマンディーは首を振ろうとするのだが体が硬く石のようになって動かない。まるで恐怖が彼の心を脅しているようだった。彼は首を縦に振った。彼はこう決断せざる得なかった。そうすることでしか体を動かすことができなかったからだ。

「そうか…」男は楽しげに笑った。まるでこれで親友だといわんばかりだ。

「剣を作ってもらいたいのだ」

「ええ、ええ：かまいませんとも、ただ：、いま注文が立て込んでまして：」頭の中でこの仕事断る算段を必死に探しました。

「なに、どれも徒弟にやらせればいい仕事ばかりだ、それよりも俺の持ってきた仕事はお前にしかできない。魅力的な仕事：」男はローブの中から一塊の鉱石を取り出しました。「ヴァルハラ」の鉱石だ：」男がその鉱石をホイットマンディーに差し出しました。

「ヴァルハラ：」ホイットマンディーは吸い寄せられるように手を伸ばしました。その鉱石はずっしりと重く銀色に輝いています。ぼんやりとあたりに白い光を投げかけながらもあらゆるものを光の深淵へと吸い込もうとしているかのようにでした。

「そうだ、名前くらいは知っているだろう：。神々の宮殿：。英雄たちの殿堂と言われている。戦いに明け暮れた英雄たちの魂を迎え入れ、死してなお戦い続ける定めを負わせる：」男は薄気味悪い声をあげて微かに笑いました。まるで天国と言われる場所でありながらその場所は地獄だといわんばかりの冷笑です。

「こ、これで：なにを作れと：」ホイットマンディーは信ぜずにはいられませんでした。目の前の鉱石の輝きは確かにこの世のものと思えなかったのです。そして彼の心の中の好奇心、野心、自尊心：、すべての人間的な感情がヴァルハラ」の存在を求めているのを感じ取りました。

「剣だ：『安息の剣』：」男はそういうとまた懷から何かを取り出した。それは薄汚れた一冊の本でした「お前の知りたいことはここにすべて書かれている：」

「ああ：」ホイットマンディーは首を振った：「おまちください、安息の剣とは：『レクイエムソード』と言われているもののことでございましょう。この世にひとつといわれている：それがどのようなものかも知られていません。ただの伝説：」

「ならば、その眼で確かめてみるがいい」男は手に持った本をホイットマンディーのまえに突き出した「さあ、手に取れ、契約を交わ

そうじゃないか……」本を手に取りそれを手の内で開いた。

ホイットマンデューはだまって書物を閉じる、ヴァルハラ of 鉱石を書物の上にのせ差出した。

「どうやら……わたしには無理のようだ……。この書物には何も書かれていない……白紙だ……」

ホイットマンデューはくやしさと恥ずかしさをその表情に浮かべた。屈辱……。まるで自分が否定されたかのようにだ。自分は選ばれなかった……。

男がそれを受取ろうとしたときホイットマンデューが身を引いた。汗が額に流れ、口惜しいかのように身をこわばらせている。渡したくはなかった。

ヴァルハラ of 鉱石の輝きを見て心動かされない鍛冶屋がどうか……？ 伝説の剣と聞いて心動かされない鍛冶屋がどうか……？ わたしのように一流の腕を持つならなおさら……たとえば、依頼人がこの悪魔のような男であつても……。

このままわたしのような一流の鍛冶屋が鉄や鋼を打ち続けて一生を終えてしまうのか？

わたしのほかにこの鉱石を扱える人間などいないはずだ……！！

「どうした……？ 作りたいのだろう……。諦めきれぬのだろう……。俺はこの時をどれほど待ち望んでいたことか……」

男は冷笑交じりに話す。そして言った。

「教えてやろう、レクイエムソードは唯一、不死を断つことができる剣だ……。」

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『インモータルキラー』もしくは『マ

『インモータルキラー』もしくは『アンデッドキラー』のこと

不死……。その言葉を聞いてホイットマンディーは首をかしげずに
いられませんでした。伝説のツルギ……。これが……。この世に不死のも
のなど存在しない。それがホイットマンディーが出した答えだった
のです。

「不死など存在しない……。そう言いたげだな。」男は笑みを絶やさ
ずいいました。まるでホイットマンディーを小馬鹿にするように笑
っています。「教えてやろう……。思えば言ったな、この世に一つだけ
安息の剣は存在すると……。その一本を後生大事に……。わが物顔で……。や
つが、やつが持っているんだ。不死なるものがな……。！」男は笑っ
ていましたが、月明かりに照らさるる泉のように澄んでいたブルー
の瞳が、燃え上がるような赤色に代わり、その瞳が怒りに満ちてい
るのがホイットマンディーにはわかりました「おまえが知らぬだけ
だ、この世にも、あの世にも不死のものなどごまんといえるのだ。わ
たしはそれが我慢ならんだ……。！」男は足を一步踏み出し、ホイッ
トマンディーに詰め寄ります。

ホイットマンディーは恐ろしさに身をすくめ、ただただうなずき
ながら尋ねました「あなたは、あなたはいったい何者なのですか……
！？どうしてそのような……！」

「決まっているだろう！不死のものを根絶やしにするのだ……。！おれ
が何者か、だと……。！笑わせるな……。！お前が俺に名を与えろ……。！『不
死を断つ者』それが俺の名だ……。！」

ホイットマンディーの震えていた膝がとうとう糸を断たれたように
折れ曲がり床に腰を落としてしまいました。男が腰を落とし、さら
にホイットマンディーに詰め寄ります。

「契約の時が来たのだ……。さあ、書を開け……。そしてお前の手を差

し出すんだ…！」男の恐ろしい瞳が見開かれました。

ホイットマンディーは声にならない悲鳴を上げながら震える手で分厚い書物の表紙をなんとか開きました。そして力の入らない腕をなんとかあげ、手の平を男に向けました。腕は恐ろしく震え、制止させることができません。涙で視界が揺らめき今にも頬をつたい涙が落ちてしまっていました。

男がホイットマンディーの腕を鷲掴みにしました。とても強い力で抵抗などできそうもないくらいです。男は手のひらを上に向けさせ、暗い闇のようなローブの影からもういっぽうの腕を出しました。人差し指を伸ばすとホイットマンディーの手のひらに一筋の線を引きます。

ホイットマンディーの手のひらはまるでザクロがぱっくりと口を開いたように傷をつくりました。肉の断片、白い骨が見えたかと思うと血が吹き出し、不快な音を立てて白いページの上に滴り落ちていきます。ホイットマンディーは恐ろしさに震え、頬を涙がつたいました。

赤くページが染まると同時に漆黒の文字が浮かび上がり始めました。まるで蛆が這うようにじわりじわりと浮いてきます。ホイットマンディーの血は染み渡り、どうやら数ページを赤く染め上げたようでした。

「どうだ…文字が浮かび上がったではないか…、お前が『安息の剣』を完成させるんだ…、もう、後には引けない、わかったな…」男の瞳の燃えるような赤が、波が引いていくように冷たいブルーに変わっていきます。男は立ち上がり笑みを見せました。

「ホイットマンディー…俺は完成を心待ちにしているぞ…」恐ろしいその男の笑い声がホイットマンディーの耳に響きました。男がドアに向かい一步前に踏み出したその時、地上を揺るがすように雷鳴が引きわたりました。まるで月が落ちてきたかのようにすさまじい音です。外は明るく瞬いたかと思うと、外に踏み出した男の体は一瞬にして光の中に掻き消えてしまっていました。

11. スプリング・ヒールド・ジャック―『睡魔』

その日からホイットマンディーはまるで人が変わったように鉄のハンマーを振るい、ヴァルハラを鍛え続けました。高炉の前でまるで炎を纏ったかのように赤く照らし出されるホイットマンディーの姿は徒弟、そして妻ステファニーでさえも声をかけることがはばかれるほど恐ろしい姿に見えました。

ホイットマンディーのそばにはあの書物が投げ出されていました。彼はその書物に書かれている通りに行動しました。ページが進むと自らの体を傷つけ、血を書物にささげるのです。彼の体のいたるところに傷ができていきます。彼の体のどこを傷つけ、どの血がほしいのかすべては書物に指定されていました。

彼の心の中には功名心と自尊心が渦巻きます。ヴァルハラを鍛冶の輝きの先にはあたかも神が存在しそれが自分と重なって思えるのです。神なる存在、そう考えたとき自らの腕がいままさにそれに届かんとしているのを感じ取ることができました。

そしてもう一つ、彼の感情を支配するものがありました。それは言い知れぬ恐怖です。

彼は寝る間を惜しんで高炉に向かいましたが、彼も人でした。体の力は時とともに失われ、強い睡魔が瞼を重くします。

彼は恐ろしい悪魔に追われていました。地獄の鬼でした。睡魔に負ければまるで別のドアが開いたかのように夢の世界へ落ちてしまいます。しかし、それは夢ではありませんでした。彼にはすでに夢も現実もあります。ヴァルハラを鍛え続け、地獄の鬼から逃げ続けるのが彼がもつことができる唯一の人生だったからです。

地獄の鬼は睡魔に負け瞼を落とした時にやってきます。落ちた瞼は一瞬のうちに軽くなります。しかし瞼を開くとそこは針のような岩が地面から突き出している岩と砂だけの世界でした。その岩にか

がみ込み急いで身を隠します。

やがて翼をはためかせる音が遠くから聞こえ始めます。ホイットマンディーは両腕をにぎりしめ、拳を口に加え強くかみしめます。恐怖で声を上げるのをそうやって我慢するためです。痛みで恐怖を打ち消すためもありました。彼は岩陰でずっと息を殺します。

「ホイットマンディーイイイイ…ホイットマンディーイイイイ…」

ホイットマンディーの肩が恐怖で震えています。

地獄の鬼の声は翼の音が大きくなると同時にしだいに近づいてくるのです。

「ホイットマンディーイイイイ…いるんだろう…、そこに…。今日も来てるんだろう…」

彼は立ち上がると同時に死に物狂いで走り出します。大きな岩をかわし、小さな岩を飛び越えました。自分の呼吸が荒々しく耳に響きます。ホイットマンディーの心は今にも自分の首が胴体から切り離されるような思いに支配されていました。

「ホイットマンディーイイイイ！！」

突如として、翼の羽ばたきが嵐に揺れる木々のような激しさに変わりました。

ホイットマンディーの首が飛んだとしてもおそらく胴体だけでも走り続けることができるほどに、彼は必死に走り続けました。

「ぐああああ…！」

彼の叫び声が岩場に響き渡りました。それは恐怖とはげしい痛みから出た叫び声でした。彼のひざ下に岩がぶち当たったのです。彼は地面に転がり痛む足を抑えました。転がりながら翼を広げ恐ろしい速さで向かってくる地獄の鬼を視野に捕らえました。

褐色の肌、炎を纏っているような真っ赤な翼がはげしく風を掻いています。足の指が手の指のように長い、きつとその足でホイットマンディーを捕まえるつもりでいるのでしょうか。手には鋼のように真っ黒な長く伸びた爪が生えています。それはホイットマンディーを切り刻むため。そして首から徐々に顔に向かって緑色に変色して

いました。瞳は白目の部分がなく鉄の球をはめ込んだような漆黒の瞳をしています。緑色の恐ろしい顔には二本の歪んだ角が生えていました。

「来るな！！来るなああああ……！！」ホイットマンデューはそう叫び、恐ろしさに耐えかねて目を閉じました。

「おいおい……しっかり走れ、世話を焼かせるな……」ホイットマンデューが目を開くとそこにあの黒いローブを纏った男の背中がありました。男はホイットマンデューと地獄の鬼の間に立っています。ちらりとホイットマンデューに横顔を見せるといいました。

「今日はもう少し走れると思ったんだが……。いいか、睡魔が訪れるまで走り続けろ！！いつもどおり走り続けろ、振り向くんじゃない……！！」

ホイットマンデューは立ち上がりました。手には血がついていました。膝から血が流れ出しています。

男はこの恐ろしいもう一つの現実の世界でかならず彼を助けにあらわれるのでした。彼は無言でなんともうなづく走り出しました。ひどく傷む膝を忘れたかのように必死で走りました。恐ろしい鬼の声が聞こえます。

「またここで待っているぞ……！！ホイットマンデュー……！！ホイットマンデュー……！！」

彼は恐怖からでしょうか、好奇心からでしょうか、あるいは男の身を案じてでしょうか、いつも彼を助けに現れるあの男のことが気になり、ほんの一瞬後ろを振り向きました。

ローブの男が鬼の首を掴んで持ち上げていました。鬼は首を絞める腕を両腕で握り返し、羽をばたつかせ、足の指で男を引きはがそうともがいています。

「ぐう……、離せ、離せ、お前ごときが俺様の邪魔をするんじゃない……。たかが死神の分際で……」

ホイットマンデューにはそう聞こえました。いや、二人の姿を見

ただけで何も聞こえなかった。彼は必死にそう思おうと努めました。ただひたすらに張り続けることだけを考えました。彼を救うことができるのはたった一つ……。睡魔だけ、だからです。

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『運命の日1』

そしてとうとう運命の日がやってきました。

ほんの数日前まで血色のよかったホイットマンディーの体はやせ衰え、頬の肉は削り取られたようになっていました。裸足で部屋を歩く音がひたひたと軽く音を立てています。

自らの首を切り大量の血を書物にささげるとページのすべてが赤い血に染まったのでした。乾いた血に黒く染まりあがった布を首に巻きつけ、もうろうとする頭でページをめくります。

少なすぎる……。彼は思いました。残りのページ数はほんの数ページです。しかし彼の鍛え上げた剣は、鋭さ、強さはまれに見るものでしたが、丈があまりにも短かすぎました。剣の切っ先はなく、まるで溶けたかのように波をうっていたのです。ここでページが終わってしまったては完成することはできません。ヴァルハラの大石もなくなっていました。

彼は赤く立ち上る高炉の炎に書物を投げ入れたい気分になられた。なぜもっと早く気付かなかったのだろう……。彼は怒りに震えました。彼は高炉を睨み付け、書物をいまにも投げ入れんばかりに高々と頭の上に振り上げました。炎がはげしく揺らめくさまをその眼にうつし、彼は大きなうめき声をあげました。しかし彼には書物を炎の中に投げ入れることはできませんでした。書物はあらゆる方向に投げつけられ、壁に当たると音を立てて地面に落ちました。

ホイットマンディーは頭を抱え、小さく唸りながらぼんやりする頭で考えようとします。

「あいつが、待っているんだ……地獄の鬼が、あの場所で俺を待っているんだ……」彼はひたすらそのようなことをつぶやいています。そのとおりでした。もし、剣を作るのをやめても地獄の鬼は彼を待っているでしょう。彼にできることは剣を完成させる以外に道はあり

ませんでした。

怒りが恐怖に変わるとホイットマンディーは頭を抱える手を力なくおろし、ふらふらと立ち上がりました。そしてひたひたと足音をたて書物に歩み寄りました。まるで地獄の亡者さながらの歩く姿からは生命の息吹を感じることが全くできません。

彼は震える手で書物を拾い上げ、開きました。

「これ以上…、わたしから何を奪おうというのだ…」彼はそうつぶやくとページをめくりあげます。一瞬、彼の目に光がともりました。希望を見出したともいえるその輝きは、剣の完成を予感させるものでした。彼は笑みを浮かべました。剣は完成する…。

そして彼はさらにページをめくりました。

彼は石のように固まりました。炎の光が照らしだす壁はゆらゆら揺れています。その壁に囲まれた薄暗い部屋の中で彼の背中中はピクリとも動かなくなっていました。みるみるうちに彼の瞳から光は失われました。彼の耳に炎が立ち上る音が聞こえます。そしてあろうことか叫び声をあげながら、書物を高炉の中に投げ入れたのです。

炎が渦を巻き書物を飲み込み、まるでホイットマンディーの叫び声に呼応するように激しい音をたてました。

ホイットマンディーは膝をつき崩れ落ちました。床に額を何度も打ち付け自らの血を床に広げました。彼はただひたすらに叫び声を上げ続けることしかできませんでした。

11. スプリング・ヒールド・ジャック―『運命の日2』

徒弟の一人がホイットマンデীর屋敷の居間で同じ場所を行ったり来たりあたふたしながら心配そうに靴音をたてていました。ホイットマンデীর妻ステファニーが産気づき産婆を慌てて連れてきたものの、ステファニーのうめき声を聞いた徒弟は心配で居ても立っても居られないのでした。

こんな時にわたし一人とは……。徒弟が順番に泊まり込みステファニーについていたのですが、まさか自分の当番の日に産気づくとは思ってもいませんでした。心細さからかホイットマンデীরことを考えました。ここ最近は作業場にこもりつきり、呼びに行こうものなら、いえ、扉をノックしようものなら恐ろしい声で罵声を浴びせられるのです。

自分の子供が生まれるというのに……親方はいったいどうしてしまったんだろう……。

そんなことを考えながら両手を組み合わせたり頭を掻いたり、後は産婆に任せ、神に祈るのみでした。

「ギャアアアアアア……！！」

徒弟は驚いて顔を階段の方に向きました。とても恐ろしい叫び声……。徒弟の肩は飛び上がり背筋がまるで凍りついたように冷たくなりました。

しかし、まるで空耳だったかと思えるほどにあたりは一瞬にして静寂を取り戻しました。

居間を出てよくよく階上を見えます。階上はうす暗くとても静かでした。

手すりを握り耳をそばだてながら階段を上がります。

子供の泣き声だろうか……？生まれたのかな……？でも、でもあれは女のかすれたような叫び声だった。老婆の……産婆の叫び声だ……。

徒弟はとても恐ろしくなりました。それでも階段を上がると産婆が

入っていた寝室へと向かいました。廊下を進み、寝室のドアに耳をあてると中の様子を伺います。しかし、物音ひとつ、赤ん坊の泣き声も聞こえませんでした。ステファニーの苦しむ姿を思い出しました。

あ、あんなに苦しそうだったのに……。徒弟は思いました。

ドアノブに手をあてると中の様子をうかがいながら静かにドアを開いていきます。

「フフフ……」微かにステファニーの笑い声が聞こえました。

ドアを開き、部屋を覗き込むとベッドで血の付いた布を抱き幸せそうに笑みを見せるステファニーの姿が見えました。

徒弟は、思わず胸を撫で下ろしました。

ああ、さっきの叫び声は私の空耳だったか……。もしかしたら、赤ん坊の泣き声と聞き間違えたのかも……。

一瞬胸を撫で下ろしたものの赤ん坊が泣き声を上げていないことに気づきました。生まれた赤ん坊はケツを叩いてでも呼吸させなければいけないと、誰かに聞いたことがありました。

徒弟は慌ててドアを開きステファニーに駆け寄ろうとします。その時足元にあった何かにつまづきました。見下ろすとそこに産婆が倒れています。口から泡を吹いていました。

こんなときに！泡を吹いて倒れるなんて……。徒弟は思いましたが、いまは産婆どころじゃない赤ん坊が産声を上げていないのです。

徒弟は産婆から目を離すと急いでステファニーと赤ん坊へ駆け寄りました。

「奥さん、大丈夫ですか！？赤ん坊は、赤ん坊……。うああああ……！！」

徒弟は思わず、唸り声をあげてベッドから飛びのきました。足の力が抜け、腰を落としてしまいました。足を蹴りなんとかベッドから離れていきます。後ずさりながら産婆を見ました。あの赤ん坊を取り上げたのか……。それで、それで……。さっきの叫び声はやはり産婆だった……！！

赤ん坊の顔は血色の悪い緑色、額に二つの小さな突起がついていました。目元は目玉がなく二つの穴がぽっかりと開いているだけ、鼻はなく唇はなくへの字に曲がった黒い穴があるのみでした。

徒弟はステファニーが抱えている布きれから褐色の小さな足がはみ出すのを見ました。不自然に長い指が力なく垂れています。

「ああ…ああ…」

徒弟はそれを見ると恐ろしきで振るえあがり、なんとかドアのもとへ行こうと必死に床を蹴りつづけました。

しかし、徒弟の背中中はドアには届きませんでした。なにものかの膝にぶつかったのです。徒弟は背中中の何者かに目を向けました。

その何者かに見覚えがありました。ですが、それがホイットマンディーだと気付くのにとても長い時間を必要としました。それほどホイットマンディーはやせ衰え、まるで地獄の亡者のごとく姿を変えていたのです。手には短い作りかけのような剣を力なくぶらりとぶら下げていました。ぶらぶらと揺れる剣は芯の部分が美しく銀色にぼんやりと輝き、刃の部分が黒く重たい光を放っています。

「生まれたのか…。生まれたんだな…」ホイットマンディーは力ない足を踏み出しました。ゆっくりとベットのステファニーと赤ん坊のもとへ歩み寄ります。

「ああ、あ…、親方それが、それが…」徒弟は何とか足を引き寄せ四つん這いになると歩を進めるホイットマンディーの足に手を伸ばそうとします。しかし震える腕はホイットマンディーには届きませんでした。

ホイットマンディーのだらりと下げた腕の筋肉が引き締まるのが徒弟の目に写りました。ホイットマンディーにきつく握りしめられた剣が持ち上がっていくのです。

「俺の子が生まれたんだな…」

ステファニーは目をあげました。

「ええ…あなたと私の子供…」そういうとステファニーは抱きしめていた手を緩め赤ん坊を彼に差し出しました。

ホイットマンディーの目が恐ろしいほどに見開かれました。今にも目玉がこぼれ落ちるかというほど顔をこわばらせ、唸り声をあげました。まるで鬼だ……。地獄の鬼だ……。私を追ってきたのか……。私の子供に成り代わったのか……。

ホイットマンディーの剣を持つ手が恐ろしく怒りに、悲しみに震えました。

あいつはこの時を待っていたのか……。はじめからこうなることを知っていたんだ……。わたしが……。この手でわが子の命を『安息の剣』に差し出すことを願って……。

彼は表情を持たない緑色の顔を、褐色の肌を睨み付けました。

いまさら未練などあろうか……。鬼だ……。鬼が私を追ってきたのだ……。この鬼がわたしの子であるはずがない！！

ホイットマンディーは剣を高々と持ち上げました。いまにもホイットマンディーが剣を振り下ろそうとするときでした。

「なにをするんですか！！」

徒弟はホイットマンディーの背後から腕をつかみ、剣を握るホイットマンディーの手に手を重ねました。

「……離せ！！離せえ！！」ホイットマンディーはそのやせ衰えた腕からは想像もできない力で徒弟の腕を振りほどきました。そして、床に転がろうとする徒弟に剣を振りました。徒弟の顔から血がほとぼしります。顔を手で覆い、叫びながら床の上を転がりました。

「おまえにこの剣の偉大さがわかってたまるものか！お前のような徒弟にできぬ仕事だ！おまえのように人の技術を盗むことばかり考えてるやからがこの剣に触れるなど百年はやいわ！これは俺の名誉だ！俺の栄光だ！触れさせるものか……。出ていけ、出ていくんだ！お前の薄汚い血で、命で……。そんなもので私の剣をけがすんじゃない！！」

徒弟は切られた顔を右手で抑えています。指の間からおびただしい血が流れ落ちていました。唸り声をあげながら床に這いつくばるとドアに向かってずるずると床を這い進みました。

ホイットマンディーは目をステファニーに向けてました。彼女は赤ん坊を抱きしめ、ホイットマンディーに背を向けています。その背中では震えていました。

「出せ…、出すんだ…」

ステファニーは必死で首を振りしました。

「…出すんだ!!」

ホイットマンディーはステファニーの肩を掴むと強引に体を引き、赤ん坊を奪おうとします。

「いやです! どうして…どうして…!!?」

「鬼だ…! この剣にその鬼の魂を差し出すんだ!!」

「違います、この子はわたしの…わたしとあなたの子供です! どうして…こんなに、こんなに愛らしいのに!!」

ステファニーはホイットマンディーの腕を振り払いました。ホイットマンディーが掴んでいた肩にはうつすら血がにじんでいます。

「愛らしい…!? この子が愛らしいというのか…? 愛しているというのか…!?!」

ホイットマンディーの瞳が涙でうつすら濡れ、剣を持つ手が震えました。

「ええ! どうして愛さずにいられるのですか…?! こんなに愛らしいのに…!」ステファニーの長く美しい指先が赤ん坊のへの字に曲がった口元に触れました。赤ん坊の口は柔らかく動き指先を探して動いています。そのときかすかに「アア…」という小さな声を発しました。

「男の子が生まれたら、名前は「カスパー」…、そうでしたわね…。カスパー・ハウザーそれがこの子の…、わたしとあなたのたった一つの宝物…」ステファニーは大粒の涙をとめどなく流し、赤ん坊を強く抱きしめました…。

「おまえは愛しているのか…。愛し続けることができるのか…。わたしは…、わたしはなんてことを…!!」

剣がホイットマンディーの腕から離れ床に音をたてました。彼は

ベットにかけていた足を床におろし、崩れ落ちました。涙はとめどなく流れ、床にいくつも黒いしみをつくるのでした。

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『ホイットマンディーの死』

ホイットマンディーの人生の終わりが近づいていました。

彼は恐ろしい夢から解放されたもののその体からはすでに生命の輝きは失せ、地下にカスパーを閉じ込め、ステファアーニとともに暗い地下室で暮らす日々となりました。ステファアーニはよほどのことがないかぎりカスパーから離れることはしませんでした。ステファアーニが町に出るとき、屋敷で食事を作る時などを見計い、彼は隠しておいた未完成の安息の剣を握りしめ物思いにふけることがありました。カスパーのうめき声を耳にすると我に返り笑うのでした。

「恐れることはない……。わたしはお前の命をうばったりしない……。ただ眺めずにはいられない……。それだけだ……」

ホイットマンディーにはどうしても安息の剣を破壊することができませんでした。すでに多くのものが失われていました。徒弟を失い、財産のほぼすべてを失っていました。「ホイットマンディー・ハウザー」この名前も狂気のブラックスミスという汚名を着せられ町中に知れ渡っていたのです。

ただ、残されているものがありました。それは妻ステファアーニと息子カスパーです。いまはそれで十分でした。彼はすでに死期を悟っていました。幸せかもしれない……。昔の徒弟時代に帰っただけだ……。ふとそのようなことを考えることがありました。ですが、自分が死んだら……。そう思うと不安で仕方ないのです。

彼は高炉に向かうことを決めました。カスパーのためにできることを考えたのです。そして彼のために鉄の仮面を作りました。つなぎに皮を使い、うまく成長に合わせて形が変わるようにしました。顔さえ隠してしまえば普通の人間として、きつとうまくやっていける……。そんな思いがありました。

しかし、カスパーに仮面をつけるとまもなく、揺り椅子に揺られながらひっそりと彼は息を引き取りました。

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『I・R・O・N』

ステファアーニとカスパーの二人きりの地下室での生活が始まりました。カスパーはすでに四つ足で立ち上がり驚くほど器用に走りまわるほどに成長していました。ステファアーニは驚くほどはやく老けてしまっていました。皺こそ増えてはいないものの肌のつやは失い、黒々とした髪には白い部分が目立ち始めていました。昔の彼女の美しさはすでに失われていたのです。

しかしステファアーニは幸せでした。表情こそ仮面に覆われて見えないものの、カスパーは感情を体で表現してみせるのです。飛んだり跳ねたり転がったり、彼は彼なりにステファアーニに何かと伝えようと必死だったのかもしれませんが。

ある日のことです。じっとり湿った薄暗い地下室の床に木製のアルファベットの積み木が広げられていました。ステファアーニはどの親もするように、それを彼に与えたのです。残念ながら彼はそれに興味を示さず、投げ出されたままとなっていました。彼は目が見えなかったのです。

ステファアーニはアルファベットの文字を彼の手のひらに乗せ形をなぞらせようとするのですが、しばらくするとカスパーはそれをほうりなげ、小さなガラクタの鉄を取り出し別の遊びを始めてしまいます。

「だめね…」ステファアーニは笑いました。カスパーの子供らしい一面が彼女に笑みをもたらしているのでしょう「それは鉄よ…、カスパー。アイアン、I・R・O・N…」彼女はアルファベットをつぶやきながら木製の積み木で地面に文字を作りました。ぼんやりとその文字を眺めているときでした。

「アー…アー…」

ステファアーニはふと目を上げ、カスパーを見つめました。

「アー…アン…」

「そう……。アイアン……」彼が生まれて初めて言葉を発しようとしていました。彼女は口を両手で覆うと瞳を涙で濡らし、カスパーを見つめてじっと待ちました。

「アイ……アン……」

「そう、そうよ……。おいで、カスパー」そういうと涙を流しながら彼を引き寄せ、膝の上に抱きました。そして「I」の積み木を取り上げるとやさしく手のひらにのせませした。

カスパーは不思議そうにそれを手の内でもてあそびます。

「I……。R……。O……。N……」順番に手の内に乗せ、何度もアイアンと繰り返し言葉を発しました。「アイアン……あなたのお父さんが大好きだったものよ……」

「アイ……アン……」

彼がそうつぶやくとステファニーは声をたてて笑みを見せました。カスパーはその声を聴き何度も、アイアンと繰り返し、木製の積み木を手の内で転がして遊ぶのでした。

どれくらいそうしていたのでしょうか、いつのまにかステファニーは眠っていました。ふと自分の膝が軽くなり、カスパーのぬくもりが感じられなくなったのに不安を感じました。うつすら目を開くと耳に苦しそうなうめき声が聞こえました。ステファニーは慌てて体をおこしうめき声が聞こえる方へ眼を向けました。

カスパーが苦しそうに胸を抑え、かがみ込んでいます。まるでどこに何かをつあらせたかのようにもがき苦しんでいます。

「カスパー！カスパー！どうしたの！？」

ステファニーは驚き、彼に駆け寄り声をかけました。仮面の口金がずらされており、一文字にきつく結ばれた口が見えました。何かを口に入れたのは明らかでした。子供がなんでも口に入れる癖があることをいまさらながらにステファニーは思いだしました。きつと積み木を口に入れたのに違いありません。

「出しなさい、カスパー……！！」ステファニーは彼を抱き上げ背中

を叩こうとしました。そのとき彼の口の端から煙が立ち上り始めました。腹部から喉にかけて炎が立ち上るような、激しいうなりが響いています。彼女は驚き、はげしく彼の背中を叩き口の中のものを吐き出させようとしています。

カスパーはもがき、彼女の手を振りほどき逃げ出すと、水がためられた桶に駆け寄りました。一瞬にして白い蒸気が激しい音をたて立ち上りました。カスパーの肩が白い蒸気の中で激しく上下するのがステファニーには見えました。慌てて彼の仮面を覗き込みました。カスパーは何事もなかったように桶の水をかき混ぜています。煮えたぎるように泡立つ桶の水をもて遊んでいるように見えたが、そこから腕を上げると手のひらに鉄の塊を持っていました。

ステファニーはそれを見て驚きました。きらきらと銀色に輝くそれは「R」の形を持っている鉄でした。それはとても鉄とは思えないような輝きを放っています。足元に目をやると「I」の文字が落ちていました。それを拾い上げる手にずしりと重く重力がかかります。木製の積み木を似せて作られた鉄の積み木は木製のそれより重くとても滑らかでした。

カスパーは彼女の手からIの文字をとりあげると「I」「R」と並べました。

「アイアン…アイアン…？」

「あと…「O」と「N」ね……」

カスパーは鉄を探してうろうろと歩き始めました。手探りで落ちている丸い鉄クズを見つけたし、口に入れ頬を膨らませると、ステファニーに顔を向けました。飴玉をなめるように口の中でももごもごと転がしています。

「ああ…、あなたはきつととても腕のいい鍛冶屋になるわ。お父さんに負けないくらい……」ステファニーは「R」の鉄の積み木を見つめました「だって…、こんな素敵な積み木みたことないもの……」ステファニーは積み木を拾いあげると、もといった場所に腰を下ろしました。

「カスパー、あなたが大人になるまでたっぷり時間はあるわ。眠りましょう……。さあ、続きは明日にして眠りましょう……。今日はなんだかうれしいことばかり……。ママのそばに来てくれないかしら……？」

カスパーは頬を鉄で膨らませながらステファニーの胸にもぐりこみました。もごもごと口を動かしていましたがやがてかすかに寝息を立て始めました。ステファニーは彼の口の中の鉄を取り出すと彼の横に寄り添い目を閉じるのでした。

11. スプリング・ヒールド・ジャック―『眼帯の男』

灰色の雲が分厚く空に重なって町に薄暗い影を落としていました。ステファニーはひさしぶりに町に出ていました。バスケットを小脇に抱え肩を落として人目を避けるように足早に人々が行き交う薄暗い路地を歩いていました。すれ違う人は彼女のことなど気にも留めていませんでした。彼女には昔のように人目を引くような美しさはなく、服装も質素で薄汚れていました。ほつれた髪が幾本もかすかに吹く風に揺れています。しかし、ステファニーは市場でパンを買うと足早に露店の前を通り過ぎ、薄暗い路地へと逃げるように入っていくのでした。路地には彼女と同じように人目を避けるかのようにその道を選んだ人々が足早に行き過ぎていきます。その道の端を壁に沿って彼女は歩いていました。

ステファニーは身を隠すようにして急いでいました。そのため思わず路地から出てきた男にぶつかりました。彼女は固い壁にはじけ飛ばされるように転がるところでした。

「おっと…」男はステファニーの肩を持ち支えました。男の酒臭い息が彼女に届きました。胸がむかつくようなその匂いのためかその男を見ようとしませんでした。

「すみません…、すみません…」そういいながら、頭を何度も下げるとステファニーは慌ててその場を去りました。

その男は薄汚い人ごみの中、その場に立ちすくみじつとステファニーの後姿を眺めていました…。足早に行き過ぎる人は立ちすくむ男を睨み付けますが、酒のにおいを感じ取り男の顔を見るとなにもなかったように目を逸らし人ごみに逃げ込んでいきます。男は分厚く幅広い眼帯で顔半分を覆っており、残された目は見開かれ怒りに満ちていたのです。

やがて黒雲は夕闇に飲み込まれていきました。そして暗い路地に

細い雨が降り注ぎます。町の薄暗い酒場の屋根に音をたて始めると酒場の外は風が吹き荒れ、嵐をつれてきたのです。男はその雨音を聞きながら酒をあおりました。

「で…、あの女からなにを奪おうっていうんだ？」眼帯の男に一人の男が問いかけました。

「決まってるだろう、ホイトマンディーの奴は財産のすべてを俺たちに引き渡したわけじゃない！」眼帯の男がそこに集まる3人の男に語りかけました。

「ははは、おまえは一生遊んで暮らせるだけの金を奴から脅し取っただろう。まあ、酒と博打に女…、これだけ散財すりゃあ、もぬけの殻だわな」そういつて男たちは笑いました。

「おまえらは笑ってろ…。俺だけが名をあげることになるんだからな…」男はそういつと不敵な笑みを見せ酒をグラスに勢いよく注ぎ込みました。テーブルに酒がこぼれ、広がりましたが男はそんなことは気にせず酒を飲み干しました。

眼帯の男が酒を飲み干すとほかの男たちはじっと彼を見つめています。

「いいか、あいつにガキが生まれるころ…。奴は鍛冶場に引きこもって何をしていたと思う…？」そう問われた男たちはお互いに顔をまわせました。そのことを知る者はここにはだれ一人いなかったのです。「奴は剣を毎日鍛えていたのさ…「安息の剣」だ…」男はそういつと笑いました「馬鹿馬鹿しいだろう…？あ の、伝説の剣だ…一度は鍛冶屋になろうとしたんだ、お前たちだって聞いたことがあるだろ…？」男の笑い声は甲高く狂気じみていました。笑いながらグラスに酒を注ぎます。

「だが、本当のことだ…。俺はこの目で見たんだ。片目じゃないぞ…、俺にまだ左目があつたときのことだからな…」男はとうとつに真剣なまなざしを男たちに向けました。「やつのガキは化け物だった…、緑の顔に、目玉がない…足はまるで…悪魔の手のようにだった…。ホイトマンディーは自分の息子の命を安息の剣を使って奪お

うとしたんだ、安息の剣を完成させるにはガキの魂とやらが必要なんだと……。あいつはそのことをすべて俺に話したんだ……。そう
だ……。ああ、思い出した……。俺がどうやってあいつの財産を奪った
か分かるか？あの日のことを黙っているって約束したのさ！！安息
の剣とやつのガキのことを一生誰にも話さないってな！あのミスタ
ーブラックスマイスが！ホイットマンディー・ハウザーが！涙を流し
俺の足にすがりついたんだ！！ハハハハ！！」男はグラスの酒を飲
み干すと続けた。「奴の金は今や底をついた！だからあの誓いも水
の泡と消えたんだ！！」

男の狂気じみた話を聞き入っていた男たちはなにか発する言葉を
探しました。しかし当時のホイットマンディーの変わりようを思い
浮かべるとその話を嘘と否定しがたいものがありました。

「いいか、やつは俺たちのことをどう思っていたか知ってるか？俺
たち徒弟のことを……。俺たち徒弟には安息の剣の偉大さもわからな
い、作ることでもないといったんだ……。俺たちのことを人の技
術を盗む盗人だともいった。俺の血を……。俺たちのことを……。薄汚い
ってのけたんだよ！！……。この町を出て行って鍛冶屋やってるや
つはいいだろうが、この町からでられない俺たちは、ここで生きて
いくしかないんだ。俺たちは奴の財産だろうが、名誉だろうが、な
んだろうが！！奪い食い尽くす権利があるんだ……」

「ほ、ほんとうだろうな……。その話、本当に伝説の剣なんて……」
「いったらう……。俺は両目を使ってみたんだ……」そういうと男は
低い笑い声を喉で鳴らした。「今日、俺はあの女を見たとき面白い
ことを思いついたんだ……。おまえらは俺のいうとおりのことをすれ
ばいい……。そうすりゃ、ひと財産転がり込んでくるんだ。簡単な話
だろ……？」

一人の男はグラスの酒をただ見つめていた。別の男はグラスの酒
を一気に飲みほしました。三人目の男は膝に置いた手を握りしめま
す。そして三人は意を決したように無言でうなずいたのでした……。

11. スプリング・ヒールド・ジャック―『眼帯の男2』

その日もまたステファニーはバスケットを小脇に抱え人の行き交う路地裏を足早に歩いていた。あの嵐の日を過ぎてから何日が過ぎていたでしようか、屋敷の地下はステファニーとカスパーのなんのかわりもない日々が過ぎていましたが、町の様子は少し変わっていました。しかし、ステファニーはそのことに全く気付かず町を急ぎ足で歩いていきます。

彼女がそれと気づいたのはいつものように露店の店先についたときのことでした。店先に立っていた。中年の女性にいつもの愛想はなく、おつりを渡すと気味悪げにパンを投げてよこしたのです。バスケットにパンを入れ薄い布をかぶせたとき周囲に視線を感じふと目を上げてあたりを見回しました。

止まっていた通りが一瞬にして動き出したような感覚……。みんなが自分のことを見ていた……。そのような予感が彼女の脳裏によぎりました。

ああ、そんなことあるのですか……。きっと気のせいよ……。ステファニーは思いました。感じ取った視線もいまは消えています。ステファニーは通りを歩き始めました。路地への入り口に入り一息つくと振り返らず、顔を隠すように足早に歩くのでした。

「いったとおりでろう……。あれが、代わり果てたハウザー婦人さ……。眼帯の男が数人の男とともに酒臭い息を振りまきながら不敵な笑みを浮かべています。

「ありゃ、たしかにステファニーに違いない……。おまえの言う通り、魔女に見えるな……」

「……？ お前の目は節穴か？ 正真正銘の魔女だよ……。おまえも見たろ……。町の奴ら、震えあがってたじゃねえか。ハハハ……。ここ数日はその話でもちきりだったからな、あとは俺たちがあのガキを始末す

りゃあ、英雄になれるぜ：」

「ほんとうにそんな化け物みたいなガキがいるんだろうな：？ 大丈夫なのか？」男たちは息を飲みました。眼帯の男は片目で男たちを睨み付けました。

「何度もおなじこといわせるな：。両目で見たっていったろ：。そして、レクイエムソードも存在する：：。ひと財産築こうじゃないか：。」眼帯の男は口の端を引き上げていやらしく笑って見せました。「準備はできてるんだ、今日行くぞ：。お前らは人を集めてこい：。」

眼帯の男がそういうと男たちの姿はそれぞれに通りの流れに消えていきました。

11. スプリング・ヒールド・ジャック―『バネ』

重たくなされる音をたてカスパ―家の扉が開き、落ちていく赤い夕日の輝きがほの暗い屋敷に入り込みました。影で黒く塗られた木製の床に長く四角く光が影を切り取りました。そこにステファ―ニのバスケットを持った姿が細長い影を作っています。

ステファ―ニは屋敷に入ると落ちていく夕日には目もくれず振り返り辺りを見わたすとドアを閉めました。そして肩の力を抜きほっと一息つくのでした。キッチンにバスケットを置くとランプを携えキッチンの奥にある床板を引き上げました。手すりのない板張りの階段を後ろ向きになり降りていきます。耳に水をもて遊ぶようなチャブチャブという調子のいい音が聞こえました。階段の途中でランプの光を地下室に向けると暖かい光が地下室を包み込みました。カスパ―が水桶に手をつ突っ込んで引っ掻き回しているのが見えました。口元から音をたてて白い煙が立ち上っています。カスパ―は手を桶から出すと階段を下りてくるステファ―ニの方へ顔を向けました。

「まあ…。カスパ―また何か作ったの？」ステファ―ニはそういつてほほ笑むと、背筋を伸ばし階上の扉を掴み、ゆっくりと扉を閉めました。暗い地下室はランプのほの暗く暖かい光に満たされました。ステファ―ニが床へ足をつけるとカスパ―はトコトコとぶかっこうに片手を床につけて彼女の声がする方へ歩み寄ります。その手にステファ―ニのスカートの裾がふれました。

ランプを階段に置くと両腕で彼女はカスパ―を抱き上げました。「アイアン！アイアン…！」そういうとカスパ―は桶の方を指さします。

「ええ、アイアン…ふふ、何かしら？」ステファ―ニは階段に置かれたランプを持ち背を伸ばすと天井から吊るさているフックにランプをかけました。

背筋を伸ばすステファ―ニの体に抱かれているカスパ―は頭をス

テフアーニの胸に落としました。伸びた首筋からとても優しく暖かい匂いが彼の鼻先をかすめました。

ステフアーニは彼を抱いたまま水桶へと歩み寄りました。ゆらゆらと水桶の上を橙色の暖かい光が揺れていました。ステフアーニが揺れる水桶を覗き込むとカスパーも首を伸ばして桶のそこをじっと見つめています。しかし、桶のそこは暗くて見通しが利きませんでした。

カスパーを体をモゾモゾと動かしています。ステフアーニが腕を緩めると彼は木の幹を滑るように彼女の腕から降りていきました。そして桶に手を入れてチャプチャプと音をたてます。ふと、彼の動きが止まりました。手に持ったものを彼女の前に差し出します。

「あら、それは何かしら？」蛇のようにトグロを巻いた大きな鉄細工を眺めました。

カスパーはそれを手の内で縮めたり伸ばしたりして遊び始めました。

「ああ：！それはバネね！」ステフアーニは声をあげて笑いました「鉄でバネを作ったの？すごいわ、それにとても弾力がありそう：」

そのときでした、カスパーの腕からバネが弾け飛んだのです。天井に当たると跳ね返り壁に当たります。大きな音をたてて飛び上がっていました。ステフアーニは驚いて声をあげましたが、バネを探してあたりを見わたすカスパーを見ると笑い声をあげてバネを拾い上げました。

「アイアン：、アイアン：」カスパーはそう言いながらあたりをうろうろバネを探して歩いています。

「こっちよ、カスパー、ふふふ：」カスパーの手にバネを置きました。すると彼女のお腹が音をたてました。カスパーをその音を耳にすると首をかしげます。

「あら、あはは：。食事にするわ、そうしましょう、カスパー。ははは：」

ステフアーニはそういつてカスパーの頭を撫で足早に階段へと向

かうのでした。

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『カスパー・ハウザー』

スープが音をたてて鍋を揺らしていました。暖かい湯気がステファニーの頬を撫でています。これといった味付けもない野菜だけのそっけないスープでしたが彼女は楽しそうにその湯気のおいを嗅いで幸せそうに微笑みました。

階下では激しい音をカスパーがたてていましたが、彼女のほほ笑みは消えませんでした。カスパーがお腹の中で鉄を鍛えているのを知っているからでした。階下から白い煙が黙々と立ち上り、水が沸騰する音が聞こえます。

ホイットマンディーと暮らし始めたときのことか思い出されます。その頃はまだまだ貧しく自分たちで食事を作っていました。そして食事をつくりながら彼が何を作っているのか胸を高鳴らせて考えたものでした。ホイットマンディーがどんなものを完成させるのか、彼女はいつもそのことを心待ちにしていました。

鼻歌交じりにスープを皿に盛り終わるとパンとスープを持ってステファニーは階下へ降りていきました。

ハウザー家の屋敷の周辺にはすでに暗い闇が訪れていました。陽はすでに西の山影に沈み、欠けた月がぼんやりと黒い雲の合間に浮いています。

いくつもの松明の光がぼんやりと揺れながらハウザー家を目指して通りを進みます。せんとうには屈強な男たちが緊張した面持ちで足早に歩を進めます。男たちの後には笑みを見せこれから何が起ころうかと胸を高鳴らせる老若男女が続きます。ただの野次馬とも見て取れる影の塊がひそひそと松明の光に集まってくるのです。

やがてハウザー家の屋敷は松明とその黒い人だかりに取り囲まれました。庭を挟んだ遠くの屋敷は広く大きいものでしたが、なんの手入れもされていない庭、薄汚れた壁など以前の立派な屋敷の面影

は朽ち果て消え失せていました。崩れかけた二階の屋根や傾むきひび割れた柱、まるで暗い夜の闇の中、生気を失った枝葉のように今にも崩れ去るかのように見えました。

庭の入口に松明を持ち眼帯の男が立ち、気味の悪い笑顔を浮かべています。男たちが松明を持ち彼の横に歩み寄りました。

「行くか…」

「ああ…、まずは俺たちだけで行くんだ…。町の奴らに化け物の顔を見せてやるんだ、生け捕りにしてやる、こいつらの目の前で俺たちが剣を完成させるのさ…。俺たちは英雄になり、名声を得る…、もうその時はすぐそこまで来てるんだ」男はポケットに二本のピンを突っ込み、松明をかかげると、三人の男をしたがえると歩みだしました。

「ステファニーは…、ステファニーはどうするんだ…？」歩を進めながら男の一人が不安そうに聞きました。

「…殺すさ、魔女だろ…」男はあっさりといったのけると笑みを見せました。松明の光で照らしだされる眼帯の男の顔の笑みは狂気じみており、声をかけた男でさえも背筋を震え上がらせるほどでした。

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『カスパー・ハウザー2』

鉄がカスパーの足元でギシギシと音をたてていました。彼はもう一つのバネを作り出すと長い足の指でそれを掴み靴を履くようにバネの上に乗って遊び始めたのでした。両手を広げバランスを取りふらふらとしています。体重をかけバネを縮めようとするとしりもちをつきます、そのようなことを何度も繰り返していました。ステファニーは食べていたパンをスープでお腹に流し込むと立ち上がりました。しりもちをつこうとしたカスパーの手を取り、引き上げてあげました。

カスパーはしっかりとステファニーの両手を取ると体を上下させバネに体重をかけました。バネが弾ける音をたてます。彼の体は床から少し浮きました。もう一度：彼の体はステファニーの腰まで届くほど飛び上がりました。

「まあ、すごいわ、カスパー。もう一回……！」

カスパーが床を叩くと彼の仮面がステファニーの顔に並びました。「アイアン……！」

「ふふふ、とても高く飛べるのね……！」ステファニーはカスパーの周りをぐるぐるとまわりました。カスパーの体も引っ張られるようにくるくると回ります。彼女が片腕を離すと彼はどうやら自分の力で飛び上がるようになっていくようにうでした。

彼女はその腕をはいくると彼を回転させました。

「まるでダンスをおどってるみたいだわ、ははは……」ステファニーは笑い声をあげました。こんなに楽しい笑い声がこの地下室に響き渡るのは何年ぶりかのことでした。

彼女が手を離すとカスパーは自分の力で飛び跳ねています。

「おいでこっちよ……！」

ステファニーが両手を開き大きな声で彼を呼びました。カスパーは勢い良くバネに力を加えると声のする方に向かって飛び上がりま

した。勢い余って頭を天井にぶつけました。大きな音が地下に響き渡ります。彼は片足のバネを思わず足から離してしまいました。バネは音をたてて床を転がりましたが、彼が落ちた場所はステファア二の暖かい腕の中でした。

「カスパー！ねえ、大丈夫！？」

カスパーは頭を抱え、首を振ってうめき声をあげています。

「ウウウ…、アハ…アハ…」カスパーは顔の仮面を撫でながら笑っているようでした。ステファア二はほっと胸を撫で下ろしバネを拾い上げました。

「大事なものよ、なくさないでね…。これがあればあなたは誰よりも早く走れるし、だれよりも高く飛べるのよ。そうでしょ？」彼女はそういうと優しく微笑みました。

カスパーはバネを眺めると大事そうに胸に抱えました。

「そう、ふふふ…」

その時でした。

カスパーに夢中だったからでしょうか、彼のバネがたてる鉄の音はその音を掻き消していたのでしょうか…。階上で革靴がゴツゴツと床を叩く音を響かせて近づいてくるらしいのに初めて気づいたのです。

ステファア二は耳をそばだてました。自分の聞き間違えであってほしいそんな思いが彼女を支配しました。もしかしたらスーヴを火にかけたままだったかも…。しかし、聞き間違えなんかじゃない、スーヴなんかじゃない…彼女はそう思わずにいられませんでした。その靴音は今もかすかに響いているのですから。身を固くしカスパーを強く抱きしめました。

カスパーはやわらかいステファア二の体が突然石のように固くなるのを感じ取ると不安で微かなうめき声をあげました。そして彼女が微かに震えているのを感じ取りとても恐ろしくなりました。

「だいじょうぶよ…」そういうとステファア二は階段に目を向け唇をきつく結びました。カスパーは彼女の笑みが消えたのを見ると

彼女にすがりつきました。しかし彼女は腰をかがめゆつくりとカスパーを床に下ろします…。「カスパー…、音をたてないで…」そういうと彼女は肩を縮めて階段へと歩み寄るのでした……。

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『カスパー・ハウザー3』

4人の男たちは屋敷に入ると人の気配を探してあたりを見わたしました。自分たちが徒弟だったころは壁や板張りの床に生きた人間の香りを感じ取ることができましたが、松明に照らし出される屋敷の内部は当時の面影はなく過ぎ去った長い年月とほこり臭いかびた匂いが漂っていました。まるで廃墟のようです。

眼帯の男はまるでその変化にまったく興味を示さないかのように歩を進めます。

「おい、みろよ…」眼帯の男は松明をキッチンへと向けながら歩きます。松明の明かりをたよりに一人の男がキッチンを覗き込みました。鍋からほんのりと湯気が立ち上っています。男は息を飲みました。たしかにこの屋敷には生きた人間が生活しているという証でした。

そして眼帯の男は床に松明の光を向けました。白々とほこりが積もる床にはほこりのない部分とそうでない部分があります。ほこりのない部分をたどるとそれは途中ではつきりとなくなり細いロープが床に結わえてあります。床の隙間からうっすらと光が漏れているのがわかりました。

眼帯の男はとても残酷な笑みを浮かべると松明の炎を振るいほかの男たちを呼び集めました。眼帯の男がかがみ込み細いロープに手をかけました。

ステファニーは階段に四つん這いになり音をたてないように階段をのぼります。天井の床板に力なく垂れているロープを、恐ろしく震える手でなんとか掴もうと手を伸ばそうとしたときでした。ロープはぐっと引き締まりました。伸ばした手を胸にあて襟元で握りしめました。

床板は引き上げられました。ステファニーは恐怖で目を見開き、

声をあげる寸前でした。眼帯をした男がいやらしい笑みを浮かべにやにやと彼女を見下ろしていたのです。松明の炎が大きく見開かれた目の中で音をたてているように燃え盛っています。ぎらぎらと輝きを放つ眼にステファニーの体は凍りついてしまいました。

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『カスパー・ハウザー4』

男の固い靴底がステファニーの首元に叩きつけられました。憎しみを込めたような恐ろしい力で眼帯の男は板張りの階段から彼女の体を踏み落しました。ステファニーは階段を転げ落ち、思うように息ができない体をずるずると這わせて、床に打ち付けた肩を抑えています。うめき声をあげながら口元に血をにじませていました。

這いずるステファニーを追うように男たちの靴音が階段に音をたてます。

「ハハハハ！これがハウザー家の日常というやつか！落ちぶれたもんだな！」眼帯の男が地下室を見わたし大声をあげました。

カスパーは震えていました。いままで味わったことがない恐怖というものを感じ取っていました。体は震え足がすくみます。胸に二つのバネを大事に抱えながら背後の壁に体を押し付けていました。

「あなたたちは…」ステファニーは顔を男たちに向きました。揺れる松明の光に照らし出される男たちに見覚えがありました。そのとき、眼帯の男が誰なのかもわかりました。全員ホイットマンディーの徒弟たちです。しかし昔の人のよさそうな人柄はみじんも感じられず、自分や夫を慕っていた彼らとはその身に漂わせる雰囲気はあるところとは違い、まったくの別人のようでした。彼女はそれを感じ取ると恐ろしさに震えずにいられませんでした。

「いったい、な、なにをしに……」

「きまつてるだろう…、金が尽きたんだよ…」眼帯の男はそういうとポケットのビンを取り出し中の液体をステファニーの体に撒きました。あたりに油のにおいが立ち込めます。ステファニーは慌てて体を起こそうとしましたが男に脇腹を蹴り上げられると、うめき声をあげて倒れ込んでしまいました。油が髪を濡らし、口元に流れ落ちてきます。

「あなたたちはすべてを持って行ったでしょう…、こんなことをし

ても、わたしたちにはもう何も残されていないわ……」息を詰まらせ苦しそうにそういうとステファニーは肩を落とし目を床に向けました。

「あるだろう……。おまえとホイットマンデューのたったひとつの宝物とやらがな!!、ハハハハ!!」

彼女は肩を震わせ顔をあげました。目をカスパーに向けます。彼はずるずると背中を壁に押し付けながら後ずさりしていました。部屋の隅に行き着くと小さくなりバネを抱えて震えています。

「カスパー……、カスパーアアア!!」

ステファニーの叫び声を聞きカスパーは顔をあげました。声のする方向を必死で探し首を振ります。

「だまるんだよ!!」眼帯の男はステファニーを蹴り上げ、松明の炎を彼女の顔に近づけました「お前はさっきから何をほざいてるんだ……?」

蹴られた腹部を抑え、うめき声をあげるステファニーの頬に炎の熱が伝わります。燃え上がる炎を見つめ、すこしでも炎から遠ざかりとうと彼女は後ずさりました。

「……やつの魂が必要だろ?……やつが生きてる限りあの剣は完成しないんだよ!!どこだ!?おい!!剣はどこなんだよ!!」男の持つ松明が、後ずさるステファニーの眼前に突き付けられます。

「しらない……。あの人はどこかに隠してしまったの……。わたしは……、カスパーもしらない……」

「おい、おまえら!」眼帯の男は顔をほかの男に向きました。「なにぼさっと突っ立てるんだ?あの化け物をつかまえろよ……!!」

ランプに照らし出される男たちの影がじりじりとカスパーに近づいていきます。男たちは息を飲みました。一人の男が思い切って彼の腕をつかみました。

カスパーは腰をあげその腕をふりほどき逃げようとしたが、首を強い力で抑え込まれうめき声をあげました。もう一方の腕を別の男が掴みあげると、両腕からバネがこぼれ落ち音をたてました。

「やめて……!! その子はなににもわからないのよ!! その子だけは……」ステファニーは涙を流し懇願しました。眼帯の男の目がステファニーを見据えます。

「ガキを生かしておくことなんてできるわけないだろう……。じゃあ、なにか? お前なしであのガキが生きていけるとでもおもっているのか……?」男は不敵な笑みを浮かべました。「剣はどこにあるのか? 俺が教えてやろうか……? ホイットマンディーのやつは肌身離さず剣をもっていたはずだ……。この地下のどこかにある……ん? そうだろ?? ハハハ、じつのところ俺はお前の口からそのことを聞き出そうなんてこれっぽちも思っていなかったんだ……ただ、どうやって殺すかだけを考えてたのさ……」

眼帯の男から笑みが消え表情が失われました。その何も語らない冷たい表情、氷のように固まった瞳を見つめ、ステファニーは叫び声をあげました。男の手から松明が放たれたのです。松明は床に転がると瞬く間に炎を床に立ち上げ彼女の服の上を駆け上りました。

「イヤアアアアアア……!!」彼女は叫び声をあげながら自らの体を、喉を掻きむしりました。炎に包まれるなか赤い世界にカスパーの姿を探しました。

ステファニーの悲痛な叫びを耳にするとカスパーはうめき声をあげ男たちの手の中で暴れました。「グアアアアア! グアアアア……!!」男の頬を掻きむしり、足で男の腹をけります。カスパーの耳に炎が立ち上る音、その中で苦しみもだえるステファニーの悲鳴が響きます。

階段のそばに立ち尽くし、取り残された一人の男はガタガタと震えながらその阿鼻叫喚の世界ともいえる地下室をただ見ていました。眼帯の男がその男の襟首を両腕で掴みあげ声をあげます。

「おまえなにやってやがるんだ!! さっさと剣を探せ!!」男の体を床に叩きつけるとみずからテーブルを蹴り倒し、ガラクタをかき回します。テーブルのスープの皿が床に落ち音をたてて割れました。男は慌てて四つん這いになり、辺りを物色し始めました。立ち上が

り樽や棚を引っ掻き回しました。

カスパーの足の爪が腕をつかむ男の腕の肉を掴み引きちぎりました。まるで獣に噛まれたかのようなえぐられた跡ができ血が噴き出します。男はカスパーから離れると傷口を抑えてうずくまります。それを見たもうひとりの男は恐ろしさでカスパーから手を離しました。カスパーは燃えさかる炎が音をたてている方向に顔を向けるとその中に飛び込んでいきました。

すでにステファニーの叫び声は聞こえず微かに自分の名を呼んでいるかすれた声が聞こえるだけでした。カスパーはステファニーの燃え上がる体にすがりつき唸り声をあげました。その体を抱きしめ炎の中で震えていました。

「なにしてるんだ！！捕まえろ！！あいつを捕まえろんだ！！やつを安息の剣で串刺しにするんだ！！」

眼帯の男の声が聞こえました。

その男の声を掻き消すような声が、炎の中で震えているカスパーの耳に響き始めました。とても遠くから、でもそれは頭の中で響いているようにも思えます。

『カスパアアアアア…カスパアアアアア…。聞こえてるんだろう…、やっと届いたんだ…。俺様の声が…。俺様にはしっかりと聞こえているぞ、お前の怒りに満ちた鼓動が、お前の体に憎しみというどす黒い血が流れ始めたんだ！！』

「アアア…」カスパーは首を振り恐ろしい声を振り払おうとしました。

『お前の心を支配するものは怒りだ…、憎しみだ…。さあ、お前の魂を引き渡せ、そうしないとお前の魂は粉々に碎かれ、灰となってしまうんだぞ…。楽になりたいだろう…。』

俺に魂を引き渡す代わりにお前に目玉をくれてやろう、赤く輝く炎

の目玉だ、その目玉で世界をみろ！憎しみと怒りと、狂気に満ちた人間どもの世界だ……。ともにすべてを焼き尽くそう……。おれはお前にその力をくれてやるんだ！！さあ、魂をよこせ！！』

「アアアアアアア……！！」彼は喉を掻きむしりました。熱い炎が喉に駆け上ります。あまりの苦しみに彼は声を上げずにいられません。自らの体を支配する感情から逃げ出したい思いでいっぱいでした……。口を結び、体の中の炎を抑えつけようと思いました。ステファニーの固くなった体にしがみつこうめき声をあげていました。

しかし彼はその苦しみに耐えることができませんでした。

彼の仮面にヒビが入りました。二本の恐ろしい角がギシギシと音をたてて額の部分を突き破り伸びてきました。

カスパーは顔をあげました。赤い炎の世界に男たちの影がはつきりと見えました。彼の瞳があるはずの空虚な穴に赤い炎が立ち上がっていたのです。彼の体の中に怒りと憎しみが音をたてて渦巻きま

す。

そして炎に焼かれるステファニーの姿も……。彼はステファニーの顔を見つめました……。そこにはすでに生きていたころのステファニーの面影は失われていました。彼はとうとう母親の顔をみることもできなかったのです。そこには赤く焼けただれた塊があるだけでした。彼の世界が青く色を変えました。まるで立ち上っていた赤い炎が涙を流すかのような青い灯火に形を変えていました。

「アアアアアアア……。――」

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『カスパー・ハウザー5』

「何をしてるんだ!! ガキまで焼き殺す気か!？」眼帯の男は部屋を荒らしながら男たちに向かって叫びました。

「わかってるさ!!」男たちは慌てて言い返しました。しかし男たちがカスパーに手を伸ばすのを立ち昇る炎が妨げていました。

「…だめだ、火がついて近づけない!! ……やつももう助からない! ここもじきに火に包まれるぞ!!」

男はそういうと炎の中に目を凝らしました。真っ赤に立ち上る炎の中に二つちらちらと光る青い炎があったからです。その灯火はカスパー・ハウザーの影の上にあります。まるで瞳が輝いているようです。

そして恐ろしい青い炎が男を襲いました。

それはカスパーの口から放たれたものでした。彼の体の中で燃え上がる青い炎は音をたて大きな岩ほどの塊になり男の上半身を吹き飛ばしたのです。男の上半身は叫び声をあげることでもできず轟音と共に吹き飛び、残された下半身は白い煙を立ち上げ床にころがりました。

眼帯の男は轟音を耳にすると振り向きしました。炎の中に光る二つの青い灯火…彼はそれを見、そして床に転がる人の下半身をみました。「うああああああ!!」腕から血を流していた男が叫び声をあげ逃げ出しました。階段をつまずきながら駆けあがっていきます。

剣を探していた男は体を背中を壁につけながら、恐怖でおびえていました。男は炎の中の青い瞳と眼帯の男を交互に見比べます。

「だめだ……、みつからない……逃げよう……」そういうと瞳に涙のため、肩を恐怖で震わせました。

「ふざけるな! 逃げるんじゃないぞ!!」

そういうと眼帯の男はカスパーに目を向けました。睨み付けていましたが膝は力が抜けたようになり、身動きができないのでした。

炎の中の瞳があたりを見わたしています。カスパーの体の中でまた炎が渦巻き始めました。その音が地下室に響き始めると怯えている男にゆっくりと首を向けます。

「お、おれはまだ死にたくない…、こ、こっちを見るなアアアアア！」男はそういうと壁沿いに階段へ向かって走り出しました。恐ろしい轟音とともに大きな青い炎が解き放たれ男の体が粉々に吹き飛びました。

地下室に響く爆音は眼帯の男を恐怖させました。しかし彼はその眼に目的の物を見つけたのです。粉々に吹き飛んだ男の手首が足元に転がっています、その手首を足で払いのけました。男とともに吹き飛ばされた壁の一部が壊れ穴が開いていました。小さな人の頭ほどの穴です。

その中に銀色の美しい装飾が施された柄の部分と黒い刃が輝いています。

レクイエムソード……――――。

眼帯の男は忘れたくても頭から振り払うことができないあの日の悪夢をよみがえらせていました。ですが、彼の口元には笑が浮かんでいます。

「おれはこの時をどれほど待ち望んでいたことか！？俺のものだ！俺が完成させてやる！ホイットマンデー、俺が完成させてやろう…お前の偉業とやつを。お前の息子の魂をつかってなあ！！」

眼帯の男は炎の中のカスパーの影を睨み付けました。その口はきつく結ばれています。

カスパーの炎の音は微かに小さくなっていました。「まだ時間はあ……」徐々に大きくなるその音を男は耳で注意深く聞いていました。そして片目に力を込めると床を蹴り壁に駆け寄り小さな穴に手を突っ込みました。

滑らかな皮の感触…重い刃の感触が腕にのりました。

「ハハハハ！ホイットマンデー！見ているか！？じつのところお前は犬した奴だ！！これほど胸打つ代物におれはであったことがない

！くだらない情愛に流され偉業をすてるとはお前は間抜けもいいところだ……みせてもらおうじゃないか！！人の命を犠牲にしてまで得られる偉業というやつをな！！」

眼帯の男の背後の炎はすでに轟音となっていました。時は満ちていました。男は自らの背中の中の影に目を向け睨み付けました。そして叫び声をあげ、腕に力を込めて剣を引き抜こうとしました。

「そんな……！！」壁の穴が音をたてて揺れています。組み合わせられた岩が震え、砂が舞っています。レクイエムソードの刃と柄が穴につかえていて取り出せないのです。

「バカな！！クソオオオオ！！」男は拳で壁を何度もなぐり、剣を引き抜こうと体を使って揺さぶりました。壁を殴りつける男の顔に自らの鮮血がほとぼしります。

「いまましい！！ホイットマンディイ！！ステファニーイ！！お前らのガキを！！ぶっころしてやるからなアアア！！」

そう叫んだときでした。炎の熱を受け暖かかった背中に冷たい汗が流れました。彼は腕の力を抜き恐る恐る炎に顔を向けました。

炎のカーテンの隙間から顔を出すものがあります。カスパーはステファニーの体から離れ炎の中から顔を出していました。青い瞳は音をたてて炎を立ち昇らせ、鬼のようなねじまがった角が仮面の額を貫いて伸びていました。口の留め金は吹き飛び、焼けただれた口があらわになっています。驚くほど大きく開いた口の中に炎が渦巻いていました。まるで高温の炉の扉を開いたかのようなその口の中をみつめ、男は恐怖しました。まるで自らの魂を引きずり込もうとするかのような音が耳に響き始めました。

「ああ、やめろ……、やめてくれええええ！！」男は耳をふさぎ、涙を流すと膝をつきました。

轟音とともに炎が解き放たれ男を襲います。皮をはぎ、肉を焼きつくし、骨を灰にします。肉体とともにその魂をも灰とかすような高温の熱が音をたてて地下室に渦巻きました。炎の中に揺らめく男の眼帯の切れ端をカスパーの青い炎が粉々に吹き飛ばしました。

地下室は炎に包まれ、カスパーの叫び声と炎が渦巻く音が絶え間なく響き続けるのでした……。

『ああ……、じつに爽快な気分だ……。カスパー・ハウザー、炎の音色に耳を傾けてみるよ……。じつに心安らぐと思わないか？これに悲鳴が響き歌となるんだ。高尚なる宴というやつだ。しかし宴に酔ってる暇はないのさ。この地下室は陰鬱で醜悪な……すこぶる上等な環境だが、お前に外の世界を見せてやろう。俺様はお前に外の世界をぜひ見てもらいたい。さっきから匂ってくるこの醜悪なおいがわかるか？強欲で残忍、狡猾にして冷酷で傲慢、褒めだしたらきりが無いが……、たがやつらは俺たちと違ったただのケダモノだ。俺様たち悪魔や鬼と違って低俗で貧弱、それはまさに虫けらのごとしだ、それが人間というやつだ……。さて、外へ行こうか……。そうだ……、お前には残念ながら、俺様のような翼はないな……。』

カスパー・ハウザーはゆっくりと足元に転がる二つのバネを引き寄せた……。

『ハハハ……いいぞ！！人間どもは待たせるとヘソを曲げて悪態をつくのさ！俺様たちのことを固唾を飲んで待ちわびているぞ！やつらの悪態と悲鳴をこの身に浴びようじゃないか！！ハハハハ！！』

11. スプリング・ヒールド・ジャックー『カスパー・ハウザー6』

屋敷を取り巻いていた町の人間たちは、今か今かと徒弟たちを待ちわびていました。町の噂が人々の好奇心に火をつけて、どうなるものかと事の顛末を心待ちにしていたのでした。

やがて灰色の煙が屋敷から滲み出てきました。

「おい…、火がついているんじゃないか？」

「ああ、そうだな…」

若い男が二人、松明の下でそういうと屋敷に向かって歩みだしました。それにつられるように町の人々は屋敷を取り囲む輪を縮めていきます。屋敷の半開きの扉から煙が噴き出し始めると、ドアを激しく開き煙を纏った男が飛び出してきました。手からおびたらしい赤い血を流しています。

目に涙を浮かべ腰から崩れ落ちる徒弟を支え男は問いかけます。

「どうしたんだ？！なにがあった？屋敷に火がついてるんじゃないのか！？」

「悪魔だ、火が…火が…！！」そういうと彼は近くの松明を奪い取ると煙吹き出す屋敷の中へ投げ込みました。「全部焼き尽くすんだ！！なにしてるんだ、すべて灰にしてしまわないと…！！」

目に涙を浮かべ崩れ落ちる徒弟を支えていた男はあたりを取り囲む男たちの顔をみました。徒弟の様子をみて周りにいた男たちはただならぬ事態に陥っていることを感じ取りました。

「ほかのやつはどうしたんだ…？」

「みんな…死んだ…。そうに決まってる！！生きてあそこを出てくることなんてできないんだ！！俺は見たんだ、恐ろしい炎の塊が人間を吹き飛ばすのを！！何をしてるんだ！？はやく屋敷ごと灰にしてしまわないと…！！」

男はそう叫ぶとさらに松明を奪い取り屋敷に投げ込みました。

煙の向こうに赤く火が登るのが見えました。

男たちは顔を見合わせると意をけつしたようにハウザー家の屋敷に火を放ち始めました。いたるところから松明が宙を舞い、屋敷に投げ込まれていきます。窓ガラスの割れる音が響き、炎が屋敷の中を赤く照らし出しています。

乾ききった枝葉のような屋敷は恐ろしいほどはやく炎に包まれていきました。

徒弟は離れてそのようすを見ていました。汗と涙でぬれた顔を血で染まった自らの両手で拭いながら笑い声を上げ始めました。屋敷を眺めながら歩き回ります。

「ハハハハ！灰にしてしまえ！！全部燃やしてしまえばいい！！」
屋敷を包み込んでいた煙を吹き飛ばすかのように炎が夜空に舞い上がります。月を揺らし、夜の闇に轟音をとどろかせていました。

徒弟は安心したのか、膝を地面につけました。荒い息をしながら無表情に地面を眺めています。

そのときなにかが爆発するような音が響き渡りました。落雷のような激しく地面を揺るがす音を聞き徒弟は肩を縮めました。

「あ、あれはなんだ……？」まわりの人間の呆けた声が徒弟の恐怖をよみがえらせました。おそろおそろ人々が指さす方へ顔を向けます。

まるで炎に染められたかのような赤い空がありました。すさまじい音は屋根が吹き飛んだ音でした。火の粉がまるで雨のように人々の上に降り注いでいます。赤く揺れる人々の顔は屋根の上、炎の中にうずくまる黒い影に向けられていました。

「ああ……そんな……」恐怖のあまり徒弟はその影から目を逸らすことができなくなりました。影のなかの青い灯火が自分を見つめているのを感じ取っていました。

「あれか？あれが……悪魔か！？」

周りの男は徒弟を見つめます…。

「だめだ……。もう逃げられない……」徒弟は力なく腕を垂らすとうつろな目からただただ涙を流していました……。

『みろ！みろ！！カスパー！あれが人間どもだ！！炎に照らし出される奴らの顔がいかに醜悪な面構えか見て取れるだろう！？』

降り注ぐ火の粉の中、人々が自分を見上げるのを彼はじっと眺めていました。どこからともなく女たちの悲鳴が上がりました。赤くちらついていた顔が消え去りカスパーに影を向けちりじりに逃げ始めました。

『これが悲鳴というやつだ。さあ、やつらの魂に恐怖を刻み込んでやるんだ、お前の姿をやつらの瞳に焼き付けろ！！いそげ！やつらが逃げちまうぞ！！』

カスパーは両手を広げ、首を伸ばし獣のような咆哮を夜の闇に響かせました。屋敷を包み込んでいた炎が渦を巻き夜空に高く駆け上がりました。すさまじい音が高く遠くまで響き渡ります。

『さて、おつぎは…そうだ、あそこに俺様たちを見上げる子羊が一匹いるだろ？奴を狩るんだ！！やつらの魂に俺様たちの恐ろしさを刻み込んでやれ！！生きたまま地獄の恐怖を味あわせてやるんだアアアア！！』

カスパーは屋根の端に一步踏み出し姿勢を低く身構えました。カトに体重が乗ると力が体中にみなぎりしました。

鉄の弾ける音とともに屋根が吹き飛びました。赤い火の粉が夜空に舞いあがります。風を切る音をたて、黒い影が闇の中を疾走します。

11. スプリング・ヒールド・ジャック―『誕生』

男たちは黒い影が飛び上がりまっすぐこちらに向かってくるのを見ると、膝をつく男を残し、叫び声をあげて逃げ出しました。

膝をつく男はただこちらに向かって飛んでくる黒い影を見つめていました。時が一瞬止まります、男の鼻先にはあの仮面、燃える炎の目玉がありました。

「ああ……」男の微かな声は噴き出す血しぶきに掻き消えます。男の胸から首にかけて肉がえぐり取られたのです。

再びカスパーは空に舞ました。別の屋根に飛び乗ると振り返り辺りを見わたします。

人々は逃げ出しました。ひたすら叫び声をあげ、つまづき倒れたものを踏みつけ、その耳に鉄の音が響くのを恐れ、走り続けました……。

火の粉降り注ぐ屋根の上、人々の悲鳴に聞き入りながら引きちぎった男の下あごを見ました。並んだ歯の間に血が滴っています。それを投げ捨て、痛む手を見つめます。爪が割れ剥がれていました。カスパーの頭に恐ろしい鬼の声が響きます……。

『かまうことないさ：爪は作ればいい、お前の才能というやつさ。足りないものは鉄を溶かし鍛えればいいだけのこと。町には腐るほどお前の大好きな鉄があるのさ。さて、狩といこうか、長い旅の始まりだ！カスパー・ハウザアアアアア！』

彼の長い旅はこうして幕を開けました。恐怖は噂となり、噂はいつしか彼に名前をつけていました。『カカトにバネを持つ男』……、人々は彼を『スプリング・ヒールド・ジャック』と呼び恐れしました。

その名はイングランドを駆け巡り、いつしか噂とともにあの海を越えたのでした。

この恐怖の噂には、恐ろしい鉄の音、恐怖の仮面とツノ、火を噴く化け物などいくつかの共通点があり、ごくまれにはあったが『レイクイエムソードの伝説』と相まって語られることがあった。

そして『グレスデンの町』は新たなこの噂の舞台として、伝説の剣の物語の本当の始まりの舞台として選ばれたのだった……。

12. グレスデンの町と墓守

『グレスデンの町』は数百年という長い年月、重い病に苦しんでいた。

死人が蘇る墓場、ソルマント……。

幾人もの旅人や詩人がこの町を通るたびにこの病を侮蔑の言葉で表現してきた。

『新たなる産声は、墓標を傾ける
産声は聞くものの耳を裂き、瞳は赤く血で染まる
その血染めの瞳に焼きつけるがいい——』

戯れに歩く死人の群
屈辱と背徳の免罪符
漆黒の闇にトグロを巻く蝙蝠の群れ
鉛の棺桶を背負ううつろな軀
歪んだ墓標の軋み
死肉をついばむ巨大な黒鴉
危険を呼ぶ汚辱の霧
恐慌と流血に傾く聖者の塔
憎愛と滅びのグレスフォード城
狂気と情熱の墓守たち——……』

漆黒の闇は夜をじつとりと濡らし、星を溶かし、白銀の巨大な月を静かに浮かび上がらせていた。重く町にのしかかる暗闇が硬く緊張している、まるで空気が鋼のようになり、軋む音をたて、いまにも壊れてしまうかのようなだった。

馬に乗った恐ろしい黒い影が白銀の巨大な満月を背負いグレスデンの町の入口にたたずんでいた。長く黒い鉤棒を高々と掲げ、重く艶のある漆黒のマントを羽織っている。何百年という時の流れの中で彼らはこうして町の入口を睨み付けるように足を止める。黒馬は息荒く白い息を吐きながら馬上の主の掛け声を待っている。

グレスデンの町はその影に怯えながら、息を殺し、彼らをただじっと待っていた……。

子供たちはこの日ばかりは大人たちに物語をねだったりしない。どんな美しい、胸を高鳴らせる物語があるかと彼らはこの日恐怖のグレスデンの物語の登場人物となってしまうからだ。

彼らは金切り声をあげ、足をばたつかせながらタンスの中、ベッドと床の間などに身を隠す。そして、目や耳を手で覆う。

ある小さな女の子は顔を両手で覆い、目をふさいだ。残された耳をふさぐために涙を流して駄々をこね兄の両手を借りるのだった。

ある小さな少年は両手で耳をふさいだ。薄い瞼がたよりなく母親の胸に顔をうずめると、苦しそうにふうふうと音をたて、荒く肩で息をする。

家の中は暗く大人たちはただ床に膝をつけ、ベットに肘を押し当てると、恐ろしさに震えながら、ただただ『時』に祈るばかりである。神が町に与えたであろうこの忌まわしき習慣を解決できるのは『時』以外にないであろうからだ。

やがて馬の嘶きが町を震え上がらせる。

石畳を破壊するような荒馬の蹄の音が、今にも扉をぶち破らんばかりに響き渡る。

ある時代の墓守は恐ろしい奇声を発して町を駆け抜けた。

あるものは二人連れで現れ、寄進品を奪い合った。

あるものは赤い瞳の大鴉をつれていた。翼の巻き上げる風が窓を

震わせていた。

中には両手に手かせをはめられ黒く太い鎖で両手の自由を奪われているものもいた。

彼らは地獄も受け入れがたいほどの罪をその身に背負っている、それでも彼らは満たされてはいないのだ。激しく音をたてる動脈を探しあて首を胴体から引き離し、噴き出す血を浴びることを考えている。新鮮な目玉をくり抜き玉突きゲームに加えようとしている。赤くよく動く舌を切り取りディナーの皿に並べようとしている。

彼らは何よりも生きのいい心臓を欲している。地獄への手土産だ。彼らはなによりも地獄へ行くことを望んでいる。だからこそ、この世で悪行をつくすのだ。

やがて子供たちの震える瞼がゆっくりと開き始めた。

馬のひづめの音を闇が飲み込むように掻き消していた。町は静寂に包まれ、空気が緩やかに流れ始める…。

子供たちはタンスの扉を微かに開け、またベットの床の隙間から顔をのぞかせて外の様子をうかがい始める。大人たちの微かな足音を聞きつけるとそこから這いだして急いで駆け出すのだ。両親の胸に顔をうずめひたすらその優しい匂いを嗅ぎ、そのぬくもりを感じ、やさしい声を聴きながら一緒にベットへと向かうのだった。

グレスデンの子供たちはそんな夜を過ごさなければならぬ運命を背負っていた。

しかし、町の人々がこの病から解き放たれる日がやってきたのである。

日が登ってからというもの、グレスデンの町を恐ろしい事件が震え上がらせていた。町は慌ただしく動き出していた。

そしてある決心をした、忌まわしき習慣に終止符を……。

グレスデンの町が夕日に染まり始めたこの日……、この時……。グ

レスデンの町は息を飲み、緊張を隠せない人々で満ち満ちていた。
遠くで鳴く鳥の声が町の緊張を際立たせ、男たちの足早に歩きま
わる影が長く伸び、いくつもあわただしくすれ違っていく……。

『ハカモリ……』その言葉は小声でささやかれ、唾を吐く喉の音
とともに道端に吐き捨てられていた。

13. 夕暮れるとき

太陽が西の空に傾くころ、キツチョムの夢は終わりを告げようとしていた。

森の木々が静かにやさしく鳥たちを枝葉の内側に招き入れ、小鳥たちは寝支度をするようにして枝葉の影で夜を待っていた。虫たちがところどころでささやき始めるとどこからともなく一匹の蝙蝠が縦横無尽に夕闇の中をくると空を舞っていた。

墓守の小屋は薄暗く冷たい空気が床を這って流れ始めていた。

レイジーの背に揺られていたのはいつのことだったろうか……。夢の中でキツチョムはいつのまにかとぼとぼと薄暗い灰色の世界を歩いていた。息苦しさを感じ振り向くとぼんやりと世界がゆれていた。まるで水の中で目を開いたようにゆらゆら揺れる世界では、目を凝らしても先を見通すことができなかった。揺れながら雲のように行き過ぎる物体を追って、空を仰ぎ見る。

そのときキツチョムの両手に重い何かのしかかってきた。手に目をやると、とても大きな青いリングを両手に二つ持っていた。あまり微かなにおいがあたりにただよう。キツチョムは思わず一つのリングを手から落とした。そして自分の手をみた。とても小さな手をしていた。

『ああ……そうだ、僕は町に来たんだ』

キツチョムはちいさな男の子になっていた。昔の自分の姿をなんの違和感もなく受け入れていた。転がるリングを追いかけて走り出した。大きな黒い影をよけながらリングに手を伸ばす。小さな手に力をいれてリングを掴んだ。

「あれ、モリスはどこへいったんだろう……」リングを胸に抱き、リングについた砂を手で払いながらキツチョムはあたりを見わたした。キツチョムはモリスの戒めの言葉を思い出していた。

エギオンが眠りについていいことに、キツチョムは町へ行く幌馬車に忍び込み身を隠していた。運悪く空の樽が町へ行く途中に幌馬車から転がり落ちた。キツチョムはあっけなくモリスに見つかりこっぴどく叱りつけられたのだ。

しかし、キツチョムの決意はこの日揺るがなかった。

「僕は町へ行くんだ！！」大粒の涙を流しながら決して譲ろうとはしなかった。

「聞き分けのないことをいうんじゃない、お前は墓守なんだから昼間町にでていっていいわけなからう？」

「墓守はエギオンだよ！僕は墓守じゃないよ！」そういうときつく握るモリスの腕を振り払い走り出した。そして馬車馬の足元に座り込んだ。「僕はここを動かないからね！！僕を引いていけばいいだろう！！僕はここで死んでしまうんだ！！」そういうとキツチョムは涙を流し歯を食いしばった。モリスがため息交じりに困っているのを見据えると両手を投げ出し倒れ込んだ。

しばらくするとモリスが馬車に乗る音が聞こえ、手綱を握るのがわかった。

キツチョムは目をつぶった。馬が鼻を鳴らすのを聞くと体をこわばらせた。

「僕はうごかない！」キツチョムは叫んだ。

「そうか……」馬車に乗ったモリスの諦めたような力ない声が聞こえた「じゃあ、ここで馬車の下敷きになるんだな……町はもう、すぐそこだというのに……」

キツチョムは弾けるように首をあげた。

「早く乗りなさい…、わたしはこれでも忙しい身分なんだ」

キツチョムは飛び起き涙を拭うと、急いで馬車に乗りモリスに寄り添った。

「いいか、町に連れて行ってやる。しかしこのことは神父様には内緒だ…。それにエギオンには絶対の、絶対に内緒だ…」

キツチョムは何度もうなづいた。

そして彼は怒ったように眉間にしわを寄せこういったのだ。

「それから、町に着いたらわたしから絶対に離れてはいけない、絶対だ。お前は墓守の子だ、お前がなんといおうと、わたしたちがどう言おうと……お前は墓守なんだから……」モリスはそういうとキツチヨムの薄汚れた白い修道服のフードを頭に深くかぶせ、皺だらけの重く大きな手のひらをキツチヨムの頭に置いた。キツチヨムは顔をあげフードから覗き見るように片目を出してモリスを見つめた。

少し寂しげな瞳……、それでもキツチヨムは笑みをみせ、鼻をすすった。「わかった……」そういうと薄汚れた修道服の袖で涙を拭った。

『逃げるんだ!!』

キツチヨムはリングから目を離すと辺りを見わたした。

『…君はここにいちやいけない!! 僕はここにいてはいけないんだっ!!』

自分自身の声、夢を見ているキツチヨム自身の声が夢の世界に響き渡った。

幼いキツチヨムは突然目に涙をため走り出した。

『……そう! 走って!! はやく逃げるんだ!!』

大きなリングを胸に抱き、大きな影をよけながら必死で走った。

涙は頬をつたい落ち、食いしぼる齒の隙間から激しく息が漏れている。

ぼんやり揺れていた世界が打ち寄せる波が引くようにはっきりと形を持ち始めた。すれ違う黒い影は大人たちの大きな体になってキツチヨムの行く手を阻む、ぶつかった固い膝に顔をゆがめ見上げると、冷たい視線が空から降り注いでくる。

幼いキツチヨムは恐怖でおびえ足を止めた。

『だめだ!! 足を止めるな! 走れ!! 走ってくれええええ!!』

「たすけてよお……」幼いキツチヨムの瞳から涙があふれ出た。

「ハカモリだ！！ハカモリのガキが盗みを働いたぞ！！そいつを捕まえろっ！！」

あちこちから声が上がりはじめ、大人たちの体が慌ただしく動き出した。すべての視線が足元に向けられた。

その声を聴くとキツチョムは走り出した。やみくもに大人たちの視線をかいくぐり体の隙間をすり抜けていく。

「こっちだ！！」

黒い大きな大木のような膝がキツチョムの首筋を激しく蹴り上げた。宙に吹き飛ばされたキツチョムは、はげしく揺れる世界の中でくるくると回り、地面に音をたてて落ちるひとつの青いリングを見た。息ができなくなり、痛みが体中を絞めつけている。

青いリングは果汁を血のように吹き飛ばしながら大きな皮靴に踏みつぶされた。

うめき声をあげ転がるキツチョムの顔を町の人間に踏みつけられ身動きが取れなくなった。

「薄汚ねえ、ガキだな……！」

キツチョムの掴んでいた残りのリングは取り上げられた。幼いキツチョムの小さな手が震えながら手を伸ばしている……。その手は容赦なく固い革靴に踏みつけられた。キツチョムが悲鳴をあげると男たちはまるで彼を黙らせるように腹部を容赦なく蹴り上げる。

キツチョムはうめき声をあげることなく動かなくなった。口の中にさびれた味が広がり息ができない……。涙はとめどなく流れでるが瞼はピクリとも動かなかった。

『助けてよ！モリスどこにいるの！？だれか助けてよお————』

———

キツチョムの瞼は固いベットの上で見開かれた。薄暗くなった墓守の部屋に夕日が微かに入り込んでいる

ベットから逃げ出し扉を開け、外に飛び出した。目は見開かれ鼓膜が自らの鼓動で震えていた。頬は涙でぐっしりと濡れ、いまにも膝から崩れ落ちてしまいそうだった。キツチョムは頼りない膝に力を入れて大きな水桶へと駆け出し、乱暴に蓋を放り投げ何度も水をすくい顔を濡らした。息荒く水面を見つめ、揺れる自分の顔を見つめると思い切ったように桶に首を突っ込み水中の音に耳を澄ました。

どれくらい首を突っ込んでいたのか、キツチョムは水しぶきを上げて桶から顔を出した。激しく息をして、両手で顔を拭った。

膝から崩れ落ちると桶に額を押し付け目を閉じた。冷たい風が頬を撫でていく、遠くから微かに虫の音が響き始めていた…。

『キツチョム！お前は町の人間が怖いんだろ！？ハハハハ……』

ゲイル・ハン・オスカーの音が響くとキツチョムは両手で耳を塞いだ。

「僕は町の人間なんて恐れていない！！怖くなんてない！！」

瞳を閉じたキツチョムの脳裏にはアレーネ・グレスフォードの姿が浮かび上がっていた。「僕が、墓守を……やめる……僕だって、やめさえすれば……」

キツチョムは水桶を背に座り込み、ぼんやりと遠くの虫のさえずりに耳を傾けた。

「今夜……。グレスフォードの屋敷へ行こう……。アレーネ・グレスフォードに頼めば、おいしい料理に、たっぷりのワインをきつと準備してくれる……。みんな……みんなきつと大喜びするだろうなあ……」
「デイヴィの子供のような笑顔がキツチョムの脳裏に浮かんだ。スタンがデイヴィをからかいながらワインに舌鼓をうち、キツチョムに微笑みかけている。静かな夕焼けの空にデスブーツの住人の顔がつつぎに浮かんでは消えていく。みんな笑っていた。楽しそう

な笑い声が響き渡っていた。

キツチヨムはそれを眺めながら微かに微笑んでいる……そして、その頬には一筋の涙が流れ落ちていく……。

「僕は……、僕は墓守を……やめる……」そうつぶやくと膝に顔をうずめ、夕闇の中微かに肩を震わせ続けた。

13. 夕暮れるとき――2――

夕暮れは夜の訪れを告げるかのように冷たく日の光を遠く山の彼方に追いやっていく。ぼんやりとその日が沈むのを見つめていたキツチョムの耳に微かに軽快な馬の蹄の音が響き始めた。

キツチョムは遠くの森に目を凝らす。墓場の向こうに広い草むらがあった。その向こうに森の木々が緩やかに壁を作っていた。道はその壁に沿って緩やかなカーブを描いている。その木々のなか馬車の影がちらりと見えた。

「レイジーとロシュの蹄の音だ……。プライス神父が帰ってきた……」キツチョムは立ちあがり遠くの森に目を凝らした。遠くの木々の切れ目に馬車の姿が見え、モリスが手綱を握っていた。キツチョムは急いで小屋に駆け戻りマントを手にとった。慌てて小屋を飛び出すとマントを羽織りながら駆けだした。

墓場の柵を飛び越えて墓標の間を駆け抜けていく。草むらに足をつけるるとまっすぐ森へと駆け込んでいく、木の根を飛び越え、枝葉を交わす。蹄の音が次第に大きくなっていく。

森に軽快な蹄の音が響いていた。モリスは軽く手綱を握って馬たちに道を任せていた。ソルマントはもうすぐそこに見えていた。お腹を鳴らし夕食のことなどをぼんやりと考えている。彼はそのため馬たちの耳が激しく動いているのを見逃していた。

突然、黒い影が馬車の前に立ちはだかると慌てて手綱を握りしめ目をつむった。

レイジーとロシュは嘶き、両足を高々と上げたがすぐに鼻を鳴らし黒い影に頬を摺り寄せている。

モリスは恐る恐る目を開くと黒い影を見つめ怒鳴り声をあげた。

「キツチョム！！死にたいのか！！」

キツチョムはロシュの鼻を撫でながら笑っていた。レイジーが鼻先

をキツチョムの首にあてがい激しく突き当てている。キツチョムは目をモリスに向け、レイジーの鼻先を手で押し戻した。

「あはは、ごめん。でもレイジーやロシュが僕を轢き殺すわけないだろ？」キツチョムは馬車の運転席へ歩み寄った。

モリスは椅子に腰を落ち着け鼻息を荒くした。

「まったく、突然飛び出すやつがあるか!？」

「ははは、ごめん、ごめん」キツチョムは馬車の運転席に上がり、モリスの横に座り手を差し出した。

「ああ…」モリスはその手のひらに手綱を預け肩の力を抜いた。背後にある木製の覗き窓が開いた。

「キツチョムか？」

「ええ、プライス神父」キツチョムは振り向きのぞき窓の中の優しい大きな瞳を見つめた。目の周りに深くしわが刻みこまれ長く大きな白い眉、柔らかな白い髭が真綿のように揺れている。

「あまり無茶をするな…」そういいながらプライス神父の目が優しく笑っていた。

「無茶だなんて……へへ…」キツチョムは鼻の頭を恥ずかしそうに指先で搔いた。見るととなりでモリスがそれ見たことかとキツチョムを睨み付けていた。

キツチョムは肩をすばめながら目をそらすと、手綱を振るった。

馬車の車輪が緩やかに音をたてて動き始めた。

「もうソルマントはすぐそこですよ、プライス神父!! ははは…」

「そうか……」

ゆっくりとのぞき窓が閉まる音を背中に聞きながらキツチョムは馬に掛け声をかけ、打綱をさらに振るった。馬車は音をたてて揺れながら灰色の道に轍を残していく。

キツチョムはちらりと横目でモリスを見た。キツチョムに手綱をゆずり渡しほとしたのか椅子に深く腰をおろして腕を組んでいる。

「あ……、モ、モリス……」キツチョムはちらりと後ろの客席に目を向けるぞき窓がしっかりと閉まっているのを確認すると小声でモ

リスを呼んだ。

「ん…？」モリスは眠たげな瞳をキツチョムに向けた。

「その…実は、話したいことがあるんだ…」

「なんだ？」

「その…」キツチョムはモリスに手招きし、さらに声を落とした。
モリスは体をキツチョムに寄せ耳を傾けた。

「実はその…僕は…」

「ああ！！キツチョム！！」

「……！！え！？まだ何もいってないよ！？」キツチョムはモリスの大きく見開かれた目を見つめた。

「…デスダストだ！！」

「デスダスト！？」

「そうだ！！」モリスはキツチョムの肩をきつく掴むと引き寄せて声を抑えた。

「デ、デスダストなら、ちゃんと作ってるさ…」そういうとキツチョムは仕事場の残り少ないデスダストを思い出しながら目を逸らした。

「そうじゃない！講堂の一件だ！…昨日、講堂がデスダストで汚染されたといっていただろう！？」

「え？！…ははは、ああ、そのことか…」キツチョムはモリスから離れ笑い声を上げた。

「ははは、じゃない！！」

「大丈夫さ、ちゃんともと通りにしたさ」

「ほんとうだろうな…？」

「ほんとだってば、ははは」

「それならいいがな…」。いいか…」モリスがまたキツチョムの肩を掴み引き寄せ、ちらりとのぞき窓に目をやると声を抑えた。「神父様ももういい年なんだ、これ以上心労を与えるわけにはいかないのだ。もとより私の心労もいっぱいいだ！」

そういうとモリスはキツチョムをつき離れた。

「わ、わかってるさ……」キツチョムは目を落とし揺れる馬車にしばらく身をゆだねていたが、意を決したように背筋を伸ばした。唇をきつく結び意を決した。

「モ、モリス!!」

キツチョムはモリスを見つめた。ウトウトしていたのかモリスは目を見開き飛び起きた。

「な…、なんだ？」

「こ、これだけは言わせてほしんだ……。その……僕は…墓守を…」

その時だったモリスの腹が空腹で悲鳴を上げた。悲痛な驚くほど大きな悲鳴だ。

「あ……、あはははは!! いやはや実のところ朝に軽い食事をしていままで何も口にしておらんのだ!! ちなみに神父様もな。キツチョム! 急いでくれ、暖かいスープにバターたっぷりのパンが恋しくて仕方ない。空腹は最高の隠し味というからな、はははは!!」

モリスは微かに頬を赤らめ豪快に笑った。

「ううう……」キツチョムは隣で深くため息をつくと瞳を閉じた。

目を見開くと体を使い手綱をこれ以上ないほどに力強く振るった。叫び声をあげてレイジーとロシュを煽った。彼らは地面を激しく蹴り上げたてがみを風で揺らした。馬車は激しく軋む音をたてながらスピードを上げていく。

「おい、おいこら! キキキキキ、キツチョム!!」座席にお尻を激しくたたき上げられながらモリスは叫び声を上げた。

馬車は道を逸れると、激しく音をたて飛び跳ねた。土煙を高々と上げて教会への緩やかな坂道を登っていく。

「キキキキ、キツチョム!! いいっ、いい加減にしないかあああああ!!」

夕日が沈み、暗い影にあたりは満たされようとしていた。夜はすぐそこまで来ていた。そんな夕暮れの終わりにモリスの叫び声がソ

ルマンの墓場に響き渡っていた……。

13. 夕暮れるとき―3―

ソルマント教会は薄暗い夜の膜に覆われ、幾人かの使用人によって灯された明かりが窓にぼんやりと暖かく灯っている。

馬車はソルマントの厩の前に軋んだ音をたてて停まった。レイジーとロシュは重い馬車から逃れたいのか激しく鼻を鳴らしている。

「いい加減にしないか…、あんなにスピードを出すやつがあるか！」
モリスは馬車の手すりにしがみつきながら息荒く声を上げた。

「モリスが急げといったんじゃないか、それにほら、そろそろ夕食の時間だろ？ スープが冷めるよ」
そういうとキツチヨムは馬車から降りた。ちょうど馬車の扉が開き腰を抑えながらプライス神父が地に足をつけようとしていた。

「ああ、大丈夫ですか？」
キツチヨムは慌てて神父の肩を支え手を取った。

「まったく……、無茶をするなといったそばからこれだ……」
神父は笑いながら腰に手をあて背筋を伸ばした。プライス神父はキツチヨムより頭一つほど大柄で大きな髭をたくわえている。キツチヨムが手にしている手の平は皺だらけだったがとても大きかった。

「ご、ごめんなさい……、モリスがよけいなことばかりいうものだからつい……」

「なにが余計なことだ！」
モリスは後ろからキツチヨムをどなりつけた。

キツチヨムは首を縮めると振り向きモリスを見る。

「二人とも、そのくらいにしておきなさい」
神父はそういうと馬車から大きな荷物を取り出した。慌ててモリスが荷物を取りに歩み寄る。

「わたしが持ちましょう…、いいか、キツチヨム馬車をもどしておくんだぞ」

「言われなくったわかってるさ、今日は寄進品を集める日だからね。」

今のうちにレイジーを休めとかないと」

「そうか、ご苦労だな、気を付けていくんだぞ」神父の優しい声が響くとキッチンヨムは笑顔でうなずいた。

「ささ、いきましよう。プライス神父もお疲れでしょう…。急いで食事の支度をさせますから…」そういうとモリスは神父を促すように歩きはじめ、ふと足を止めた。

「キッチンヨム！！」

「なに？まだなんかあるの！？」

「いいか！スープが冷めてしまうのは皿に盛った後のことだ！」モリスはそう叫ぶと踵を返し歩き出した。

「なっ！！わ、わかってるさ！！」キッチンヨムは土を蹴り砂煙をあげた。レイジーの首筋を撫でながら舌打ちをする「わかってるさ、それくらい。なあ、レイジー……」

レイジーはただあきれたように首を振るだけだった。

「まったく……お前らときたら仲がいいのか、悪いのか……」神父は大きな髭を撫でながら困ったような声を出した。

「いいも悪いもこれが教育というものです！エギオンなんか子守させておくからあんな生意気な、世間知らずに育ってしまったんですよ。あれじゃ、まるで反抗期の子供だ」

「ははは、そうだな。しかし最近は顔つきも少し変わってきたと思うがな。なにやら一人ではぼんやり考え事をしているのを見かけるぞ」
「キッチンヨムが？ははは…、腹でも空かしていたんでしよう」モリスはそう笑いながら振り返り闇の中で馬車の手綱に手をかけているキッチンヨムをみた。『はて？そういうば、なにやらいいたいことがあるだの…なんだのって……』

「そばにいて気づくことはあるか？教育者なのだろう？」

「…ははは、キッチンヨムに限って悩みなんで、ないない」モリスは笑いながら手を顔の前でふり、ふと浮かんだ馬車の上での会話を打ち消した。

「そうか、わたしにはキッチンヨムはキッチンヨムでよくやってると思うがな、エギオンがここを去ってからというもの、彼はひとりでエギオンの仕事を引き継いでいるんだ」

「まあ、そうですがね、それも墓守のことに限ってのこと。奴の世帯はいまだ自分中心にまわってるんですよ。わがままで自己中心的、それを証拠にこの教会のことや神父の気苦労にはまったくの無関心ときてる」

「それをいうな……。そもそもこの教会のことを彼に黙っているようにいったのはこの私だ。いまや、新教徒、旧教徒だのと一枚岩だった信仰は派閥によって分離されはじめた……。変わらないのはわれわれがいまだに異端扱いということだけだ……」そういうと神父は深くため息をついた。大きな髭が膨らんだかと思うとしぼんでいく……。

「まあ、下手をすれば、いずれ政治家よろしく勢力争いに発展しかねませんわな……」

「うむ……。この教会を守らねばならん……。そして、この墓場もな……」そういうと神父とモリスの二つの影は遠く静かに夜に沈む墓場を見つめている。重い沈黙が二人を包んだ。

「……キッチンヨムとて無関係ではありませんまい……」モリスの声が沈黙を破った。

「話をする必要はない……、私がなんとかする。わたしが……」神父の決心を固めるような一言にモリスはため息をついた。

「プライス神父……、それが『子供あつかい』というのではありませんかね？彼を、子どもあつかいしている」

プライス神父は目を丸くしてモリスを見つめた。そして笑い声を上げた。

「ははは、一本取られたようだな……。お前はなかなかの教育者だ……。さて、さっきからいい匂いが漂っているようだが……わたしはもう腹が減って死にそうだ」

「ああ！そうですね、食事の支度でした！いそぎましょう」モリス

はそういうと神父の前を足早に通り過ぎていく。プライス神父はキツチヨムの姿を消した厩に一瞥くれるとモリスの後に続いたのだった。

14. 『リディアーヌ・グレスフォード』の登場

14. 『リディアーヌ・グレスフォード』の登場

深い闇に包まれた森の中を激しい音を立てて馬車は疾走していた。手綱をにぎり馬用の長い鞭を小脇に抱え、四頭の馬車馬を器用に操るのはグレスフォードの使用人マリヌス・ルツベ少年である。トレードマークの大きなハンチング帽を風に飛ばされないように目深にかぶっている。

彼の頭の上では森の木々たちが両手を広げて覆いかぶさってくる。次から次に襲い掛かってくるその大きな影から逃げるように彼は頭を低くしていた。

やがて緩やかなカーブに差し掛かると、木々の合間に草むらが見え隠れする。ルツベ少年が頭を持ち上げると三角帽をかぶった高い二本の塔が見えた。ソルマント教会だった。彼は鞭を取ると同時に手綱を振るった。空を切る音を響かせて鞭を振るうと馬車馬のお尻をたたき上げる。馬車馬は悲鳴をあげるとさらにスピードを上げていく。馬車の屋根に取り付けられていた二つのランプの炎が激しく揺れ、光はあちらこちらへとあらぬ方向へ飛んでゆく。

馬車の車内にもランプがひとつ天井に取り付けられていた。ランプに照らし出される車内には軽くカールした金色の髪をもつ女性がひとり椅子シートに腰を下ろしていた。その髪先はあらぬ方向に跳ね上がっている。彼女のブルーの瞳はランプの光を受けつややかに輝いていた。堀の深い目元にまっすぐに伸びた眉、厚く柔らかな血色のいい唇をもっている。しかしこの時はその唇をきつく結び、分厚いノートとメモを睨み付けながらにやらぶつぶつと独り言をつぶやいている。

天井のランプが慌ただしく揺れ始め、シートががたがた音をたて

はじめた。彼女はふと目を上げ、揺れるカーテンを開きガラス窓に顔を近づけ外を見やった。流れゆく木々の隙間にソルマント教会の影が見えた。

彼女は軽いため息をつき、正面のカーテンに手を伸ばしカーテンを開いた。ガラス窓の向こうのルッベ少年の影が激しく揺れている。前面のガラス窓を開くと彼女の金色の髪は風を受けて激しくなびいた。

「ルッベ！もっとゆっくり走りなさいよ！落ち着いて考え事もできやしない！！」

「リディア、だってソルマント教会がすぐそこだろ！！」

「だからなによ！まいどまいど、同じところでスピード出されたんじゃないわ！」

「なにいつてのさ、いつも屋敷に着いたら高いびきのくせに！」

「なんですって！？」

「：それに、今日は寄進品集めの日だ！」そういうとルッベ少年は帽子のつばをあげ、高く上りゆく月を見た「：このままだと墓守とはち合わせだ！！」そういうと忘れていたとばかりに鞭を振るった。馬車の車輪が軋む音をあげた。

「ふふふ、なに？あなたも墓守のことが怖いんでしょ？」

「な、こわくてなんてないさ！！僕は：、僕は：」ルッベ少年は思わず、墓守をグレスフォードの屋敷に招き入れた日のことを口にした。墓守はどこにでもいそうな、間の抜けた若い男だった。執事長のコールリッジもあきたほだだ。しかしそのことはコールリッジから誰にも話してはならないときつくいきかされていた。ましてやりディアヌ・グレスフォードの耳に入ったらと思うと……。少年はかぶりをふった。

「とにかく僕は、怖くなんてないんだ！！」

「あら、そう……」そっけなくそういうとりディアは身を引き、体を車内にもどしてカーテンを閉めた。

「フン！！」ルッベ少年は鼻息荒く手綱を握りなおした。

「ウアアアアアアア……ルツベエエエエ……ルツベエエエエ……」

ルツベ少年は振り向き声を上げた。カーテンの隙間から毛むくじやらの腕が伸び、今にも彼の肩を掴もうとしている。

「うああ!! やめろ! やめろお!」

「ルツベエエエ……」身を引くルツベを追うように腕が右へ左へ動いている。

「やめろ! ……やめろよ、リディアなんだろう! ?」

カーテンが音を立ててさっと開かれた。

「あら? ばれてた?」

「わかるにきまつてるだろ! ? 変なことするな! !」

「なに涙目になってるのよ、ふふふ」

「涙目にもなるさ……、だいたいこんなに遅くなったのもリディアが悪いんだ! ! 昨日の夕飯までには帰る約束だったじゃないかあ」

「それは昨日あやまったじゃないの。わたしだって予想外だったのよ、まさかりビングストーンの商業ギルドのやつらがあんな心の狭い人たちだったなんて! !」

「そんなの決まってるよ、組合なんて結局は自分たちの利益を確保するためにあるんだろ? 父さんが言ってたからね。それに予想外も何もリディアは後先考えずにいつも行動するじゃないか……」

「生意気いうわね、思いついたら即行動! ! これが私の信念なの! ! 見なさい、この毛並……今回はいいもの見つけることができたわ」

リディアは灰色の柔らかいふくらみを撫でながらいった「これは、北東の商人がもってきたものよ、北から来たただでギルドの連中から鼻であしらわれてたの、でも私は違うわ。重要なのはどこから来たかや誰が持ってきたかじゃない、重要なのはこの質よ……こういう価値のあるものを一つでも多くみつけるの」そういうとナディアは毛並みを頬に当てその滑らかさを堪能した。

「でも、その毛皮どうするの?」

「いい、さっきからそれを考えているのよ! !」リディアはカーテ

ンを閉め深く腰を下ろした。いまだランプは激しく揺れていた。

いつのまにか床にメモが一枚落ちていた。彼女はそれを拾い上げた。『今日は墓守が寄進品集めに来る日だったのね……』窓の外は暗闇が広がっていた。いまにも墓守があらわれるかのような静けさ……『夜が……この暗闇をみんなは恐れてるだけよ……墓守はそこに生きているだけ……触れてみないと……なにもわからないわ……。』彼女は毛皮を見つめ、細く白い指先で毛並みをなでながら、ふと窓の外に目をやり暗闇の中に墓守の姿をさがした。

リディア・ヌ・グレスフォード。グレスデンの町の中でも数少ない、墓守を恐れない女性だった。

15. ダブル フェイトフル エンカウンター

森の暗い夜道に静かにレイジの蹄の音が響いている。すでに夜空にグレスデンのバルバドスの塔が見えていた。

キツチョムはのんびりと体を揺らしながら馬上ですっと考え事をしている。月はまだ完全に頭の上に登っていなかった。ほんの少し早く教会を出発していた。それもこれもグレスフォードの屋敷に入る時間を考えてのことだった。おそくなりすぎることはなかっただろうが、キツチョムの頭の中にはアレ・ネ・グレスフォードに聞いてみたいことが次から次へと浮かんでくるのだ。

薄暗い小屋の中であだ、こうだと考えいているばかりで、とにかく彼はいてもたってもいられず小屋を飛び出し、レイジを厩から連れ出して教会を出てきていた。

いつものように草のにおいに鼻を動かし、揺れる木々の隙間に星をさがしながらレイジは歩を進めた。しかし森に向けられていた耳が震えた。

耳をもと来た道に向けた。彼の耳に微かに馬の蹄の音が響いたのだ。首をあげ今度は首をそちらに向ける。

キツチョムがレイジの顔を不思議そうに覗き込む。

「ん？……どうしたのさ？」

その時だ、キツチョムの耳にも聞こえた。馬のひづめの音だ。レイジが見つめる道の先に彼は目をこらした。遠く微かにランプの光がちらちらと見えていた。

「レイジ、隠れるんだ！」キツチョムは手綱を引くと暗い森の闇へとレイジの首を向けた。

レイジは慌てて木の根を飛び越え闇に飛び込んだ。森の茂みに身を投じるとキツチョムはレイジを止め、道の様子を興味深げにうかがっている。こんなことは初めてのことだった。

「だれだろう？こんな時間に……」

微かに聞こえていた馬車うまのひづめの音はみるみる大きくなり、車輪の転がる音が森に響きはじめていた。

レイジ―は首を縮めて、巨木の影に身を摺り寄せた。

キツチョムは首を伸ばし枝葉の隙間に目を凝らした。

4頭の馬の蹄が地面を揺らし通り過ぎていく、黒い大きな馬車の車輪が小石を蹴り上げ悲鳴を上げていた。

「グレスフォードだ……、レイジ―！あれはきっとグレスフォードの馬車だ！！」

キツチョムは声を上げたが、レイジ―は後ずさりし森の茂みに入っていく。

「なにしてるんだ？いまの見てなかったの！？あの大きな帽子をかぶった少年はグレスフォードの馬の世話係だ！！すごいな……あんな、大きな馬車をたった一人で……」

キツチョムが馬上で感心しているとき、レイジ―は思い出ししていた。グレスフォードの屋敷で手綱を握り独り言をぶつぶつ言っていた少年のことを。なにやら自分に語りかけていたが、気にも留めていなかった。なんだか生意気な少年だった。でも、彼の体から漂ってくる厩の香りが心地よくてキツチョムがいなくても寂しくなかったし、怖くなかった。レイジ―は少年が嫌いではなかった。

「いこう！？あの馬車にはきつとアレーネ・グレスフォードが乗ってるんだ！！君なら追いつけるさ！！」そういうとキツチョムはあぶみを蹴り上げ、手綱を振るう。

レイジ―は茂みを飛び出し走り出したものの、首を振っていた。手綱を握るキツチョムがいやがうえにも彼の首を前に向ける。

『は、墓守が町の人間の馬車を止めるなんて！！無茶だ！あつてはならないことだよ！！』

しかし、その声が馬上のキツチョムに届くはずはなかった。彼はすでに馬車に向かって叫び始めていたからだ。

「おーい！！待ってくれえええ！！」

『神様……、僕はいったいどうなってしまうのでしょうか……！？』

ひたすら地面を蹴り、心の中でそう叫ぶ以外、彼にはなすすべがなかったのだった。

15. ダブル フェイトフル エンカウンター 2

グレスフォード家の馬車はようやくバルバドスの塔がみえるほどに、グレスデンの町に近づいていた。馬車の手綱を握るルッベ少年の胸は少し軽くなり、小脇に抱えていた鞭をそばに置き、シートに腰を落とすのだった。ほっと胸を撫で下ろしたのもつかの間、ルッベ少年は奇妙な叫び声を耳にした。かすかな叫び声だったけれど、ルッベ少年は小首を傾げあたりを見わたした。

馬の蹄の音と車輪の音、その合間を縫うようにして、また声が聞こえた。

ルッベ少年は腰を上げ、体を馬車の側面へと動かした。後ろを覗き見る。

「……!!」

驚きで声を上げそうになるのを必死で抑えた。リディアが後ろに乗っている。

いかにリディアアヌ・グレスフォードといえども、墓守を前に尋常でいられるはずがない、ルッベ少年はそう思うといそいで鞭を手にとった。

「おーい……とまってくれええ……」

遠くで叫んでいた声は少しづつ近づいてきているようだった。

「停まるだって!? あの墓守は馬鹿か!!」ルッベ少年はそう心の中で叫ぶと必死に鞭を振るった。墓守にあったことはあったが内心では彼も墓守を恐れていた。汗が額をつたい目元に落ちてくる。彼は汗をぬぐい、唇をきつく結ぶとさらに鞭を振るい手綱をきつく握りしめた。

車輪は悲鳴を上げて回転する。小石を飛ばし、大きな石に乗り上げると飛び上がった。

リディアは顔を上げた。馬車が恐ろしいほどにスピードを上げ始

めたのだ。ランプが激しく揺れ今にも落ちてくるほどだった。彼女は腰を上げ、カーテンを開いた。

「ちょっとルツベー！あんたなんてスピードだしてんのよ！！」

「…リ、リディア！いまちょっと黙っててよ！！」ルツベ少年は振り返りリディアを見た。手綱を振るう手を止めずに本気で怒っているらしいその眼を見つめた。

「いい加減にしないよ、落ち着いて考え事も…、ねえ…、あれ何かしら…？」

「な、なにつて墓守…！！？」ルツベ少年は言いかけた言葉を飲み込んだ。リディアの目はルツベ少年ではなくまっすぐ前に向かって見開かれているからだった。前に向き直るルツベ少年の目に奇妙な今までみたこともない風景が飛び込んできた。

グレスデンの町が霧に覆われていた。

まるでグレスデンの町が蒸し器にでも入れられているかのように霧につつまれているのである。町だけが霧に覆われていた。そのとき初めて町の光がはっきりと見えていなかったことに気付いた。霧に包まれたグレスデンの町の光はぼんやりとしてとても遠くに感じられていた。

しかし、町はすぐそこだった。

「き、霧だ…。リディア、あれは霧だよ！！」

「……。あ、あれはグレスフォードの霧よ……」

「……？グレスフォード！？」

「そうよ、あれは…。…はじめて見たわ」リディアはそういうと呆けた顔でグレスデンの町を凝視している。しかしルツベ少年はそれどころじゃなかった。グレスフォードの霧がなんのことさっぱりわからなかったが、墓守はもうすぐそこまで迫ってきている。

「あれは……。あの話はおとぎ話なんかじゃなかったんだわ！！」リディアは叫び声をあげながら満面の笑みをルツベに向けた。

「なにいつてるんだよ、いまそれどころじゃないんだ！！」ルツベは前を向き鞭を振るった。

「そう、そうよ！それどころじゃないわ！！町に危険がせまってるの！！」そうだとばかりにうなづくと同時に、リディアから満面の笑みは消え真剣なまなざしがグレスデンの町に向けられた。窓から半身を出し、まっすぐに霧に包まれたグレスデンの町を指さす。「あのグレスフォードの霧は城に、いえ、町に危険が迫っていることを知らせているのよ！！！」

「僕たちに危険がせまってるんだよ！！すぐそこまで墓守が来てるんだ！！！」

「え……！！？墓守？」

ルッベ少年は腰をかがめ身を低くすると両腕に力を込めた。叫び声をあげると同時に鞭と手綱の両方を力強く振るう。馬は悲鳴を上げた。目の前の霧に馬車は突っ込んでいく。霧が吹き飛び、冷たい空気が首筋をかすめる。しかし、霧の中はぼんやりとしていて遠くまで見通すことができない。馬車はその霧の中を疾走する。

馬の蹄が町の石畳を叩いた。町に入ったのだ。石畳に乗り上げた馬車は激しい音をたて飛び上がった。リディアは声をあげた。彼女の姿が馬車に吸い込まれるように姿が消える。彼女はしりもちをつき馬車の中を転がった。

「リ、リディア！！」ルッベ少年は振り向き揺れるカーテンを見つめた。中から声が聞こえた。

「へ、平気……！！！」

「ああ……」ルッベ少年はほっと胸を撫で下ろすと前を見た。

リディアはシートを掴み上半身を持ち上げると後部のカーテンを開いた。

そこには墓守がいた。鉤棒を掲げ、荒馬を従いはげしく体を揺らし霧の中を迫ってきていた。たしかに恐ろしい影だった。しかしリディアは恐れてはいなかった。彼女はその影を見つめた。

「墓守……。きつとあの時の……」そうつぶやくとリディアは墓守を見つめながら叫んだ。

「とめて……ルッベ!! 馬車をとめて!!」

15. ダブル フェイトフル エンカウンター―3―

ルツベ少年は驚き背後のカーテンを見つめた。とめられるわけなかった。墓守はもうすぐそこまできてるはずだ。鞭を振るおうと前をみようとした時だった。カーテンを開き、リディアが顔を出した。「ルツベ！馬車をとめなさい！」

「いやだ！！」墓守がそこまで迫ってきているのに、馬車をとめるなんてわけがわからなかった。ルツベ少年はまだ墓守を恐れていたし、グレスフォード家に墓守がやってきたことをリディアには絶対にしられてはいけないのだ。アレーネ・グレスフォードと墓守がなにを話したのかは知らない、だがそのことを絶対に知られるわけにはいかなかった。

「…ちよ、ちよっと！！…いいからとめなさい！！前を見て！！」

「…墓守が…！！！！」

「そうじゃないの！！とめて！！」リディアは恐ろしいほど目を見開き前を見つめている。

「だから霧だ……。あつ……。！！」ルツベ少年はリディアの視線をたどり前をみた。だがすでに手遅れだった。

道の真ん中に黒い影がうずくまっていた。人だった。どうやらその影は霧のせいだろうか馬車に全く気付く様子がなく背中を馬車に背を向けうずくまっていた。馬車は人影をいまにも轢こうとしていた。

二人は息を飲んだ。ルツベ少年は目をつぶり手綱を握りしめた。

15. ダブル フェイトフル エンカウンター―4―

キツチヨムは我を忘れたかのように手綱を振るい、アブミでレイジーを激しく蹴り上げていた。ひたすら馬車の影を追いかけていた。馬車がグレスデンの霧に包まれてはじめて彼はふと、我に返った。「あ、あれは……、レイジー、霧だ」

グレスデンの町を包み込んでいる霧が馬車を飲み込んでいく。渦を巻き、馬車の影が掻き消されようとしている。キツチヨムは霧を睨み付け、手綱を握りしめた。

「とまらないで！ 突っ込むんだ！！」町の前では馬と墓守は立ち止まり、息を合わせる習わしだった。少なくともキツチヨムとレイジーはそうしてきた。しかしこの時はそうしなかった。レイジーは首を振るうと霧を睨み付けた。

その時だ、キツチヨムの体が一瞬重くなった、なにかに押しつぶされるような、息苦しさを感じた。

レイジーは霧に突っ込んだ。霧は揺れて渦巻いている。行く先が霧でぼんやりとしている。馬車の影が激しく揺れながら疾走していくのがかろうじて見えていた。

霧に頬を撫でられながら、キツチヨムは一心不乱に見つめていた馬車から目を逸らし、右へ左へ視線を投げていた。いつもと違う何かを感じていた。町を包み込む霧だけじゃない、いつもの夜と何かが違う。そして彼の目はとらえた。それは自らが手にしている鉤棒である。鉤棒の三本の鉤爪、真ん中の新しく溶接した部分がぼんやりと白く光り輝いている。キツチヨムは目を見開きそれを見つめた。「うそだ……、鉤爪が……」

キツチヨムの胸は激しく高鳴った。

しかし、輝きは彼の目の前で次第にその輝きを強くしていく。

エギオンの広く大きな背中が思い出された……。ヴァルハラのものである……。魔よけのメダルだ……。

ある日、キツチヨムがソルマントの土を桶いっぱい詰込み小屋に運び込んだとき、エギオンは鉤爪をやすりで磨いているところだった。エギオンが寄進品集めの最中に鉤爪を一本折ってしまったのだ。それを溶接し終えたところだった。

「あ、鉤棒なおったの？」キツチヨムはエギオンの背中に語りかけた。

「ああ、新しく溶接したんだ」エギオンは立ち上がり、ベッドに腰を掛けなおすと満足げに新しく溶接した部分を眺め、やすりをあてた。

「そこだけ色が違うよ、黒くないね」

「はは、ヴァルハラはメダルを使ったからな」エギオンは満足げに笑った。

「ええ！！僕はあの模様気に入ってたんだけど……。それにあのメダルは魔よけだろ？冥界の川の渡し守に渡せばヴァルハラっていう天国に連れて行ってくれるんだろ？」

「ああ、たしかに……たしかにその通りだ。だがな、これを見てもろ」
そういうとエギオンは鉤棒の末端を持ち、桶を足元に置いたキツチヨムの目の前に溶接した部分を突き付けた。

「ああ、あの模様が浮き出てるね……」銀色に輝く溶接された部分には雲のような、水の波紋のような不思議な模様が浮き上がっていた。キツチヨムはその模様を指先で撫でた。

「地獄の炎を使って、溶かしたんだが……。模様は消えやしない。すぐ浮き上がってくる。ヤスリも無意味だな……。いいか、魔よけ、魔よけっていつているが、実際のところはちがう。ヴァルハラはメダルは危険を知らせる、そして一種の『試練』だな。ヴァルハラは戦いに明け暮れた英雄たちが迎え入れられる場所だ、死してなお戦いを運命とするんだ。それにふさわしい人間がこのメダルをもつ資格がある……。メダルの輝きは戦いの合図だ、ヴァルハラは神々に試され、決して背を向けることは許されない……」

キツチヨムは息を飲んだ。自分は騎士でも英雄でもなかった、ただこうしてエギオンと墓守をやっているだけだ。何者かと戦う理由など彼にはなかった。

「じゃあ、いらぬ。僕たちには必要なものだね。うん、鉤爪にはちょうどよかったかも。ははは」キツチヨムは安心したように笑った。

「そうだな……。だが、わすれるな。メダルの輝きは試練だ。決して背を向け逃げ出すことは許されない。残された道は、戦って勝つことのみだ」

「……や、やだなあ。もうメダルでもなんでもないだろ、ただの鉤棒さ、ははは」キツチヨムは桶をもち大窯に歩み寄った「いわれたとおり、墓場の土を持ってきたよ、デスダスト作るんだろ？」

「ああ……」エギオンは鉤棒を壁に立てかけると、大窯の前にしゃがみ込むキツチヨムの背中を見つめた。「……そうだな、ただの鉤棒だ……」

今、銀色の鉤爪はキツチヨムの目の前でその輝きをますます強くしていく。

「うそだ!! 危険なんて……試練なんてあるわけない!! 僕はヴァルハラなんて行きたくない!!」キツチヨムは手綱を握りながらひたすら馬車の影をにらみながら、頭に浮かぶエギオンの声を振り払っていた。

15. ダブル フェイトフル エンカウンター―5―

リディアはふさぎこむ影を、眼を開き見つめ続けていた。彼女は今にも轢かれそうになっている人影を前に瞳を閉じることができなかった。彼女が身を震わせその眼を閉じようとしたとき、人影が顔を上げたのを見たのである。その眼は赤くひかり、ちらちらと炎のように揺れていた。彼女はそれを見て取ると瞳を閉じるのを忘れ凝視したのである。

そして、馬の体で影が見えなくなったその瞬間、耳を塞ぎたくなるほどの激しい鉄の音が響き割った。

黒く大きな影がまるで黒い大きな鴉のように飛び上がったのである。その影の中には真っ赤に燃える瞳。ちらちらと口元に蛇の舌のような炎が見えた。

ベック少年は両手で顔を隠しうめき声をあげている。リディアは窓から身を乗り出しベック少年の肩を掴み激しく揺らした。

「大丈夫！！轢いてないわよ！！」

「え……」ベック少年は顔から両手を少し引き離し覗き見るようにリディアを見た。

「飛んだのよ！！私たちの頭の上、馬車を飛び越えたの！鳥みたい……」

「鳥だったの！？」

「ちがう……！ちがうわ！！」リディアはそういうと恐ろしい鉄の音がいまだあたりに響き渡っていることに気付いた。

「シッ……」リディアは人差し指を口に押し当てベック少年に黙っているように促した。

「なに……？なにこの音……？！」

「私たちを追ってきてるんだわ……ベック止まっちゃだめよ！！いそいでスピードを上げて！！」

ベック少年はなにか言いたげな顔をしたが、恐怖からか声がでな

かった。何度もうなづくと震える手で鞭を取り、馬の体を激しくたたき上げた。

リディアは馬車の中にいそいで取って返した。車内で膝間づくど座っていたシートに手をかけた。がたりと音を立てたが、シートはびくともしなかった。リディアはシートを揺らした。そして思い出したかのようにシートを自分の方へいったん引いた。リディアの方へ音を立ててシートは引き寄せられた。シートを持ち上げると彼女はその中に首を突っ込んだ。

馬車の隠し箱の中にはいろんなものが見て取れたが、多くは日用品にガラクタだった。彼女は手を突っ込み片っ端からものを掴んだ。傘を取り出すと「違う!!」そういつて箱のそとへ放り出す「これも違う!!」そういつて箒を放り投げた。焦れば焦るほど見当違いのものが出てくる。斧を取り上げると「ああ、重い、ちがうの!!」彼女の求めているものは一つだった。ナイフでもなかった。それは彼女の手に触れると小さく音を立てた。重くずっしりとしていたが、彼女のがれの武器だった。細く長いサーベルを彼女は箱の中によやく見つけることができた。それを取り上げると胸に抱きしめた。

胸の高鳴りを感じた。体は恐怖で締め付けられ動くことができなかった。鉄の弾ける音がいたるところから聞こえてくる。どの方角から聞こえてくるのか見当がまったくつかない。戦いたいと思う心とは裏腹に体は石のようになりただただ震えていた。

「馬車をとめるな!! 絶対に止めちゃいけない!!」

有無をいわせぬ力強い声に彼女は瞳を見開き、後部座席の窓を見つめた。墓守の影がすぐそこまで近づいてきていた。彼女はその影を見つめた。いつの間にか三つ又の恐ろしい鉤棒の先端が白く銀色に輝き、あたりに崇高な輝きを放っていた。

「彼は……見方だわ!!」

彼女は心の中でそう叫ぶと、腰をあげ左手のカーテンを勢いよく開いた。そこには流れゆく霧と石畳、怪物の影はなかった。反対側

のカーテンに向き直り、彼女はサーベルの鞘を握った。いつでも握りに手をかけられるように身構える。そして、耳を澄ました。鉄の音は確実にカーテンの向こうから響いている。すぐ扉の向こうにいる気配すら感じた。

そして意を決すると、カーテンを勢いよく開いた。リディアはつきりとその恐ろしい顔を見ることがなった。まるでドアにへばりついていたかのようにスプリング・ヒールド・ジャックの顔がそこにあった。

彼女は握りを強く握りしめ勢いよく力を込め、サーベルを引き抜こうとした。しかしサーベルはガリツと鈍い音を立て、鞘の口元から赤い錆を吐き出した。半ば鞘から出た刀身は赤い錆にまみれ動きを止めていた。

すさまじい音とともに扉の一部と窓ガラスが破壊されカーテンが刃物で切られたかのように引き裂かれた。

リディアは腕を上げ身を守ったがその勢いに吹き飛ばされたかのように腰を落とした。

「そ、そんな……」彼女は鞘からサーベルを抜こうとするが頑なに動く様子はなく赤い錆が擦れ落ちてくるばかりだった。ふと目をあげると前部の窓を見た。ルツベの声が聞こえた。馬を煽っていた。

彼女は急いで立ち上がると窓から顔を出した。

「ルツベ何をしてるの!!」彼女はそういうと体を伸ばしルツベの襟首をつかみ引っ張った。

「ああ……!! 馬車が……手綱が……!!」

「なにいつてるの!? それどころじゃないのよ!!」無理矢理にルツベの体を窓の中に引きずり込もうとする。「離しなさい!!」手綱を握るルツベを強く引っ張る。ルツベは諦めたのか手綱を離しリディアの体を掴んだ。

二人の体が馬車の中に転がり込んだ瞬間、窓の外が赤く染まり炎が立ち上った。ランプは吹き飛び馬車に火がついた。

ルツベは両手で頭の上のハンチング帽を掴み叫び声を上げた。

「ルッベ！大丈夫！！私がついてるわ！」そういうとりディアはルッベを抱きしめた。そして錆びついたサーベルを手に取り鞘から引き抜こうとする。鈍い音を立ててサーベルは勢いよく鞘から飛び出した。しかしぼろぼろの刀身は赤いさびにまみれ鉄くず同然だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5274x/>

墓守キッチンのおとぎ話

2012年1月5日19時45分発行